
美しき翼～父の回想録～

PLUSMAKER

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

美しき翼／父の回想録／

【Nコード】

N5303F

【作者名】

PLUSMAKER

【あらすじ】

大学ノート三冊にびっしりと書かれた原文を、PLUSMAKERが編者と共に一年半をかけて体裁を整えた手記です。戦争観を変えらるようなものでも、悲惨さにフォーカスしたものでもありません。七年という青春の月日を戦闘機のパイロットとして、戦争の中に過ごしたある若者の記録です。●著者／S・H●編者／M・H●編集プロデューズ／PLUSMAKER

はじめに（前書き）

お断り ■ 文中ではほとんど実名を記しております。ご本人、ご家族の方にはご迷惑がかかるかと思いましたが、真実を伝え戦争の愚かさを考え直すために、大半は敢えて原文のまま差別用語も含め記しております。ご理解の程よろしくお願い致します。また、原文は走り書きのため、文法におかしな表現は訂正し、旧字、旧かな使い、方言についても書き換えて読みやすくしております。できる限り原文の表現を残すよう校正しましたが、行き届かぬ点や校正洩れにつきましては、何卒ご容赦ください。

はじめに

太平洋戦争が終わり戦後も還暦を過ぎ、この苦難の時代を生きた人々にとつて、戦争とは何であつたのか？今もなお、様々な問題を抱え苦しみ悩む人々を見る時、「責任」という重みを避けて通る事はできないように思う。

父は昭和も終わりかけの70歳になる前になつて、ペンを握り自分の体験を綴り始めた。20歳で兵役に就き、七年の軍隊生活を経て復員した。田舎の生家で農業をしながら自分を見つめ直し、また戦争を問い直していたのだろうか？

私は子ども時代、よく父にせがんで戦闘の話をして貰っていた。自分から進んで語る事のなかつた父だつたが、決して不機嫌ではなかつた。むしろ、畑の中で見る無口な父とは別人のような饒舌だつた記憶さえある。子ども心に際どい罪作りの質問を、たくさんしたような気がする。父はその一つ一つの質問に対し、丁寧に身振り手振りを交えながら分かりやすく説明してくれていた。今は断片的にしか記憶にないが、唯一、撃ち落された飛行機の人がどうなつたのか、気になつて仕方がなかつた。撃ち落とす場面を聞きながら、僕は興奮してしまつた。父が誇らしかつた。しかし、子ども心に「撃ち落とされて死んだ人がある。その人は誰だろうか？悪い事をした」と複雑な心境だつた。

また、負傷した時の生々しい話と身体に残つた傷跡を、風呂に入つて触るのも楽しみの一つだつた。肩に残つた大豆ほどの黒い塊をさすりながら、「これは弾か？」と聞いた。そのたび父は、「弾はここを通つて、ここを突き抜けて行つたのだ」と右足を見せてくれた。今もその傷跡を思い出すたび背筋が寒くなる。

その父も平成17年の夏、この世を去つてしまつた。三冊のノートに綴られた回想録を父の願いとして、皆様に読んでいただきたく、ここに連載する事に致しました。

編者 / M · H

はじめに（後書き）

- 2009年10月22日よりSF映画シナリオ「クリムゾンX」を連載。

<http://ncode.syosetu.com/n38011/>

第一章・入隊　↳軍隊生活と飛行兵志願（１）日本国三大義務と徴兵検査

日本国民であれば三大義務が憲法で謳われていた。第一が納税の義務、第二が義務教育、第三が兵役の義務だ。前記二つはここでは触れない事にし、兵役の義務について述べる事にする。

日本国男子は満20歳に達したら徴兵検査を受ける事になっていた。『甲乙丙丁』の種別に分けられ、甲種合格になった者から順次入隊し、二年の軍隊教育を受け一旦兵役から離れる。外国と戦争にでもなれば義勇奉公で戦地に赴き、国を守る任務が課せられるが、それで何事もなければ二年で除隊する。在郷軍人となり郷土にあって国の守りになるという制度になっていた。

昭和13年8月、僕は20歳となった。当然の如く徴兵検査の通知が来た。小学校時代の男子友達五人揃って、黒木町の国民小学校で検査を受けた。僕を初め四人が甲種合格で、一人が乙種合格となった。その夜、鳥越の柴尾さん方の飲食店で祝杯を上げ、したたか酔いも回った。

しばらくして役場より兵科の通知が来た。僕は飛行兵だった。「やった！」小躍りするほど嬉しかった。中学校時代の三年生と四年生の時、少年飛行兵の試験を久留米で受けた事がやっと実ったのかと、その時は取らぬ狸の皮算用だったが、やっと実現するのかと・・。四年生で受験した時は、当日で合格の印が押され身元調査の結果、通知するという事だった。

当時、僕が久留米市梅満町に下宿し自炊していた時、厳めしい軍服の憲兵が調査に来た。郷里の父母の様子とか兄弟の事等を聞かれ、追って通知すると別れたが大した事はなかった。その時は残念ながら不採用の紙切れを受け取った。

残念無念の思いが今度の徴兵検査で、やっと飛行兵の焼印が押されたのかと思うと、心躍るばかりだった。一つ違いの兄も一年前、飛行兵として台湾の屏東航空隊に入隊し、無線の技術を受けている

らしかった。兄に続き僕も大空の夢を追った。

ほどなく役場から【昭和14年1月10日、朝鮮平壤第二航空教育隊に入隊せよ】の通知があり、そのため【1月7日零時までに、下関波止場に集合せよ】との事であった。

ところで20歳になった男子を『壮丁』と呼んでいた。何で『壮丁』と呼んだのかは知らない。成人式の『成人』と同じ意味かも知れないが、ちょっとイメージが違うようだ。

第一章・入隊　ゝ軍隊生活と飛行兵志願ゝ（2）陸軍生活第一歩

役場からは大石茂氏、親族からは小井手行雄氏の付添いで下関まで送って貰った。

受付が終わるともう軍人の部に入る。あらかじめ用意された軍服に着替え、“見事な兵隊さん”となった。陸軍飛行二等兵というところだ。総員240、50名だったか定かでない。

翌1月8日には家族の見送り人とも別れ、夕方乗船。関釜連絡船『興安丸』の人となる。乗船後、ただちに夕食のテーブルに着き、鼻をくすぐる匂いのおいしいご馳走に舌鼓を打った。船は静かに滑り出していた。

1時間も経った頃、船はだいぶ揺れて来た。船室に横になったが、船酔いが回って来た。海上は風雨でしけていた。揺れるのが当たり前だ。急いで上甲板の便所に駆け込む。胃の中が空っぽになるまで反吐してしまったが、船室へ戻っても尚、酔気は治まらない。また甲板に上がって吐くも胃液が少し出るばかり、船室にて横たわるものの上下左右に揺れて地獄同然。「もう二度と船に乗るのはまっぴら」という思いは、終生つきまとった。

翌朝、釜山港に着いた。下船して気分もだいぶ良くなったが、頭痛は止まなかった。20分余り行軍して神社の境内で休止があった。夜の汽車の時間待ちらしかった。平壤まで15、6時間かかるらしい。

翌1月10日朝、平壤到着。隊列を組んで航空教育隊の営門を潜った。緊張した一瞬だった。ただちに各内務班に分かれ、僕は十五班となった。今日から軍隊生活の第一歩が始まった。入隊式には厳めしい大佐の隊長訓示があり、寒気のため手足は痺れ感覚をなくした。

軍人としての基本動作が、凍りついた営庭で毎日毎日続いた。不動の姿勢から拳手敬礼、右向け、左向け、回れ右、前へ進め、早足、

駆け足等。これらの動作の終わりには、必ず早駆けが課せられた。
「向こうの電柱まで早駆け始め！」これには参った。地面が滑るの
で早く走れない。どん尻から10人はもう一回早駆けをくらう。二
度目はもうヘトヘト。辛い思いも何度かあった。

動作の基本が終わると今度は三八銃を渡され、その取り扱いや手
入れはもちろん、屋外での訓練。捧げ銃、立て銃、担え銃立撃ち、
膝撃ち、寝撃ち等、一通りの訓練が約3ヶ月続いた。そこで各兵科
に分かれる事になった。

第一章・入隊　ゝ軍隊生活と飛行兵志願ゝ（3）二つの希望

自分の希望を二つ書いても良かったので、僕は第一志望を『無線』、第二志望を『整備』と書いたが、上官の判定で『金属工手』という命が下った。鍛冶屋仕事だった。金属工手には他に気象、武装、縫皮工手等に分かれていたのだが、とにかく僕は鍛冶屋の仕事なんてやった事がない。田舎で鍛冶屋の仕事は見ていたが、できる筈もなかった。飛行機に乗れるものとはかり思っただけで入隊したが、こんな結果になるなんて落胆もいいところだった。

金属工手の仕事について述べてみよう。まずバラック建物の中で直径3cm、長さ5cmの丸い棒が渡され、それを火炉に入れて赤くなったのをハンマーで叩き縮める。そして4cm角の立方体に仕上げるのだった。ふいこの動作は古参兵がしてくれるので、僕等は重いハンマーで先叩きをする役割。だいたい形ができた物を万力に挟み、3cmの大きな平やすりで面を削り、4cmの正立方体に仕上げねばならない。やすりのかけ方も肘が上下にならないよう、水平にかけるのが最初は難しかった。どの辺も4cmに仕上げるのには苦心した。一方を合わせようとすれば他方の寸法が狂ってくる。面が水平でないといけない。ヘラで削ってモルタルで磨くと、光が反射してとても綺麗だった。

次が鉄板の溶接だった。3cm位の鉄板と鉄板を溶接するのにアセチレン瓦斯で温め、展着棒を溶かして接着する。鉄板と鉄板の温度を同一にして、展着棒を溶かし流し込むのがコツで、僕はだんだん上手になった。しかしジュラルミンの溶接は難しかった。ちょっと加熱が過ぎると、サツと溶けておじやんになる。飛行機はほとんどジュラルミンだが、この溶接ができるには何年かかるだろう。ちなみに検閲の時、僕は鉄板の溶接を見て貰ったが好評だった。

第一章・入隊　↳軍隊生活と飛行兵志願（４）内務班

内務班での検閲は厳しかった。緊張のひとときだった。整列している所へ上官のお偉方が十数人入って来て、やれ「【軍人勅諭の五誓文】を言え」、あるいは「【内務規定の第一項】を言え」とか、「銃の手入れを分解してやってみよ」等、いろいろ注文や質問が飛び交う中、僕に矢玉が当たった。

内務班の窓際の壁に直径3cm位、長さ12m位の麻縄が、大きな輪となって吊り下げられていた。寝台に上がらなければ外せない高さである。何のためにあるのかは事前に教わっていた。「あれは何をする物か？」と僕は名指しされた。「はい。非常時にあの麻縄を窓から下ろし、屋外に避難するための物であります」と答えたとたん、教官が「今、非常時だ！どうする？」。まごまごしてられない。僕は勇気を奮い寝台に上がり麻縄を外して、窓から屋外に投げ下ろした。そして、それを伝ってスルスルといとも簡単に地面に降り立った。二階の窓から教官が、「よし、上がって来い」と言われたので、外回りで廊下の階段を上がり、内務班に帰って来てホツとした。

すでに検閲官は隣の班に行ってしまった、僕の班は静まり返っていた。検閲官の講評はおおむね良好、初期の目標は達せられたとの事。僕等初年兵としての教育成果は上がって、役に立つ新兵になったという事だった。

この一期の教育期間内に幹部候補生の採用試験があった。これは中等学校以上の学歴を有する者に限られ、僕も受験を申し込んだ。

中学校、高等学校、大学の卒業生120名余りの志願者だった。70名余りが合格したが、僕は80番位で不合格になったと、僕の班付の小山上等兵がこっそり教えてくれた。僕に受験を勧めたのも彼であった。彼は字がとても上手なので、本部の書記をしていた。

昼間はほとんど本部で過ごし、夕方は内務班に帰って来て、寝る頃には僕の横にいた。僕は彼の寝具、シャツ、袴下、靴下の洗濯、靴の手入れ等を任されていた。その僕に「合格の順位までもう少しだった」と慰めてくれるとても温和な古参兵だった。

酒保（兵舎内の売店）の大福餅を買ってきて僕の寝台の毛布の中にこっそり入れて、寝て食べるよう教えてくれた事もあった。人情味のある古参兵だった。僕は彼がなぜ上等兵のままでいるのか不思議でならなかった。下士官になれば煩わしい任務があるので、いつその事、上等兵のまま過ごし内務班でのんびりしたかったのかと思われた。彼は招集兵の四年生だったように思う。老齢の巡査みたいな上等兵であった。

第一章・入隊　―軍隊生活と飛行兵志願―（5）九七式戦闘機

営内の至る所には大きなポプラの並木があった。枝が上に伸び鮮やかな青葉が覆い繁り天を突く勢いの木々は、いつも見るたびに僕を勇気づけてくれているようで、このポプラをとっても好きになった。内地には見られない木だと思っていたら、串毛小学校の横に3本余り植えられているのを終戦後に見た。しかし樹高はかなり真っ直ぐ伸びていたが、葉が半分も繁っていないくて貧相な姿をさらしていた。内地向きの樹木ではないのだろう。それも今は道路拡張で伐採され跡形もない。

昭和14年7月、一期の検閲が終わってまもなく、僕等は北鮮会寧の飛行場大隊に配属される事になった。訓練にも慣れ、ちよつと一息ついたところだった。

ある日、ポプラの葉陰に激しい爆音と共に小さな飛行機（単葉単発低翼）が、編隊を組んで離陸上昇する姿を見た。初めて目にする単座（一人乗り）の戦闘機だった。

後で分かった事だが、それは新鋭機九七式戦闘機で『ノモハン事件』に出動して行く部隊だった。隊内で生活していれば外部の状況は一切分らないので、それがどこの部隊だったか定かでない。

昭和12年7月、『盧溝橋事件』が起こり北支戦線も次第に拡大しているらしいが、僕等はそのニュースも聞かされない。ノモハンは北満のどこにあるのかも、どうしてその事件が起こったのかも知らない。ただ久しく忘れかけていた僕の“飛行機操縦の夢”が再び燃え上がり、この戦隊に惜しみない声援を送って活躍を期待した。

昭和史から簡単に拾ってみる・・・。

昭和14年5月、外蒙軍が北満西方国境のノモハンに不法越境して満州国軍と交戦し、6月下旬からはソ連軍が加わり激戦となった。ソ連の戦車部隊と砲兵の反撃に遭い敗退し、9月15日、モスクワ

で休戦協定が成立したが日本軍の損害は甚大だった。

日本軍の空中部隊は、最初は大いに戦果を上げたものの、ソ連軍のミグ戦闘機のロッテ戦法（編隊戦法）により後半の被害が多くなり、これを戦訓として単機戦法から編隊戦法に変わり、戦地では強制された。空中戦闘で何機も落として金鷄勲章を貰った浜田曹長、前畑准尉、垂井中尉はこのノモハンでの殊勲者だった。

第一章・入隊　ゝ軍隊生活と飛行兵志願ゝ（6）ノモハン事件と満州国

昭和14年7月、北鮮会寧の飛行場大隊に転入した僕等にも、このノモハン事件に出動がかかった。会寧の飛行隊（九五式水冷複葉戦闘機）も動員され、その整備のため北満に転進した。この時、僕は留守隊に回され衛兵勤務、不寝番等で多忙を極めたが2ヶ月余りで帰還した。

ノモハン事件で地上部隊の苦戦が耳に入った。多数のソ連の戦車部隊に圧討され、ついにはタコソボ防空壕（兵士一人が潜むように掘った穴）の中から地雷用の爆弾を抱いて戦車のキャタピラに肉弾自爆し防戦したとか。停戦して多数の捕虜となった日本兵とソ連兵との交換には、日本側は自国の兵に唐米袋を被せて引き取ったとか。日本兵としての不名誉を嫌った仕打ちの結果、顔を見せないための手段で、捕虜となるより自決すべき事を上層部が暗示したものだ。た。

この事件の後、陸軍大臣の東条英機が戦陣訓を作り「生きて虜囚の辱を受けず、死して罪禍の汚名を残す事勿れ」という一項が加えられた。その後、太平洋戦争中の至る所で玉砕、死守を強要され幾多の将兵が犠牲となった。そのきっかけとなった戦陣訓が、このノモハン事件の置き土産だったと思う。外国の軍隊では負けると思われると降参が早く、捕虜となる場合が多いのとは逆の現象だった。

また、この事件の前後にはソ満東部でソ連軍の越境での小競り合いがあつたが、国境警備日本軍の抗戦により、ソ連軍は敗退して事なきを得た『張鼓峰事件』という紛争があつたと聞く。

満州国の事に触れてみたい。

昭和4年、中国は長い内乱の後、蒋介石がやっと中央部だけの支配権を確立する一方、中国東北部（満州）は張学良の軍隊が支配していた。これに対し日本は積極的な大陸政策を採用し満州に目をつ

けた。

昭和6年9月18日夜、関東軍の奉天守備隊が中国軍の兵営のある奉天北大営から、南へ600mほどの地点、柳条湖で南満州鉄道（俗にいう満鉄）の一部を日本軍自ら爆破した。これを口実にして北大営を攻撃。また、他の連隊が奉天城を攻撃し占領してしまった。この『柳条湖事件』が『満州事变』の発火点となった。

もともと日本は、日露戦争の勝利で南満州鉄道の権利を得て大連、新京、奉天等の支配権を握っていたものの、満州そのものは握っていなかった。しかし、この柳条湖事件をきっかけとして日本軍の出兵となり、日本国政府の慎重な態度に軍部が独断で事を起こした。満蒙開拓を国の施策とし、開拓民を送り豊富な沃土を農産物の宝庫としたいという計画だったが、政府は他国への侵略じみた行動に二の足を踏み、腰を上げないので軍部が先駆けとなった。

当時、満州には『関東軍』という最強を誇る部隊がいた。まず、関東軍が行動を起こし内地から動員を求めたが、政府はこれを拒んだようだった。戦況不利になった関東軍は、朝鮮にいた朝鮮守備隊を独断で出兵させ戦果を拡大していったため、政府もやむなく内地からの出征を認め戦火はさらに拡大していった。

昭和7年になると満蒙開拓を主目標として内地から移民が募集された。資料によると、その数33万人にのぼり、集団で生活群落を作って農作業を営んだ。しかし敗戦となり内地に帰還できず死亡した者、その数18万人に及んだという。悲惨な末路であり、我が子を捨てたり地元民に預けたり、食料と交換したりして引き揚げた者も多かった。現在も親探しが続き、肉親の情の繋がりの深さに涙を誘われる。

この移民を守るための関東軍だったのに、南方戦線が不利になるに従いこつそり動員され、国境警備は留守に近かったと聞いた。終戦直前、ソ連軍が国境を越え進軍して来た時は、ほとんど無抵抗だったようだ。開拓民の無念さを思い知らされた。

昭和7年3月1日、満州国が初めて建国し溥儀氏が満州国の天皇

として就任したが、内実は日本国の支配するかいらい政権であつた
ようだ。

第一章・入隊　ゝ軍隊生活と飛行兵志願ゝ（7）大東亜戦争に突入

昭和8年、我が国が国際連盟を脱退した当時、僕は久留米の明善校の三年生だった。全校あげて駅のホームに外相の松岡洋右を出迎え、日の丸で感激の旗を振った。彼は丸刈りの白髪に丸顔が印象に残る。国を上げて戦争突入の勢いだった。

話は遡るがその前年の昭和7年5月15日、いわゆる『五・一五事件』のクーデターがあった。軍隊の出動で政府の犬養首相が殺害されたりした。

軍の力が暗躍する中、昭和11年2月26日のいわゆる『二・二六事件』が帝都の空を揺るがした。一部の青年将校の率いる1,500名余りの将兵が【昭和維新・尊皇討奸】を揚げクーデターを起こし、帝都は未曾有の反乱の渦と化した。帝都には戒厳令が敷かれた。反乱軍は帰順させられ、兵隊同士は戦わずして鎮圧された。それ以来、軍の勢力が次第に強まり満州侵略も公然となった。

昭和12年7月7日、『盧溝橋事件』が北支北京西方郊外で起こった。日本軍が仕掛けた鉄道爆破で先端が切られ、北大営の支那軍と交戦し敗走させて北京市を乗っ取った。蒋介石との協定もうまくいかず次第に事件は拡大し、この年の12月20日に日本では大本営が設置され、いよいよ戦争態勢になった。

昭和12年8月9日、上海の海軍陸戦隊大山中尉が、保安隊に殺害されたのを因として13日からの交戦状態が次第に拡大し、南京陥落までに至った。日中戦争が本腰となり中国全土に至り、そのまま大東亜戦争に突入していった。

僕が昭和6年に明善校に入学して、11年に卒業し入営するまでの6年の間、日本の政局や国内外の状態は激動の時局だった。

以上不備ながらいつまんで戦局の一端を書いたが、詳しい事は昭和史を紐解いて貰いたい。以下、本題に戻る事にする。

第一章・入隊　ゝ軍隊生活と飛行兵志願ゝ（8）平和なノモハンの日々

ノモハン事件に出動した僕等の飛行場大隊は、平和そのものの日々が続いた。僕は第一中隊で、第二中隊が隣の兵舎にいた。この二個中隊合わせて飛行場大隊といい、第七飛行戦隊（九五式水冷複葉戦闘機の部隊）の後方支援をしている。九五式戦闘機は空中戦が得意（つまり旋回性能が良い）で、離着陸の滑走距離が短く、小飛行場での使用が可能なため愛用されていた。尾輪が鉄の櫓板そりで、地面に食い込んで滑走するため、その尾櫓の補修は金属班の重要な仕事だったが、僕等初年兵の仕事にはならなかった。空ではこの単機戦闘訓練が時々見られた。僕は手に汗握る思いでそれを観戦し満喫した。

飛行場の北側500m余りの所に豆満江が流れ、そこがソ連との国境となっていた。特別の設備もなく無造作に川に入る事ができた。ある日曜日、戦友と二人で向こう岸まで渡った。別にソ連からの発砲も警告もなく、地元民が木材で組んだ筏を操っているのみ。3隻、4隻と連なって下っている。川は浅く1m位しかない。流れも河口のため緩く、歩いて渡って越境したが不安は消せない。喜声もそこそこに引き揚げたひとときだった。平和に見える朝鮮とソ連国境が不思議だった。ただお互いの監視哨から見ていたのではと思うと、ぞつとしたものだ。

兵舎の周りは地元民のマクワ瓜畑が広がっていた。ある夜、こっそり第二中隊の兵が2、3名そのマクワ瓜を盗みに行ったとか。だが夜番に発見され逃げ帰ったまでは良かったが、軍帽を落としてしまった。万事休す。軍帽に名札がついているので地元民の届出で犯人が分かり、持ち主の兵隊は嚴重な処置として重営倉入りしたようだった。

飛行場には塀がないため簡単に外部に出られるようになっていた。そんな無防備の部隊だったので、敵のスパイの好餌になっていた事だろう。

部隊から30分余り歩くと会寧の町があった。二度ほど外出したが、憲兵（上等兵）が馬で巡回していたり、出会う上官には敬礼せねばならず緊張の連続であった。

第一章・入隊　ゝ軍隊生活と飛行兵志願ゝ（9）下士官候補

昭和14年9月1日、僕は陸軍一等兵になり肩の星が二つになった。そして12月1日、上等兵に進級。下士官候補者を志願したので、12月12日には教育のため満州国白城子の平安鎮に至った。部隊から13名の下士官候補を僕が引率して出発した。

途中の新京には片山幸太郎氏と結婚した姉が「乾写真館」にいた。あらかじめ手紙で連絡し、吉野町にある写真館を訪れ久し振りに顔を合わせる事となった。さっそく僕等13名は中華料理店へ案内され、初めての中華料理を味わった。最初は物足りなかったが、ただん料理が増え最後には食べ切れないご馳走に皆、満腹になった。

夜の汽車で新京を発ち、翌日には平安鎮に着いた。平屋造りの兵舎が十数棟並んでいたが、周りは平原ばかり。太陽は地平線から昇り地平線に沈み、遙か西方に公安嶺の峰々が起伏を見せるにとどめている。

下士官候補者教育といっても特別の教育はなかった。野外では銃剣術ぐらいなもの、兵舎内では学科の講義、典範令の復習、内務規定の繰り返し等々。僕は字が上手との事で内務規定のガリ版刷りを依頼され、原紙2、3枚切って本部で40枚余り刷るのが日課になった。40部刷り、綴じて本部に提出して一日が終わる。それが2週間も続いたのでうんざりした。

白城子駅の穀物集積場の警備に10名ずつ派遣されるのも日課だった。駅にある唐米袋に入った大豆と高粱の山積みの間を動き回り警備をする。先客の連中が故意に大豆の袋に穴を開け、飯盒にいっぱい詰め込み、知らん顔で内務班に持ち込んだ。ペチカの炊き口に飯盒の蓋をかけ、大豆を炒って食べる事を覚えた。このような事が何度かあったが、時には余りにも火が強すぎて飯盒の蓋が熔けて失敗した事もあったようだ。

第一章・入隊　―軍隊生活と飛行兵志願―（10）平安鎮の日々

『燎原の火』という言葉がある。夜になると平原の彼方に赤い火が糸通しのように一線に見える。野火が草原を焼いているのだ。失火が故意か果てしなく火は連なる。

ある夜、非常呼集のラッパに起こされた。兵舎の近くまで延焼して来た野火だったが、事なきを得た。

また、ある朝早く非常呼集のラッパに起こされた。それは炊事場の火事だった。厳寒では水は凍り出ない。ただ見ているばかり、前は焦げるように熱く背中では凍えるような寒さだったが、一棟だけの火事で終わった。この火事によって炊出しが白城子からの運搬となった。飯は凍りついたように冷たく、味噌汁はこぼれて半分しか椀に入らず空腹の連続だった。

1ヶ月に1回余り衛兵勤務に立った。風の強い夜だった。天幕（テント）の音がバタバタと激しく、歩行が困難な状態。風呂場のある建物の中で時間を稼ぐ。湯の温度で室内はぐつと暖かい。零下20度だった。夜が明け始める頃は、零下10度に気温が上がりとても暖かく感じた。衛兵勤務は辛いものだった。

ある朝、内務班でヒソヒソ話が始まった。その理由は隣の兵舎窓から火の玉が出て行ったのを衛兵が見ていたという事だった。「いや嘘だ。何かの錯覚だろう」「いや、実際見た。嘘じゃない」の問答があっていた。僕も否定の方に偏った。

ちょうどその日、戦闘機の訓練があった。ところが空中衝突し、一人は落下傘降下で助かったが、もう一人は即死した事故があった。「火の玉の出た所が死亡した操縦士の寝台のある窓付近だった」との衛兵の証言があつて、まったく偶然とも言えなくなってしまった。

平原にはノ口という鹿に良く似た動物が群生している。絶好の獲物である。車で追うと左へ左へと逃げるため、その内径の線を追うと訳なく射止められる。

本部の兵隊だろうが、そのノ口を1頭射止め夕飯の肉汁を味わった。ところが歴代の訓練部隊には、『ノ口は平原の神様だから獲ってはいけない。必ず事故が起きる』との言い伝えがあった。その証拠に飛行機事故と合わせて、炊事場の火事があったのも「まんざら嘘ではなかったのか」と反省させられ、その後ノ口の捕獲は中止となった。

ある日、本部から【空中勤務を志願する者は申し出よ】の達しがあった。“飛行機に乗り空を飛びたい”というかねてからの希望が、むくむくと盛り上り喜んで申し込んだ。全部で30数名だった。第一次試験がハルビンの陸軍病院であった。結果は発表されなかったが、中学時代に受験の経験もあり余り心配もなかった。

なぜこんな予期しない制度が採用されたのか想像するところ、陸軍の操縦士の養成は士官学校と少年飛行兵からで行われていたが、戦局拡大と共に操縦士の消耗がひどく、規定の養成では間に合わないようになり、下士官からも操縦士を急遽採用する事になったようだ。これも飛行隊ばかりでは数的に少ないので、一般兵科から下士官を飛行隊に転科させ空中勤務者の志望を採ったようだ。

僕の中隊にも伍長に曹長の他、兵科から5、6名が転科して来て内務班付になった。兵科の入り交じった内務班となつて、何だか妙な気分になった。僕と同期の操縦学生になって内地へ入校した藤原軍曹も、その時に歩兵科から転科した十一年兵だった。

教育期間も終わり別れの慰労会があった。平原も緑草が一面になり、兎狩りが実施された。全員一列横隊でぐるりと円形を作り、周囲から缶を叩きながら次第に締め、テニスコート用の網を張ったその中に最後は追い込んで捕獲する段取りだ。

第1回目、二匹が円内を右往左往して最後の網に入らず、兵隊の中を必死で逃げ回るので失敗してしまった。2回目の作戦では間隔をできるだけ詰め、網元の操作も慎重にした結果、二匹の獲物を上げた。逃げまどう兎を棒切れで叩くが、なかなか当たらず難しかった。その二匹が夕食の鍋汁の具となり舌鼓を打った。

第一章・入隊　ゝ軍隊生活と飛行兵志願ゝ（11）無許可搭乗

いよいよそれぞれの原隊に帰る事になった前日、内務班で一部の兵隊が興奮した口調で話をしているのを、何事ならんと耳を欬てたところ、飛行機に便乗して空中散歩したとか。事情を聞くと爆撃機の部隊が明日帰隊するので、調子を見るため試験飛行で離着陸しているとの事。「しめた。僕も乗りたい」詳しく聞いたところ、その飛行機の機長に懇願したら乗せてくれたと言う。実際はそんな事はできない。事故でもあれば大変な事になる。しかし、この機会を逃したらまたと好機がある筈がない。

一人では気が引けるので戦友の柴伍長に耳打ちしたら、「よからう」の返事。「善は急げ！」と二人で爆撃機の発着地に行き、どの飛行機に便乗しようかと迷っている内に、機は次々と飛び立つて行く。意を決して下士官らしい整備員に便乗を頼んだが、「俺は知らんぞ」とそっけない返事。「だめかな」と思ったが、前例を聞いているので何とか粘り再度頼み込んだところ、「操縦士に聞いてみる」との返事だった。試運転でプロペラが回っている機に近づいて行く。操縦士の側に駆け寄り便乗を頼んだが、「俺は知らん。事故でもあったらどうするか。俺は許可せんからな」と言いながらも、それでも良いならと言わんばかりの寛容な応えが返って来た。「よし、死んでも構わん」と急いで後方の搭乗口から二人で乗り込んで後部に縮こまった。

飛行機は滑走を始めた。まだ顔を上げる訳にはいかん。機はふんわり地上から離れた。少し顔を上げ外を見た。4、50mに上がっている。すると一人の操縦士が前部からやって来た。てつきりお目玉かと観念したがその操縦士はニヤツとして、「どうりで、後ろに二人もいたのか。離陸時に尾部がどうも重くて上がらなかったのは、貴様達二人も乗っていたからだったのか。離陸する時は前の方に来て、尾部を軽くするんだ。前の方に来て」と言うので、中部の機上

射手の席へ座わった。

機はぐんぐん上昇して行く。編隊長機の横に二番機として、ぴったり寄り沿っているが気象の変化がぐつと下降したり、また上昇したりして水平線が上下しながら編隊を組んでいる。やがて大きく旋回して、飛行場に帰り無事着陸してほっと一息。感謝の敬礼も大きく弾んだ。初めての大きな経験を得た事が今でも忘れられない。

第一章・入隊　―軍隊生活と飛行兵志願―（12）班付上等兵

昭和15年5月31日、平安鎮の下士官候補者の教育も無事終了し、僕は6月2日、会寧の原隊に帰隊した。同年の9月15日、『兵長』という新しい階級になったが、肩章に金條が1本つくだけである。昔は伍長、勤務上等兵と言っていた。それは、ただ左腕に黄の山形の章をつけた物だった。また、善行章は赤の山形の章をつけた物だった。

原隊に帰った時、隊内に初年兵が一期の検閲を終え入って来た。僕の班にも10名余り入って来た。掃除、食事当番、寝具の整理等はすべて初年兵の仕事である。これらの監督、指導一般が二年兵の仕事で、中でも班付上等兵が全責任を持たされる。僕もその班付上等兵にされ、随分と気合いを入れた時期を経験した。配膳片付け、食器洗い、返還等の指導、銃の手入れ、編み上げ靴の手入れ、衣服の整頓、これらの不始末はすべて班付の責任になる。

夜の点呼前10分余りは内務規定、軍人勅語等の応答、質問等、活発な気合いの入ったひとときで、点呼後は廊下に並ばされビンタの嵐が吹く。これは各班に嵐が吹くよう伝染していく。入隊した折は一班が始まると二班が真似して、大荒れとなると「三班初年兵、廊下に出ろ」と声がかかり、「ああ、またか」と覚悟をして、しごきを受ける。これは兵隊の通用例と公認されていたようだった。このしごきで傷害（鼓膜の破れ）等が問題となり、私的公的のしごき、制裁は禁止されたものの、陰では根絶えはしていなかった。

僕が班付上等兵の時、夕食事の配膳を初年兵がやっていた。ところが初年兵が呼びに来たので配膳の所に行ったら、「ご飯が焦げばっかりで班長班付の下士官には持って行けない」と言う。「はて、底の方には良い所が入っているだろう」と掻き分けても、みんな焦げ飯ばかりなので仕方がなく椀に盛り、班付下士官に配った。同じ

飯を班長班付にも配った。

ちょうど配膳も終わり「食事始め」の合図で食べかかった時、初年兵が来た。「事務室の週番下士官が呼びです」との伝言だった。すぐ事務室へ行ったところ、その週番下士官が猛然と立ち上がり、「俺をなめとるのか。この飯は何だ。何で焦げばかり持って来たか！」ひどい剣幕で僕を殴り始めた。「夕食のご飯は、みんな焦げばかりだったので」と言い訳をしたが耳に入らず、殴る、突くの暴力の沙汰。僕は諦め、するようにせよと観念し歯を食いしばって我慢した。後のほうは痛くも何ともなかったので、きつと痺れたのだらう。

「西山伍長、もうやめんか」風呂上がりには事務室で会報を読んでいた隣の班の班長軍曹が、あまりの剣幕を見かねて止めに入った。「原口上等兵、内務班に帰って良い。俺が後で話すから」と言われ、僕は内務班に帰った。

内務班では、すでに食事が済んで僕の配膳だけが残っていた。僕は悔しくて、口が痺れたまま寝台の上に寝転んだ。初年兵が食事を勧めたが、口の中に入る状態ではなかった。

3分位経った頃、西山伍長が側に来た。「原口、俺が悪かった。勘弁してくれ」と泣いて謝り出した。僕はそれをうつろに聞きながら、「いいです。分かって貰えば。もう済んだ事だから」と言った。僕の目は開かない。顔は腫れ上がり、こわばってとても起き上がって応対する事もできず、寝込んだままだった。事務室での彼の余りの大声に僕の班長も察して聞いていたらしい。「西山、お前の飯ばかりが焦げ飯だったのではないぞ。俺達のもみんな焦げだったよ」と言われ、自分だけそんな仕打ちを受けたのかと腹を立てた事を悔い、謝りに来たのだった。

この事で3日間寝台上の人となった。この出来事以降、彼の顔は見たくないで疎外してしまった。早く操縦試験に合格して、内地教育に帰れる日が来るのが待ち遠しくなったが、これも杳として未定であった。

焦げ飯のついでにこれにも触れておこう。

食事が終わると洗面所で食器を洗う。内務班での食器は良く洗って班に持ち帰るのだが、食事を入れ炊事場から持って来た飯バツグと汁バツグ、漬物入れ等は洗ってまた炊事場に返しに行くのが、週番下士官の仕事の一部でもあった。この時、バツグの洗い方が悪く飯粒でもついていたら炊事場で大目玉をくらうので、週番下士官は引率してバツグを各班毎、良く点検の上、返納に行く。

その洗い方が悪かった班のバツグに、うんと焦げ飯を入れる慣わしがあった。多少は上の方に焦げの部分が増えてある事もあるが、あの時はバツグ全体が底から焦げ飯だったので、どうしようもなかった。バツグの洗い方が悪かったとしか考えられない。炊事場では各班のバツグの置き場所が決まっていて、その場で炊事兵から気合を入れられる事もあり、バツグ返納も気を緩める事ができないひと仕事であった。

第一章・入隊　ゝ軍隊生活と飛行兵志願ゝ（13）衛兵勤務

次は衛兵勤務について述べたい。どこの部隊も主に外敵の侵入を防ぐため24時間、衛兵によつて警戒されている。僕等の部隊もその例外ではなかった。営門を入ると右側に衛舎があつた。6、7坪位の建物である。前の椅子に6、7人の衛兵が姿勢を正して腰を下ろし、会話も禁物で衛門を出入りする者を注意して見守っている。奥の机の前に衛兵司令（大抵は軍曹）が目光らせている。上官（主に将校）が通ると「気をつけ！」を発し、兵は座したまま、司令1人が立つて敬礼をする。朝夕は将校の出入りが多いので、欠礼のないよう気配りがいる。もちろん営門の立哨が「上官！」と言つて衛兵所に報じ、合図をすると一番前に腰掛けている兵が伝唱するので、欠礼はほとんどない。

僕の部隊には3ヶ所の立哨地があつた。一つは衛門で、この立哨はいつも余り動かず、立ち番で上官の出入りに敬礼する。他には弾薬庫と野外燃料集積所（ドラム缶の山積）の警戒があり、ここは『動哨』といつていつも周囲を歩き回っている。交代は1時間毎で、時間が来ると衛兵上等兵が3人の交代要員を引率して歩哨地を回り順次交代し、3人を連れて衛兵所に歸つて来る。夜間になると仮眠が許され、10時過ぎから裏の控所で靴のまま寝転び、1時間の仮眠をむさぼるのだが、なかなか寝つかれないでウトウトしているともう起こされ、次に立哨するまでの1時間は衛兵所内で待機する事になる。夜はいつもぜんざいのおやつにあずかる。とてもありがたいおやつである。

控所の裏側に営倉がある。隊で重大な犯罪をした者の重営倉となつていて中に犯罰者がいれば、その監視と食事の世話もせねばならない。

僕が野外燃料集積所に動哨として勤務している時、眠くて困りドラム缶の陰で立ちながら眼を閉じていた。月夜だった。暫くすると

靴音と帯剣の音が聴こえて来た。ハッと目が覚めた。50m先方から週番司官が1人こちらにやって来る。「動哨！動哨！」と早くから叫んでいた。本来は飛んで行き「動哨異常なし…」と報告するのが建前だが、その機を逸した。側まで来るのを待って10m位になった時、銃剣を突きつけた。「誰か！」と鈍い声を上げたら週番司令はびっくりして立ち止まり、「おいおい、脅かすなよ」の言葉を残して引き返したので、ほっと胸を撫で下ろした。もしも巡察に気づかなかつたら大目玉のところだった。

飛行隊は歩兵に比べ銃剣術の訓練は時間が短い。朝の点呼が終わった後、初年兵は食事当番の他は銃剣術の訓練が日課だった。僕は好きでもあり得意としていた。幸い歩兵科から転科して来た藤原軍曹が僕を指名し、余計に15分余り稽古をつけてくれた。若干自信もついて有難かった。訓練が終わって朝食にありつくのであるが、ご飯も味噌汁も冷め切っている。一袋の納豆を味噌汁に入れ掻き混ぜ、ご飯にかけて空腹を埋めたものだ。そうやって食べた納豆を思い出す、今は余り好みでないのはそのためか。

ある日、被服庫を覗いたらスケート靴が目にとまった。貸出しが利くという事で、借りたのは良いがリンクがない。兵舎裏手の空き地に許可を受けてリンクを作る事にした。戦友3、4名と夕方より水道からホースを引き、10m×20mの大きさに水を流した。3日位してだんだん厚くなりリンクができた。

最初は立つのがやつの状態だったが、転んでは起き上がりは何十回も繰り返す内に、どうにか1週間余りで転ばず一周できるようになった。何事もやればできるという貴重な体験をした。

昭和15年11月10日、待望の『伍長』に任命された。肩章の金條に星が1個つくだけだが、本当に肩を振って歩きたい程の重い階級だった。これまでは内務班で寝食を共にしていたが、今度は下

士官室に入り当番兵が食事、洗濯までしてくれる。ただ、下士官室には班長も他の上級下士官もいるので、上官に対する遠慮で心安まらない。

伍長に進級して二度衛兵司令に任命されたが、立哨や動哨勤務がないので楽だった。僕は不寝番とか衛兵勤務が一番苦手だった。

第一章・入隊　ゝ軍隊生活と飛行兵志願ゝ（14）射撃大会

思い出した事がある。入隊以来、銃の支給は常に保持していたが、実弾射撃はほとんどなかった。ただ、平壤時代に一度だけ実弾射撃訓練が実施された。郊外の射撃場へ凍った道路を30分余り行軍するのが困難を極めた。射撃場で弾込めの操作を習い、300m離れた標的に寝撃ちの姿勢で5発の実弾を撃ったが、1・5m×2・0mの標的の円内には1発も当たらなかった経験がある。

ここ会寧でも射撃訓練が実施され、5発で50点満点のところを38点を射止めた。銃は発射の瞬間、銃口が上に跳ね上がり肩をぐつと後へ圧迫するので、最初から肩にしっかり押しつけ、反動を小さくするようにしていたため好成績を上げたのだと思う。

翌日、第一中隊、第二中隊合同の射撃大会が行われた。もちろん僕は第一中隊からの選手に選ばれ射撃場に立った。僕の中隊の教官が「銃に癖があるから」と、他の銃を与えてくれたのがまずかった。さらに防毒マスクをつけて射撃する事になった。

最初の一発を発射して弾が右上に当たった場合は、右下を狙う事も一つのコツ。銃の癖によるものもある。標的場では塹壕の中の監視兵が、弾跡を丸いシャモジのような物で指し示し、それを縦・横・斜め・左・右にする事で点数を示してくれる。

防毒マスクを被っているので、呼吸でガラスが曇る。いつまでも狙う事はまずい。大きく息を吸い込み静かに吐く。「一寸一時に照準を定め　“心で撃つな。手で撃つな。暗夜に霜の降るが如く”引き金を引け」と教えられている。でも、なかなかその状態にはなれない。ガラスの曇りで照準が定まらない。後ろでは、検査官が靴と剣をガチャガチャ鳴らして見守っている。

5発撃った結果、34点稼いだが前日より4点不足し、がつくり肩を落とした。銃を交換したのが悪かったのか、防毒マスクをつけたのがまずかったのか、いずれにせよ後の祭り。第二中隊から出た

選手が38点取って優勝した。

中隊に帰り「全員集合の中で優勝は逸したものの、我が中隊では最高の成績を上げた。初期の目的を果たした事を多とする」との賛辞を貰い恐縮したものだ。

第一章・入隊　ゝ軍隊生活と飛行兵志願ゝ（15）第二次試験と南京虫

昭和15年12月某日、本部からの命令伝達があつた。半分諦めていた操縦試験の第二次受験のため「京城陸軍病院に出向すべし」の命を貰つた。信じられない喜び。遠くハルビンで第一次試験を受けていたのが合格していたのか。だが、今度は第二次試験、「ますます難しくなつたら、どうしようか」という心配の方が大きかつた。僕の部隊からは二人だけだつた。もう一人は歩兵科から転科して来た藤原軍曹だつた。共に一次の合格を喜んだ。藤原軍曹が引率してくれるので、僕は大船に乗つた気分であつた。

試験の前日は京城の歩兵部隊に宿泊した。下士官室にでも泊まれるものかと思つたら、内務班での合同宿泊だつた。廊下側に二人分の寝台が割り込み、寝具の毛布が支給された。ここの兵隊から「南京虫の訪問があるから」と毛布のかけ方を教えられ、下から虫が上がつて来ないよう敷布団側を垂らして床を延べて貰つた。ここの連中はもう慣れているので、南京虫なんか何ともないと言う。

夜中12時過ぎに南京虫の襲撃。僕は首筋、足首、手首と至る所に30数ヶ所くらつたが、歩兵科出身の藤原軍曹はいくらか免疫があるのか、十数ヶ所のみ赤く腫れ上がつていた。会寧の僕の部隊には南京虫等はいないのに、ここにはどうしてこんなにいるのか、消毒が徹底していないのか、部隊の衛生管理ができていないのか。いずれにしても僕は部隊の恥だと声を大にして言いたい。

翌日、京城陸軍病院で身体検査を受けた。検査官の軍医から、「これは何の跡か？」と尋ねられ、「南京虫に刺された跡であります」と言つたら苦笑していた。試験は特に難しいものではなかつた。体重、身長等の一般測定その他、座つた回転椅子を回し、止めてから目の定まる時間、手足の屈伸等があり、適性の筆記試験も簡単に終わった。概して心配する程のものでもなかつたが、結果が出るまでは分らない。

第一章・入隊　―軍隊生活と飛行兵志願―（16）熊谷陸軍飛行学校

昭和16年1月29日、【第三次操縦試験のため熊谷陸軍飛行学校に出頭すべし】と待望の本部命令の通達があった。藤原軍曹も同様だった。夢のような喜び。もう内地での第三次試験は合格したも同然。内地へ帰れる大きな喜びだ。しかし熊谷飛行学校とは、たしか爆撃隊の学校だと聞いていたので、ちよつと意に反した思いだった。

昭和16年2月、熊谷飛行学校には120～130人集まった。

第三次の検査を受けたが、例により体重、身長、その他の簡単な身体検査の後、入校式があった。館林分教に行く者とか、それぞれの班に指令があり、僕等40名は福島県郡山市白河町の矢吹分教所に派遣された。

そこは小さな田舎の、小高い山を崩して平らにした小さな飛行場だった。巾200m位、長さ800m位だったようで、まだ草も充分生えていなかった。

練習機は九五式複座複葉の赤い布張りの飛行機で『赤トンボ』の名称で呼ばれていた。初めは教官か助教が前の座席に乗り、学生は後部座席で操縦を習うのであるが、後部座席には必要なだけの計器しかない。すなわちレバー、水平安定盤、羅針盤、高度計があり、操縦桿も前座席と繋がっているので同時に動く。後座席で操縦桿の動き、計器の変化を習得するのであるが、なかなか意のままにならない。

僕はなかなか自信が持てなくて13時間を費やした。自信はなかったが助教から「もう大丈夫、教わった通りにすれば心配なし」と励まされ、初めて単独飛行で大空を飛んだ。左翼の吹流しが存分の風を受けて喜んでいる。ほどなく全員が単独飛行を成し遂げた。こ

れが“パイロットの親離れ”である。燕の子の巣立ちだ。

飛行機の操縦では着陸が一番難しい。事故の3分の1位は、着陸の失敗によるものと言っても過言ではない。過ちは死へと繋がるので緊張の連続である。後年になっても隼機、飛燕機で同じ慎重な判断と注意が要求された。

離着陸ができるようになったら次が『空中操作』で、飛行機を左右上下と自由に動かすのだ。宙返りは助教が一、二度操作を教えた後は学生が行う。急上昇して背面になり、また元に戻る感覚も異状だった。急上昇して機体が止まる寸前、反転して元の通り急下降を行う。背面飛行はバンドをしっかりと締めていないと大変な事になる。背面反転は難しかった。水平飛行から一回転して、また元の水平飛行に戻るのである。いわゆる『特殊飛行』というやつだ。

いろいろと操作を習うと、もう大丈夫。しかし、個人での飛行時間は一機の飛行機を5人が乗り回すので思うように上がらない。ここ矢吹飛行場での全飛行時間は50時間余りだろうか。

僕等の助教は軍曹で下士官室に4人程で宿泊していたが、その部屋の掃除、寝具や衣類の洗濯は僕等5人が交代で世話した。他の助教3人には、他の班から1人ずつ出て世話をするのである。下士官になってもまだ上官（特に教えてもらう助教）に対する礼儀なので別に苦にもならなかった。

僕の助教はヒバリの子を飼っていて、可愛い口元に練り餌を与えて育てていた。飛行場には空高くヒバリがさえずり、一瞬急下降して草面に降りるがそこには巢はなく、そこから14、5メートルの所に巢があるらしい。「ちょっと素人では発見できない」と助教は教えてくれた。

ある日突然、僕に面会人のある事が報じられた。さて誰だろうか？急いで面会室に行くと、そこには兄の軍服姿があった。4年振りになる。嬉しかった。除隊で家に帰る途中、僕が矢吹にいと聞い

て立ち寄ってくれた。仙台飛行場に原隊があり無線士だった兄は、中支の南京まで重爆撃機にたびたび搭乗し出撃したという。怪我なく除隊できる事は何よりの喜びだった。そして今回は仙台から九州まで帰る途中の好機だった。「ご苦労さん、僕は今からが始まり。お互い元気でやろう」と固い握手で別れるまで、1時間余りの話は尽きなかった。

ここでの生活では、ときどき娑婆の空気を吸う事を許された。ある日、隊列を組んで軍歌を歌い、田舎道を1時間余り歩き回っている途中、一軒の田舎店があった。樽に豆腐が2、30余り水に浸っていた。小休止がかかり、豆腐に醤油をかけ瞬く間に平らげてしまった。他に食べ物はなく、飯は食ったものの若武者の食い盛り。けろりとして、また軍歌列は出発した。

外泊も1回あった。行先は白河町。町には食堂もほとんどない。白河湖でボートを漕いで半日過ごした。班の学生は曹長3名、軍曹、伍長の構成で、曹長が学生長として僕等を統括してはいたが、同期の八十六期生だから階級的な上下はなかった。

やがて5ヶ月の訓練が終わり、僕等は各分科種別の希望を出した。個人の種別に、僕は第一に『戦闘』、第二に『偵察』を希望した。『戦闘、偵察、軽爆、重爆』の四種に対し、教官がその学生の特性を配慮して決定していた。僕は第一希望の『戦闘』だった。嬉しかった。

思い起こせば3年前、平壤の航空教育隊に入隊した時、ポプラの木陰から飛び立って行った九七式戦闘機、引いては会寧部隊での九五式戦闘機の単機訓練を手に汗を握って見上げ、空の勇士に憧れた想いがやっと実現したのだ。そして今、ようやく飛行機の操縦ができるようになったのだ。これからの訓練が待ち遠しい。

第一章・入隊　ゝ軍隊生活と飛行兵志願ゝ（17）厚木分教所

昭和16年6月、同期の学生はそれぞれの分科に別れた。僕等、戦闘分科は神奈川県相模原厚木分教所へ分遣を命ぜられた。まだまだ熊谷陸軍飛行学校内での訓練なのである。顔ぶれが変わった。それぞれの分教所で訓練を受けて戦闘科を望んだ者ばかりだ。皆、精悍そのものの顔つきだが、同じ半年を同期として訓練に勤しんできたせいか袖触れ合った瞬間、親友以上の戦友となった。

どこでも5人1組の編制で助教が1人ついている。40名の学生に隊長、教官、助教（8名）の編制で訓練に入った。最初の1週間余りは赤トンボ（九五式複座複葉の赤い布張りの飛行機）による編隊訓練だった。助教が赤トンボを操縦する右後から、学生も赤トンボを操縦してついて行く。助教機が左に旋回すれば、それに合わせ左に旋回する。案外操作しやすいが気づくのが遅れると舵が遅れ、離れてしまうので瞬時目も離せない。【一機長一機幅】といって飛行機の長さだけ下がり、飛行機一機分の幅だけ右、または左に離れる隊形が基本だった。

1週間経ったら九七式戦闘機に変わった。憧れの戦闘機で待ち望んだ代物だった。これからこの戦闘機が僕の愛機だ。早く実戦で活躍できる戦士になりたい。毎日の訓練が待ち遠しかった。まだ各地の戦闘部隊では、この九七式戦闘機での実戦を行っている。それだけに僕等の訓練に慎重らしい。じつくりと訓練している様子だ。

隊長はよく民間人をピスト（訓練中の控所）へ招待していた。学生の航空服を脱がせ民間人に着せ後部座席に同乗させ、隊長自ら赤トンボを操縦し飛行場上空を一周していた。労生達の噂だが、営外での何かのもてなしのお礼といったところだろう。

ところがある日、いつものように学生の航空服を脱がせたところ、軍袴を着ていなかった。普通は軍袴の上に航空服を着るのが規定だ

が、暑い時は往々にして脱いでしまう。訓練終了後、格納庫のアスファルトの炎熱の中、くどくどと30分もお説教には参った。運悪く全員、罰として飛行場一周ときた。昼近くで腹ぺこなのに駆け足で一周をくろう。一辺が1,400mの正方形の飛行場一周に30分はかかる。助教が後ろから自転車で監視について来る。皆、汗を流し服もびしょ濡れ。3回はそんな事があった。

また、教官が五十四期生の士官学校出身の少尉で、隊長へのおべっかがうまいご機嫌取り。学生の間では“ボツチャン少尉”と呼んでいた。僕の班の助教は准尉で“ペロリー”と渾名をつけていた。ギヤーギヤー注意するが、後はさっぱりとしていたためだ。心から好む助教のタイプではなかったが、教育が済んだある日曜日、営外居住の家に僕等5人は食事に招待して貰った。若くて美しい奥さんの手料理のもてなしだった。

ここの教育でも限られた飛行機と助教なので、訓練は存分には進まない。ここでの訓練は特殊飛行、航法高度飛行(5,000m位)だったろうか。厚木飛行場から立川飛行場の上を通り、館林飛行場の上で反転して厚木へ帰隊する航法で、約1時間20分かかったような記憶がある。

あらかじめ地図に線を引いて羅針盤の度数を書く。何分かかるかの数字を記入して飛ぶのである。横風で流されればとんでもない方向に行く事になるので、眼下の地形と地図が一致するよう、羅針盤の方向度を常に修正せねばならない。向かい風や追い風による飛行時間の短長も考慮に入れる必要があった。この航法経験は後の戦地で、マニラからウエワクまで帰る航路に意義のある貴重な経験として活きたのであった。

矢吹でもこの航法の訓練があった。矢吹から館林飛行場の往復で、一人立ちの航法は貴重な経験だった。また、京城時代でも内地往復の航法も4回経験した。天気が良く飛行機の調子も良く、燃料さえ不足しなければまず航法は安心だが、途中エンジン故障にでもなり

不時着の事を考えると、地上の自動車と異なり安心度は半分となる。空の上を飛ぶというのは危険な商売だ。その上、戦闘ともなれば、どちらかに軍配が上がるから生きていれば九死に一生を得た事になる。

ちなみに、この厚木飛行場は終戦後、米軍のマッカーサー元師が降り立った所だ。台地の上にある芝生の飛行場に、あのマッカーサーがパイプを片手に降り立っている写真を見て、なんだか妙な気になった。

昭和16年11月27日、教育訓練は事故もなく無事に終わった。別れの慰労会が相模原町の料亭であった。ボツチャン教官の日頃の振る舞いに助教連中も不満があったのか、酒に酔った教官が相伴に回っていた時、助教の一人がボツチャン教官に倒れかかり（故意らしかったが）、そこに他の助教4、5名が伸しかかった。僕等学生は、はやし立てたい気持ちで我慢して、ただやれやれと見ていた。正面上座の隊長は渋い顔で座っていた。

第一章・入隊 〱軍隊生活と飛行兵志願〱（17）厚木分教所（後書き）

●2009年10月22日よりSF映画シナリオ「クリムゾンX」
を連載。

<http://ncode.syosetu.com/n3801i/>

第二章・開戦　↳ 猛訓練と三式戦闘機　飛燕　↳ (1) 日米開戦と射撃訓練

昭和16年11月末、厚木飛行場を後に、宮城県名取郡仙台一〇一教育戦隊に分遣された。

12月1日、僕は待望の軍曹に進級した。他の部隊でも僕等と同じように同期生が訓練されていたのだろう。戦隊は鍋木中隊と金谷中隊に別れ、僕は鍋木中隊に配属された。ここでは助教の配属はなかった。一期上(八十五期生)の助教が2、3名で指導してくれた。

また、教官も2人指導してくださったが、五十四期の士官学校出身だったので僕等より半年早く操縦を習っただけの先輩だが、実習の点では僅かながら上だった。

風雲急を告げる昭和16年12月8日、軍艦マーチが鳴り響く中、日米開戦の火蓋は切られた。日本海軍がハワイ真珠湾を攻撃し、大戦果を上げた異状な連続ニュースが僕等の志気を鼓舞した。続いて陸軍がフィリピン、マレーシアに怒濤の進撃する中で、さらなる僕等の訓練も始まった。

ここでは主に九七式戦闘機による射撃訓練だった。九七戦に吹流し(入口が1mで出口が80cm、長さ5m)を300mの綱の先につけ引張るのだ。それを後上方から色のついた銃弾を撃ち込むと、命中した所に穴が空き、弾に染めてある色が周囲につく。その色の数で命中数が記録される仕組み。10発撃って50点満点だが最初はなかなか命中しない。300mの距離から狙い150mで発射。80〜70mで離脱する。近づき過ぎると、吹流しをプロペラで切ってしまう。5秒足らずの間ですべてをやってしまう、その緊張感が何とも言えない。弾の色は無地、赤、青、紫、黄、緑で、6名の操縦者がそれぞれの色のついた弾を、その一つの吹流しに撃ち込むと一回の終わり。

地上に落とされた吹流しに、教官が丸の判子を押し点数を記録していく。5 mの吹流しを5つに区切り、第一環（初めの1 m）赤一、緑一と記録し、次はそれを裏返して第一環赤出一、黄出一、等と命中度を記録する。第三環あたりに集中する事が一番良い事になる。僕はいつも20点位命中して上位に食い込んだ。

飛行場は寒い。風が冷たい。満州の冬のようにではないが風が冷たい。海岸の近くなので海風の影響なのか、僕の行く所々が一番寒い気がする。

内務班ではストーブを焚いているが、炭バケツ1杯だけの配給では足りない。前方が見えなくなるまで降る大雪の時、2人交代で炊事場の横の炭置場まで炭を失敬に走る。70m余り走り、雪に埋もれた炭をこっそりすくい一目散。皆、軍曹や曹長の下士官ばかりで「文句があるか」の面構え。処置なしである。「我等、命がけで訓練しとるのだ」の意識は消えない。

午前中が訓練で午後は学科。荒木中尉教官の無線の講義は、教科書の受け売りみたいで身に入らない。本人も苦手らしくピリツとしない。

戦闘機では極力小さな無線機が要求される。しかし機体による雑音や戦闘、索敵にも邪魔になるという理由などから、真剣に研究の成果を上げていないようだ。戦地では隊長だけが性能の優れない物を本部との連絡で使っていた。

結局、各機に合図するのは機体の振り具合での意志伝達だった。進行中に急に翼を振れば【敵機発見、戦闘隊形を取れ】、緩く振る時は【集合せよ】。また、飛行場近くでは着陸するから【編隊を離れる】等々の指示がなされる。だから常に長機から目を離せない。飛行中は周囲の状況も常に把握し、長機に同行する事になる。

ここ仙台の部隊では給与（食事）がまずかった。麦ご飯に大豆まで入れてある。僕等空中勤務者の他、兵隊の教育も行われていた。飛行場大隊としての教育のようだったので給与を下げていたのか、それとも時局柄、部隊長の発案なのか分からない。戦局は破竹の勢

いで拡大しているようだが僕等は籠の鳥、詳しい情報はまったく分らない。ただ、今置かれている任務に邁進あるのみだ。

訓練にも慣れ余裕も出て来た頃だった、金谷中隊の助教が、射撃訓練に使った吹流しを落とすために引つ張って飛行場に帰って来た。しかし、高度が低かったので吹流しを宿舍横の松の木に引っかけ、その衝撃で墜落死亡する事故があった。

部隊葬に僕等も列席した。隊長の金谷大尉の切々たる哀調の弔辞が、僕等の目を潤ませた。生ける者に訴える如く感動を惜しまない弔辞に皆、涙を誘われた。

射撃訓練はある程度進んだが、戦闘訓練についての満足はなかった。教官も助教も実戦での経験不足のためか、教える自信がなかった。この事が実戦訓練に身の入らない原因と思えた。搭乗時間も思うように稼げない。矢吹で30時間、厚木で50時間、ここで50時間として計130時間余り。「ああ、もつと乗りたい。倍位乗りたい」これで果たして戦地に行けるか心配だ。搭乗時間の事を上官から聞いたが、搭乗時間が300時間なければ戦地では使いものにはならないとか。

米軍は皆、300時間搭乗して戦地へ出て来る。豊富な訓練機、その他あらゆる点で勝っているのは事実らしい。日本では200時間の操縦士が戦地へ出る。優劣は事実らしい。「ああ、早く時間を稼ぎたい」

爆撃機部隊に行った同期の学生は、もう300時間は搭乗しているらしい。なぜかという、彼等は5人が一緒に搭乗し交代で操縦するからだ。他の学生は側で見ているだけある。2時間も飛行しても、その5分の1の操縦時間を2時間の搭乗と計算されるので、僕等の3倍の時間歴を持っているが、戦闘操縦士は実務の技術時間だから決して引けは取らない。終戦時までに、僕はざっと1,000時間は搭乗したと確信している。

航空機事故では操縦士の搭乗時間の事が報じられ、「5,000

時間の名パイロット」等と書き立てられるが、実際は操縦士の技術は時間では計れない。

訓練が単調に流れ、僕等の内務班もだれてくる。そこで、誰が始めたのか花札が流行った。寝台の毛布の上に4人で坊主とか雨を並べ、盛り上がつてくると他の皆が覗き込む。たまに教官が2階に上がって内務班を見に来る。入口に近い兵隊が「上官！」と言って敬礼する声を聴くと毛布を瞬く間に被せ、その上に居座り知らん顔でいる。これには教官も気づかない。「退屈だらうな」と言って帰るまでが待遠しい。

ある日、戦友の田山軍曹宛に故郷の水戸から鯉節の半生が送って来た。焼かなければ食べられない。ストーブの温度を上げ天板でじりじり焼いた。油と煙が立ち込め往生したが、寒い中、窓を全開にして扇いだ。1階の上官に感づかれるのではと心配したが、しかし、ここは2階のため匂いは階下までは届かないのが幸いだった。たราบくご馳走になった。

第二章・開戦　ゝ猛訓練と三式戦闘機　飛燕ゝ（3）　一年下の上官

ある日の夕方、宿舎にある風呂の湯漕に浸かっていたところ、一人の兵が入って来た。一目見た瞬間、見覚えのある顔だった。「ああ、そうか」思い出した。僕が明善校にいた頃、陸上競技部で共に長距離を走っていた時のAという一年下の後輩だった。相手の階級は裸のため不明だが、敬語を使って聞いてみた。

「ああ、そうだよ。お前は？」「僕は競技部と一緒に走っていた原口です」「おお、そうじゃったのう」「で、Aさんはどうしてここにおられるのですか？」「俺は少年飛行兵を志願して操縦に入り、ノモハン事件で負傷して原隊のここに来ているんだ」という事で話に花が咲き、「今夜、部屋に来いよ」との言葉を貰った。

その夜、彼の下士官室を訪れた。彼は曹長の階級だった。僕より二年位早く少年飛行兵として操縦に専念し、あのノモハン事件に出征し3機を落とし金鷄勲章の六級を見せて誇らしげだった。大腿部を負傷して今は助教である事を話してくれた。学校当時も横柄な口調で、態度にも表れていたが、今、対面してもその横柄さは変わらなかった。しかし操縦においても、階級においても相手は上官である。僕は立場上、敬語を使うが相手は明善校での一級下の事にはお構いなし、上級者の立場を崩さない。金鷄を貰った事の自慢話にうんざりして、そこそこに部屋を出た。「もう二度と訪問なんかしないぞ」と誓ったが、運命の絆は続いていた。

僕が戦地から帰り、京城の第二練成教育隊に配属になり、半年ばかりして彼が僕の隊に転入して来た。運命のいたずらか、表面はいざ知らず嫌忌の心は変わらなかった。終戦になり久留米駅で別れたのが最後、一度も音信はなかった。また、しなかった。

事務室にタチの悪い准尉がいた。学生に送られて来る慰問品を、何かと言いながらせびり上げる。一重瞼の、のっぺりとした顔つき

だった。僕も家からの小包をせびられたが、それが何だったか今は記憶にない。お別れ慰労会で申しかろうと皆で話し合っていたが、それが通じたのかその准尉は出席しなかったのが少々残念であった。

昭和17年4月24日、教育も終了して全員の配属が決まった。

隊長、教官の判断なのか、概して結果から判断すると成績優秀な3人を部隊に残し、次々学校ごとに配属したようだった。それからすると僕は水戸陸軍飛行学校附5人の1人だった。その他は内地、満州の実戦部隊に4、5名配属された。彼等とは二度と会えなくなる。実戦部隊に配属されたら実戦で腕も上がるので、僕はそちらの方が望ましかったが、上層部での配慮には口を出せなかった。

第二章・開戦　↳ 猛訓練と三式戦闘機　飛燕　↳ (4) 水戸陸軍飛行学校

水戸飛行学校は戦技士養成の学校と聞いていたが、僕等の腕を磨き向上させるのが目的ではなく、爆撃機に搭乗する機上射手を訓練する学校だった。では、なぜ僕等戦闘操縦士が配属されたのか？戦技士が標的にするのは僕等の戦闘機なのだ。爆撃機上から機上掃射の訓練の標的になるためだった。

訓練が始まると戦技士は2人ずつで軽爆（九八式撃爆）の後方座に乗り、機上掃射の後にすぐさま機銃につけた写真機のシャッターを押していた。写真を現像して初めて照準の確認がなされるという訳だ。僕等は九七戦に搭乗し、交代で攻撃したものだ。

次に訓練の課目が変わり、地上掃射の実弾射撃が行われる。僕等にはこれには出番がない。そこで、上層部で戦闘操縦士にも軽爆撃機の操縦技術を教えたらという事になり、僕等にも軽爆撃機の未収教育が始まった。（未収教育とは、まだ操縦訓練を受けていない者に対する訓練の事）おおむね1週間で、その機の操縦を会得した。ただし、離着陸が主な若干の空中操作であった。

ここに入校した学生は、僕等が操縦希望してこの道に入ったように、彼等もその希望を持ったが操縦から落とされてしまった。では戦技士にでもと志望した者が大半で、上は曹長、軍曹、伍長の階級の者ばかり。僕等が操縦を習うと同じ、彼等はここで戦技、すなわち機上での射撃訓練を取得する訳で、主に爆撃機または一部偵察機に搭乗して敵地に向かうのであり、飛行機である限り危険は変わらない。

水沼に布板を張り、上空300mから実弾を撃ち込む訓練も1週間実施され、対地射撃での彼等の腕も向上したようだった。

戦局が次第に拡大した事で、操縦士の不足を補うために乗員養成

の制度（民間の航空会社がパイロットを養成している制度）が兵隊（すなわち軍部）に編入されたとか。操縦士不足の軍部が乗員養成を横取りした形で編入したようだった。

水戸飛行学校でも僕等と寝食を共にした3人の戦友がいたが、3人とも根っからの軍隊生活出身でないので、何となく民間人のようなところが見られた。その中に八女出身（広川）の野田軍曹がいた。加古川の陸軍病院にいる時、彼も負傷で入院して来た。僕等は再会を喜び合った。

その後、終戦まで皆目不明だったが、戦後に彼の家を訪ねたところ、八女市の野田ロウソク屋の守衛をしていて、互いに無事で終戦を喜んだ。彼は八女市の岡山飛行場で赤トンボ（九五式複座複葉の赤い布張りの飛行機）の教官をしていた時、終戦になったと言っていた。暫くして家族の関係とかでアメリカに渡ったまま彼との音信は途切れ、今は思い出の人となった。

第二章・開戦　く猛訓練と三式戦闘機　飛燕く（5）思いがけない出来事

日本を襲ったB29爆撃機一機には12人の射撃手（戦技士）が搭乗している。編隊を組んで三機、六機と固まると、その威力は四倍、五倍となり、四門の機銃で対抗する戦闘機は犠牲とならざるを得ない。

爆撃機に対する攻撃の難しさが知らされる。いろいろ研究され、死角攻撃が最も効果があるという事。すなわち死角といえばその飛行機の真上、真下または銃の向けられない角度等、一機だけなら死角も通用する。だが編隊を組んでいる場合は、他の機がその死角を援護するので死角はないのと同じである。

戦闘機の攻撃も真上から垂直に降下するのは、相手も進行しているので照準を合わせる事が、なかなか難しかった。一回降下したら二回とは攻撃できない。下降して元に戻る高度に達する頃には、敵機は遠方に影を消してしまっている。

あまり専門的になるので一旦筆を変えよう。

ある日、会寧から同行した藤原曹長が面会に来てくれた。酒保（兵舎内の売店）で大福餅を頬張り、それぞれの訓練の成果を語り合った。彼は軽爆撃機の操縦士になっていた。僕は次のような事故の話をした。

水戸飛行学校で僕は衝撃的な事故を経験した。九八式軽爆撃機の後方座席に学生2人を乗せて出発した。その朝、兵隊が少ないため民間人の工員が整備を担当していた。当然、燃料補給は最大の点検事項であり、エンジンの調子等、工員の任務である。僕は搭乗してまず燃料計を見た。計器の針が動かない。工員を呼び「燃料は入っているのか」と聞いたところ、「今朝、補給した」と言う。「計器が動かんじゃないか」「計器が壊れています」の問答をし、今度は滑油計の針が急激に振れているので、また呼んだが、これも「計器の

故障だ」と言う。「仕方がないな」と気になりながらも離陸し、所定の訓練を行いながらも滑油計の針が振れるのが気がかりだったが、「やれやれ針の故障だったのか」と思い飛行場近くまで帰って来た。高度300mで海岸の突出部で第三旋回を始め、高度250mで旋回が終わる頃、突然エンジンが止まった。プロペラだけが空気の抵抗で回る。「はっ!？」飛行場まではこのままでは届かないと思い、右に機体を傾けたが海岸線が白い砂浜を見せている。そこに不時着しようかと思ったが、2、3日前、隊長の講義の訓告の中に「海岸線は柔らかいので不時着には適しない」と言われた事を思い出し、第四旋回地点に向かった。

高度はぐんぐん下がり第四旋回地点では180mとなった。「どうしようもない」飛行場へ向け、松の木のない草地を選び降ろして行った。本来この地点は、訓練用の爆撃地になっている。電柱あり、掩体監視壕あり、松の木もあり、でも場所を選ぶ余裕はなく機は着地に入った。伝声管で後部座席の学生達に「不時着するので、しっかり掴まっとけ!」と叫び、機は地面のすべてをなぎ倒しながら滑って行った。

「うまく接地したなあ」と感じた時、機はそのままの状態が変わっていない。電線が座席に絡まっている。後方の学生達に声をかけた。「大丈夫か?」「大丈夫です」の返事に安心して機外に出たところ、右翼が根元から切れてなく左翼はそのままだったが、そこから後方座席を見たら直角に折れている。ちょうど座席のほんの後ろが尾部との継ぎ目になっていた。そこからぽつきり折れて、座席だけが2人の学生を乗せたままになっていた。片方の学生が目の上を切って血を出している。すぐタオルで押さえ、二人して座席から外に出し左翼の下に寝かせた。大した怪我でもないのに、元気な学生に飛行場へ連絡するよう命じた。学生はすぐ走った。

3、4分経った頃、学生は戻って来た。「助教殿、飛行場が見つかりません」「飛行場はこっちの方角だ、お前がここにいろ。俺が行く」僕は機首の向いている方へ急いだ。砂地なのでなかなか前へ

進まない。行けども行けども飛行場は見えない。ついに小高い山に上がったが、松の木で飛行場は見えない。暫く落ち着いて空を見上げると、他の飛行機が高度を下げて着陸して行く。「飛行場は、あの方向なのか？」90度方向を間違えていたのだ。そうか着地して何かに翼を取られた時、機首は90度向きを変えていたのに気づかなかったのだ。思い直して、再びその方向へ走った。

飛行場の端に出た。大きく手を振ったら、ピスト（訓練中の控所）の整備兵が気づき始動車で迎えに来た。しかし僕は負傷兵が気がかりで、その車で負傷者のいる不時着地へ急いだ。爆撃場の中には少ししか道路がなく、ぐっと左回りに走っても探し得ないので、整備兵と鉄塔に登ったが松の木の陰で地点は見えない。

やっとあの辺だろうという事で歩き着いたら、海岸線の方から入った別隊がすでに来ていて、負傷兵は収容した後だった。安心してピストに帰り、隊長に報告して僕はようやく落着きを取り戻した。

このような事故の話を藤原曹長にしながら、僕は人の命とは紙一重のものだと深く実感していた。

その時の整備員は解雇になったと聞いた。おとなしいまだ若い21、2歳の地方からの雇兵だった。事故の原因は胴体タンクの燃料が空っぽだったとの事。その朝、補給をしてなかったとの事。翼内にも燃料は入っているの、その整備員の判断で胴体タンクがなくなったら、翼内タンクも使えばいいとの考えらしかったが、原則として燃料は毎朝、満タンにする事になっていた。また、胴体タンクから翼内タンクに切り替えるべきだったが、高度が余りにも低く200m以下では切り替える余裕はなかった。切り替わるという事すら考えなかった。朝、第1回目の飛行だから、20分やそこらで燃料が空になる筈もなかった。飛行中、滑油計が異状に振動するのが気になっていたので、滑油系統の故障を起こしてエンジン停止したものと、にわかな自己判断をしていた。

後日、中隊長より戒告を受けたが、整備不良が起因の事故のため

処罰はなかった。それより命に別状のなかった事を喜んでいただき、
学生の負傷もたいした事なく、ほっと胸を撫で下ろした。

第二章・開戦　く猛訓練と三式戦闘機　飛燕く（6）週番下士官

嬉しい山の幸にも巡り合った。爆撃場で不時着した機体を探し回った折り、山栗が実をほころばしていたのを見た。数日後、戦友と2人で飯盆を持って栗拾いに出かけた。内務班に帰ってからストーブで茹でて、田舎の味を満喫した。

水戸飛行学校の開校記念日が開かれたが観覧者はまばらで、滑走路には九八式軽爆、九七式軽爆、九九式攻撃機、九七式戦闘機、直接協力機等が並んでいた。そんな中に、真新しい隼機（一式戦闘機）の姿があった。初めて見る最新鋭戦闘機は引込脚の洗練された容姿、これを操縦できるのかと心躍った。すでに南方では実戦に使用し活躍していたが、戦地送りが間に合わないとか。僕等の部隊にも、やつと一機お恵みをいただいた訳だった。

その一機を白川中尉（僕の部隊から唯一、兵からの成り上がりの中尉）が操縦して皆に披露されたまでは良かったが、余りにも超低空飛行をしたため、プロペラが地面を擦り大事故に成りかねない結果となり冷汗をかいたが、プロペラの先が10cm余り曲がっただけで事なきを得た。しかし僕等戦闘操縦士には、その隼機の未収教育は実施されず残念でならなかった。

僕が週番下士官（1週間の勤務）に就いた時、ちょうど新兵の教育も終了し各部隊に配属され、三々五々学校を去って行った。しかし次の学生が三々五々入校して来た。週番下士官は食事伝票を書いて、一食前にその数字を炊事班長に報告せねばならない。昼食後出発したかと思うと、午後数名入校してくる。伝票の書き替え、訂正と何度炊事場に走った事か。炊事場には古参の班長（曹長）が指揮采配をしている。数字の訂正に対し小言を言うが、こっちは仕方がない。運の悪い時は仕方がないものだ。

隣の部隊に腸チフスが出た。隔離され網で囲まれたまでは良かったが、その部隊の食事の運搬が僕の部隊に回ってきた。僕は入って来た学生を使役に駆り出してその運搬をせねばならず、炊事場から飯バッグや食器を網で囲ってある所まで運び、済んだらそれをまた使役を使って炊事場に返す勤務のしんどさ。入校して来た学生を週番司令に報告し、隊長に申告させねばならず多忙を極めた。使役を使うにも新しく入校した学生は動かず、「俺は使役に来たんじゃないぞ」とばかりに大きな顔をしている。

司令教官に依頼し、いずれ学生長にもなるであろう曹長達を説得して貰ったので、何とか順調に行くようになったが、僕は彼等とは教育上では顔を合わせる事はなかった。なぜか僕は戦友三人と明野飛行学校に転属したのだった。

第二章・開戦　↳ 猛訓練と三式戦闘機　飛燕　↳ (7) 明野陸軍飛行学校

昭和17年12月16日、僕等は待ちに待った戦闘機操縦士を養成する明野陸軍飛行学校附を命ぜられた。稲見、柴と僕の3名が南方要員として、訓練を受ける事になった。もう一人の戦友、萩尾軍曹は居残り組となり、別れは辛かった。萩尾軍曹は小柄な体格だったが、転科組なので銃剣術が得意だった。部隊中での試合で優勝した腕の持ち主。帰郷した折、二日市の彼の実家に一泊し朝早く帰隊した事があった。精悍ですばしっこい戦友だったが、後日、厚木飛行場で翼が松の木に引っかけり墜落、殉職した事を聞いた。悲しい運命の齒車に涙した。

南方要員として集合した戦闘操縦士は准尉以下軍曹まで。僕は軍曹で一番若かった。35名程で、教官はノモハンの猛者、立野中尉、細野、垂井少尉。校長は寺西中佐、ノモハンの負傷で顔面神経痛とかでいつも笑っているようだったが、尊厳そのものであった。

さすが全国一の学校だけあって、隼機がずらりと並んでいた。早くも未収教育から始まり、とんとん拍子で実習課目が始まった。戦地の要望に応えるため、戦闘操縦士養成は急務だった。射撃訓練が1週間続けば、次週は戦闘訓練。編隊飛行から戦闘体形、息つく暇もない猛訓練。僕等にとってはこの上ない好機。毎日が実戦さながら。また、要員として集まった准尉以下もきびきびした動作で応え、僕等を奮い立たせてくれた。

ここの給与（食事）は最高だった。隣室の食堂に地方からの娘達が給仕について、食事の世話から後片付けまで、みんなやってくれた。朝は玉子がつき、加味品として下給される物も多かった。どうせ戦地送りだから「存分賄ってやれ」という状況だった。

この学校での指導方針が戦闘機の戦果にも影響するという事で、

ノモハンの後半の戦闘不利を決定づけたというロツテ戦法が論ぜられ、戦闘においては僚機は長機の後方警戒を主とし、長機の攻撃を容易ならしめるための後楯となる事が原則づけられた。

僚機に言わせると「長機の弾避けになれ」という事だ。長機が敵機を落とせば編隊の功績として取り上げられるという事になっており、実際、僕の場合は中隊長あるいは他の編隊長の僚機として戦闘した。しかし10数機の隊長の撃墜にもかかわらず、僕の功績は不問に終わり終戦までなかった。

終戦直前、部隊の人事係から「原口、お前の金鷄の申請をしていたところだ」と言われたが、「勲章どころか、終戦になったじゃないか。早く帰った方がいい」という気持ちだった。今にして思えば、後2、3カ月終戦が遅れたら、申請通り功何級かを貰い、今の軍人恩給の倍位は頂けただろうと夢を見る。

第二章・開戦　く猛訓練と三式戦闘機　飛燕く（8）飛燕登場

昭和18年1月早々、三式戦闘機飛燕が飛行場に現われた。明野飛行場は僕等の使用している舗装された滑走路と、芝草の普通の滑走路の二線があった。その芝生の滑走路に飛燕機が盛んに離着陸する訓練が始まった。

噂によると、満州のチチハルに転進していた六十八戦隊の九七戦部隊が、機種改変で明野に来て目下猛訓練中の事。九七式戦闘機からいきなり飛燕機に移り変わるのだから問題も多かった。機体は重いし、水冷エンジンのため水温が上がると沸騰する。地上滑走の場合、土埃を吸わないためと水温を上げないよう、プロペラのひねりを強くして（高ピッチ）滑走するように指導されていた。舗装された滑走路では、その必要はない。しかし出発する時は低ピッチに切り替え、プロペラの回転を最高に上げて離陸する事になっている。脚は引込脚で操作は簡単だったが、九七戦の引き込まない脚に慣れ切っていたため、着陸の際に脚を出すのを忘れ胴体着陸する者が二機、三機と出る始末。「ああ、またか。仕方がない」もつと早く発煙筒を焚いて着陸復行（着陸を断念して上昇せよの合図）させ、本人に脚を出し忘れている事を知らせれば良いのにと、後悔する場面もしばしば見られた。

訓練も早3ヶ月近くになり皆、飛燕機の操作もうまくいくようになった折り、僕、稲見軍曹、柴軍曹の3人に、六十八戦隊付の命令が出された。稲見軍曹は戦隊本部、僕と柴軍曹は第二中隊付となり、隊長の竹内大尉（五十二期）に申告した。精悍そのものの大男、アントニオ猪木のように下顎の尖った、無口だが威厳ある風貌だった。六十八戦付になった翌々日から飛燕機の未収教育が始められ、僕等3人が1週間の訓練を受け、離着陸、空中操作、射撃と大急ぎで飛燕機の操縦を会得した。

隼機に比べどっしりと重く軽爆撃機のような感じ、上空では速度が早く操縦感覚も隼機より一段上回る感じ。この飛燕機で戦地へ行けるとは勇気百倍、身も心も跳ねる心地だった。

第二章・開戦　く猛訓練と三式戦闘機　飛燕く（9）伊勢神宮と隊歌

この六十八戦隊は、もうすぐ南方戦線へ出陣するとの噂を聞いていた。転進を機会に故郷へ別れをと思い、2泊の外泊を人事係の准尉に申し出たが許可されず、1泊だけの休暇を貰った。

戦友の柴軍曹が帰るといので、僕も彼に同伴して大阪泉北郡の実家にお世話になった。ここで茶粥の料理を初めて味わった。茶処で育った僕には、お粥に茶の入った物足りない料理であった。後で分かった事だが、大事なお客様に出すもてなしの料理だと知り、心にもないお礼の言葉を滑らした自分が恥ずかしかった。

彼の所は山の中のみかんの産地で、冬ごもりに菰こもの覆いで包み込んだみかん園が、見事な風景を見せてくれた事が印象に残った。昭和42年頃、僕はみかんを生産していたが、同じように菰で覆って霜の害を防いだ事も、この風景が印象に残っていたからだった。

ある日の午後、突然、僕に面会人の通達があった。誰だろうかと心躍らし面会室に走った。思いもしなかった父が立っていた。はるばる九州の山の中から一人で汽車を乗り継ぎして、この明野まで来た事に僕はびっくりした。読み書きも満足にできなかったのに、ほとと感心した。

さつそく格納庫前で整備中の飛燕機を見せた。機に上がり操縦席の内部まで説明し、操縦桿や方向舵の動き等も見せて父の目を喜ばせた。夜は12時まで外出許可を貰い、伊勢市内の旅館で心ゆくまで盃を傾け帰隊した。

父は翌日、伊勢神宮へ参拝して家族の無事を祈願して帰ったようだったが、父として何かの思いがしたのだろう。どんな心境だったのか察するには到底およばない。親の愛情の深さ、明野まで本当にご苦労様と頭が下がった。

ある日、兵舎内外でざわめきが起こった。中隊長の竹内大尉が着物姿の艶やかな女性と散歩している様子に皆、見とれていた。聞くところによると花嫁さんとの事。戦地への出発を前に結婚されたのか。今日は学校へ面会に来られた由。それから10日余りで出陣したので、僅かばかりの花嫁さんだった。竹内大尉は昭和18年の1月頃戦死されたので、可哀想な戦争花嫁さんの運命を辿られた事だろう。今は知る由もない悲話となっている。

いよいよ戦地への出発の日が近づいて来たある日、第二中隊竹内大尉の引率で伊勢神宮外宮、内宮へ参拝し、武運長久の祈願に120余名は心を新たにした。そして二見ヶ浦の海岸で休憩し、松林の中から二見ヶ浦の島を眺めていた。

その時、竹内大尉が『加藤隼戦闘隊』の歌を力強く歌われた。「エンジンの音轟々と隼は征く雲の上」、そして音程の異なつた「干戈交ゆる幾星霜、七度重なる感状の…」と、遙かビルマの空に散つた加藤隼戦闘隊長の面影を偲び、涙ぐんで歌われた時の悲愴な姿が思い出される。

竹内大尉はかつて、その加藤隼戦闘隊の部下として仏印領ビルマ戦線で活躍された、その生き残りの勇者だと聞いた。幾人かの部下と共に六十八戦隊の編成の主力となつて、北満のチチハルに国境警備の任に就かれた由。僕の尊敬した波佐間曹長もその一人だった。その日は心ゆくまで砂の松原での最後の時を満喫した。

終戦後、軍恩の旅行で二見ヶ浦を訪れた事があつたが、松原は一変して観光本位の建物が立ち並び道路もできて、昔の思い出は何も感じられず淋しい思いがしただけだった。せめて、当時を偲ぶ軍服姿の写真がアルバムに載っている。二見ヶ浦を背景にした僕の雄姿、陸軍軍曹の姿である。

明野にいた間は日曜外出の折り、よく柴軍曹と二人で神宮に参拝した。外宮に7回、内宮に3回、二見ヶ浦には3回足を運んだ。当時、二見ヶ浦までは幌馬車に乗って行ったものだが、すでにその面

影はなかつた。

第二章・開戦　↳ 猛訓練と三式戦闘機　飛燕　↳ (9) 伊勢神宮と隊歌（後書き）

● 2009年10月22日よりSF映画シナリオ「クリムゾンX」を連載。

<http://ncode.syosetu.com/n3801i/>

第三章・出陣　～ニューギニア戦線と戦闘の日々～（１）威風堂々の出陣

ついに出陣の日が来た。これは上層部で検討された事だったのか、陸路伝いにラバウルに行くか、海上輸送でトラック島経由で行くかの二通りの計画があつたらしい。

結局、陸路では飛燕機の離着陸には飛行場が狭い、しかも訓練こそしたものの、まだ未熟な者が多く、途中での機体損耗が多大になるという理由から海路を選んだのだった。飛燕機を横須賀港から改造航空母艦に積載してトラック島まで運び、陸揚げして一気にラバウルへ飛ぶという作戦が採られた。

航法に欠かせない羅針盤の修正が細かく点検された。トラック島からラバウルまで千数百kmの洋上を飛行するためには、たとえば一度二度でも羅針盤の針が狂っていたら、4時間も飛んでいると目的地から数百km/hの誤差を生じるのだから、細心の調整が必要となる。この事については、後でまた詳しい失敗の経緯を述べたい。

昭和18年4月2日、飛行第六十八戦隊の飛燕戦闘隊は、戦闘隊長下山中佐引率の65機をそれぞれの中隊毎に15機ずつ編隊を組み、戦隊本部10機を先頭に明野の空に舞った。富士山を同じ高度で左に見ながら威風堂々の出陣だった。ほどなく20分余りで横須賀海軍飛行場に全機着陸し、後は海軍の母艦積込みの作業手伝いのため、手押して母艦の横まで運んだ。

その作業が終わるまで二晩、車庫の中に藁を広げ毛布を敷いての寝泊まりには往生した。何せあまりの状況の変化である。しかし、戦地への出発と思えば贅沢も言えない。

僕の戦隊の編成は、操縦士は戦隊長を含め65名、整備中隊が各中隊に7、80名、戦隊本部に30名として、総数320名余りで構成されていたようだ。従って僕等の第二中隊には竹内中隊長以下飛燕15機の操縦士と整備隊員が80名として、総数95名の編成

である。車庫の中で宿泊2日の後、船内に入り、それぞれの指示に従い船内配置が決められた。

日支事変が勃発した昭和10年頃、僕は久留米の明善校の学生だった。「歡呼の聲に送られて今ぞいで立つ父母の国」との歌の波。日の丸の旗に送られ勇躍行進する久留米四十八歩兵連隊の百武中尉先導の部隊を、明治通りから久留米駅まで見送った思い出がある。しかし戦局の変異と共に、隠密裏に内地を出発する僕等の新鋭戦闘部隊を見送る者はほんの僅か。横須賀港の海軍の兵隊のまばらな見送りに、必死に手を振る静かな征途だった。

夕暮時、母艦は港を静かに離れ東京湾を後にした。湾を出ると同時に、厳重なる警戒体制が敷かれた。これは、湾の外に敵の潜水艦が待ち伏せているのを警戒しての事。広大な大平洋上で日本軍を捕捉するより、港の出入口で攻撃するのが一番良策だからだ。暗闇の中での監視兵の苦労も並大抵でない。僕等の戦隊からも数人が交代で見張り番に立たされた。幸い敵の潜水艦の攻撃はなく一夜が明けた。すでに大海原の中に一路南へ進路が取られていた。

第三章・出陣　～ニューギニア戦線と戦闘の日々～（2）艦内生活

僕等の母艦の前には改装されたピカピカの巡洋艦が先導しており、後方にはもう1隻の母艦、その後には、また巡洋艦が続いた。左右には小柄な駆逐艦が2隻、計4隻で護衛している。誠に頼もしく安堵感が得られ、それだけ僕等の戦隊の重要性が認められていたのだ。昼間は敵潜水艦の目を眩ますため、5分毎に進路を45度変更して蛇行、ときどき黄色の電光で信号を交わしている。夜になると、また進路を南に向け一直線に航行しているとの事だった。

大きな波のうねりに僕等は皆、船酔いに倒れてしまった。食事が入らない。1日目はまるきり喉を通らない。2日、3日経っても船酔いは僕等を苦しめた。僕等の半数以上がまるで役に立たない。海軍の兵隊が羨ましい。

7日目にしてやっと元に戻り、食事がおいしくなった。ペロリと一人前が喉を通り、船酔いの兵の残り飯はないかと見回すが、もう誰もが元気になり残飯をする者はなし。今まで食わなかった分が恨めしい。腹が空くばかり。上甲板に上がると、飛燕機が所狭しと繋留されている。前後に車輪止を咬ませ紐で4ヶ所縛りつけ、潮風を防ぐため機体には厚い帆布をすっぽり被せられている。

上甲板の隅で少しばかりの体操が日課となっていた。艦は前後左右に大きく揺れ、大波の凄さが感じられた。

毎朝、甲板で洗面器に1リットル余りの水が支給される。それで顔を洗う。まごまごしていると大目玉をくらう。それはそれは忙しい。3日に1回位、入浴があった。最初は潮水の風呂に入り、体を洗ってから真水の湯を洗面器1杯で湯上がりをする。それだけの制限水である。艦内の水の大切さ貴重さが分かった。海水の風呂は目がチカチカして、とても長い時間入っていられなかった。

横須賀港を出港して8日目の夜、消灯合図のベルと共にハンモックに入った直後、異状な爆音を聴いた。と同時に艦内に緊急ベルが慌ただしく鳴り響き、海軍兵はざわめき狭い梯子を上甲板へと上がって行く。僕はポカンと何する術もなく、成り行きを静観するばかり。爆音2回、敵の潜水艦の魚雷攻撃を受けたが、艦船には命中しなかったと報告され、ひと安心したものだ。トラック島に入港する前夜の出来事だった。港の入口に待ち伏せていた潜水艦の餌食にならなかった事は幸運だった。

長い航海の中にふと次の二句ができた。

“ 船倉にコオロギ鳴きて土恋し ”

“ 船窓にトビウオの行方を追いて海狭し ”

前句は長い航海に飽きて早く上陸したい気持ちで、コオロギに例えた。土が恋しいのでないか、油臭い船倉の片隅で鳴いている哀れなコオロギ君よ、元気でおれよ。

後の句は僕等の船室に丸い窓が一つあり、吃水線すれすれにトビウオが飛んでいるのが、ときたま見える。窓が狭くて行方を追う事ができない様を、海の狭さにかけてた句である。

第三章・出陣　～ニューギニア戦線と戦闘の日々～（3）南国生活

夜明けと共にトラック諸島の緑色の島影が見え、まるで昨夜の悪夢もなかったかのように艦体は静かに滑って行つた。椰子の林が見え、やっと南国に足を踏み入れる事になった。

トラック諸島の中で一番大きな島『春島』に上陸するのである。しかし接岸できず100m余り沖に錨を降ろしている。戦争をしてはいるものの、港湾設備まで手が回らないらしい。飛行機を直接クレーンで吊り降ろす訳にはいかない。一旦、ダイハツ製の筏に降ろし機械で陸岸まで引つ張り、後は人海戦術で引き揚げるのである。3日間はおかつただろう。陸地上がった機は30人余りが手押しで滑走路まで転がして行くのである。灼熱の太陽のもと、玉の如く流れる汗が額を走る。

内地を出る時は明野は五分咲きの桜。気温も最適の状態だったが、僅か10日余りの経過で灼熱地獄さながらの地へ。しかし皆、黙々と機体にしがみついて、200m余りの手押しに汗を流した。

滑走路は巾90m、長さ1,200m、海岸線まで50m余り、工事前のトロツコの線路が滑走路と平行に走っている。南の端は100m足らずで海に至る。北の端は2,300mあるが、ここは整地されていない。右側には300m位の山があるが、半分は飛行場作りに削り取られ、手前は広い空地に整地してある。飛行機が2,300機は収容できそうだ。

そこに平屋の兵舎が十数棟建っていて、僕等の宿舍もその一棟にあった。水がないため雨水を受樋でタンクに溜め、それに蛇口をつけ普段の手洗水として使った。飲料水はそれを煮沸して、生水は絶対に飲まないよう注意されていた。

便所は50m離れた海岸線に突出して作られている。狭い梯板を渡し、海上に柱を立て屋根を葺き、一ヶ所ずつ区画を作りアンペラ

（ムシロ）の扉がついている。海の中に垂れ流しである。綺麗な模様の熱帯魚が泳いでいる。ウンチをつついている魚もいて、誠に滑稽な風景である。

環境の変化で下痢が始まった。1日3回から4回、5回と、ついに6回も便所の世話になった。

この飛行場作りに、小月刑務所の囚人が強制労働させられているとの事。北側300m位離れた所に宿舎があり、周りは鉄條網で囲まれ、囚人が2、300人隔離されていたようだった。囚人達との接触は厳禁とされていたが、要領のいい囚人は巧みにその目を潜り、煙草と交換に春画のハンカチとか、椰子の実で作った煙草入れ等をこっそり見せてねだっていた。

第三章・出陣　～ニューギニア戦線と戦闘の日々～（４）危機一髪

1週間余りで飛行機の整備が完了し、いよいよ離着陸飛行の習熟訓練が始まった。滑走路での離着陸は初めてである。僕は下痢で体調が悪く訓練飛行を断りたかったが、それをはっきり言えず訓練に参加した。

僕の搭乗順番が来て、前の搭乗者と入れ替わった。エンジンの水温が沸騰し始めたので、早く離陸するよう申し受けた。急いで出発点に移動した。離陸には回転を上げるため、プロペラのひねり角度を低ピッチにして上昇する事になっていたが、前の操縦者が高ピッチに切り換え、水温を上げないように操作していたのを、点検しなかった僕に落ち度があった。しかし「滑走路は埃がしないので、高ピッチにする必要はない」と言われていたので、高ピッチになっていた事よりも水温の沸騰が気がかりで出発点に着いたのだった。出発許可の白旗が振られ、僕はレバーを引き全速で地上滑走を始めた。尾部が浮いて水平状態になった。速度計をチラツチラッと目で追っ前方を注視し、速度計が時速120km/hに上がるのを今か今かと待ったが、110km/hからどうしても上がらない。機体は120km/hの速度になってから操縦桿を手前に引くと浮上する筈だが、それがどうしても110km/hしか出ない。「おかしい、おかしいな」機は飛行場の端100m位まで来てしまった。「操縦桿を引いて強引に上がってみるか」とも一瞬思ったが断念し、思い切り左足を踏み込みレバーを全閉にしたため、機体は左旋回でグルグル回り、ブレーキを踏み左脚を中心に何度回っただろうか。最後は滑走路から外れ、トロツコの線路を乗り越えてや々と停止した。

スイッチを切り、何で速度が出なかったか機内を点検したら、高ピッチのままの離陸だった。「しまった!!」と思ったが、もうそれまでである。それにしても前の搭乗者は、なぜ高ピッチに切り替えていたのか。沸騰を抑えるためだったら、その事を注意してくれ

ていたらとも思ったが、いずれにしても僕の不注意であり離陸前の点検ミスとしか言えない。

ピスト（訓練中の控所）に帰り、竹内大尉に報告したら「ボヤツとするんじゃないねえ」と一発くらった。悪夢から覚めたようだった。体調が悪かったのに無理して訓練に参加した事も反省させられたが、自業自得である。もしも離陸を強行していたら浮上しないまま海に突っ込み、僕の一生はそれまでだっただろう。二度目の命拾いだっ

た。

訓練は1週間、毎日続いた。僕も事故を教訓として周到なる注意を払っていたが、操縦士には寸時も油断は禁物。状況の判断、適切な処置が要求される事を痛切に学んだ。

飛行場の片隅に望遠鏡が設置してある。ある日、皆で代わる代わる遠い島を見つめていた。噂によると2ヶ月余り前、ミッドウェイ攻防戦で日本海軍艦隊が大打撃を受け敗れ、その痛手を再編するため、次の艦隊が投錨していると。僕も覗いて見た。大きな空母が2隻見える。2,000m位の遠方に翔鶴、瑞鶴の姉妹艦、5万トン級とか。ミッドウェイで敗れたとはいえ、その内容は僕等は知らされない。まだ逞しい空母を持っているじゃないか。きつと仕返しができる筈だと思ったが、飛行機2、300機、戦闘操縦士200数十名を失ったという噂も流れていた。

攻撃から帰って来た操縦士達も空母を失い、他の艦側に不時着水して命だけは助かって、機は海底に沈むしかなく悲愴な気持ちだったろうと、同じ操縦士として胸中を察するに余りあった。この戦闘を境に日本海軍の威力は下がり始めたのだった。

また、一つの出来事を思い出した。それは僕が着陸後、旋回して滑走路の端をピストに向かって地上滑走しながら帰っている時だった。次に着陸して来た機が接地と同時に僕の機を目掛けて滑走して来るのを、バンドを外して伸び上がった時に目の前にした。「この

まま滑走を続けたら、正面衝突は避けられない大事故になる」僕の左側には多くの機が並んでいて、左に回避する事はできない。とっさの判断で右ブレーキを踏み、右旋回で滑走路を横断し反対側の端に回避したと同時に、相手の機は僕の横をすり抜けたため事故にはならず、僕も相手も無事に終わった。誠に危機一髪の神業だった。

胸を撫で下ろしピストに帰って地上に降りたら、状況を見ていた戦隊本部付の操縦士山内中尉が僕の側に駆け寄って来た。「原口、良くやった。俺はもうぶつかったものと目を覆うたぞ。君が回避してくれて本当に良かった。大事故となった筈だ、ありがとう、ありがとう」咄嗟の判断で着陸滑走して来る機の前を横断する事は、いかに危険かは想像に余りあるが、それはほんの3〜5秒の出来事だった。

ちなみに着陸すると飛行機は自分のエンジンの陰で前方は見えない。ただし着陸寸前までは、前方に着陸している機を見ているので着陸方向を充分考慮すべきである。なにせ90mの巾しかない滑走路に、僕の機が巾15mとして、差引き75mの巾がある。制限された滑走路に降りるのだから、軸線の狂いは許されないものだ。

飛行機の整備について少し筆を入れたい。というのは僕等の飛燕機は苦肉の策で、ドイツのメッサーシュミット機を改造している。充分な検討試験飛行が終わらないまま戦地からの要求しげく、とりあえず部隊を編成し前線へ送ったようなありさまだったので、原因不明の故障が続出していた。

例えば、飛行中エンジンが突然停止したり、高速になると機体の振動が激しくなったり、特に燃料系の原因不明が多く、明野飛行場でも整備に悩まされていたようだった。それで製造元の川崎重工から幾人かの技師が戦隊に配属され、その故障の原因究明に当たる始末だったようだ。前線からの矢の催促に抗し切れず、見切り発車したのが僕等の戦隊だった。

第三章・出陣　～ニューギニア戦線と戦闘の日々～（5）犠牲者

完全なる整備もでき、試験飛行で大丈夫という飛行機を選び、第一回先発部隊がラバウルに向けて発進する事になった。その数は約半数。僕は先発から外されたが、機の整備未完では仕方がなかった。なにしろ長距離飛行のため落下タンク2個（200リットル×2）をつけ、ラバウルまで4時間半の飛行である。途中4時間までは目印になる島は一つもなく、ただ羅針盤の進路一途に飛行するのである。風で流されていても目標物がないので、とんと分らない。まして羅針盤が狂っていても、なお分らない。そのため海軍の偵察機が誘導する事になった。戦隊長以下、各部隊が15分毎に出発して行った。僕等は無事を祈る気持ちでそれを見送った。

ところが出発後、1時間近くして全機トラック島に引き返して来た。その理由は途中、積乱雲に阻まれ、進路変向もできず引き返さざるを得なかったとの事。積乱雲の中に入ったら、上昇気流と下降気流に機は危険状態になる事は常々教訓になっていた。引き返した戦隊長および誘導機の労を多としたい。

しかし引き返した直後、第一中隊の大木曹長機が故障で海中に不時着。脱出し海上に浮いている姿を確認したが、救助の方法なく帰還したとの事。さっそく海軍の救難艇が救助に向かったが、2、3回の搜索も虚しく、ついに初めての犠牲者が出てしまった。誠に残念無念、痛恨の極みであった。

それから3日後の昭和18年4月27日に第二回目の出発となった。竹内中隊長以下12機、僕もその中の一員で胸を躍らせた。今度は陸軍の司令部偵察機の誘導との事だったが、司偵機の手数が早過ぎて、うまく誘導ができず戦隊は見失ってしまったようだった。各隊は15分の間隔を置いて出発した。戦隊長下山中佐の編隊が出発して15分後、第一中隊が出発した。さらに15分後、僕等第二

中隊竹内大尉の編隊長の指揮で堂々たる編隊を組んで、一途ラバウルに向けて大空を南下した。僕等が出発してから15分後に、第三中隊も出発している。

長距離の時は最初は落下タンクの燃料から使い、次に翼内タンク、胴体タンクの順に切替えるのであるが、後方に位置する僚機程レバ―を動かすので燃料の消費が多くなり、早めにタンクのコックを切替える必要がある。約1割は差がつくようだ。高度3,500m、巡航速度240km/h、実際は260km/h位は出る筈だが落下タンクをつけているので速度が出ない。飛行中はエンジンの音ばかりで海上には白い小刻みの波のみ、睡魔が襲う。頭を振り長機との間隔を保つのに気を緩める事はできない。

4時間は飛んだろう。地図にある予定した島が見えた。ラバウルの北方にあるカビエン群島である。予定の航路を飛んでいる事が確認された。もう安心である。次第に高度を下げラバウル上空に入った。大きな湾の中に船舶が何隻か停泊している。活火山が小さく煙を出している。湾の横に海軍の東飛行場が見え、その反対側に僕等の目的地である西飛行場が見えている。編隊長機の翼がゆっくり振られ、【解散】の合図と同時に僕等は大きく分散し、順次着陸姿勢に移って無事に着陸した。長かった飛行時間に大きく背伸びした時は、安堵の感もひとしおだった。

30分前に当然着陸していなければならぬ戦隊本部の編隊は、まだ一機も姿を見せない。また、15分前に出発した第一中隊の編隊も到着していない。いやな予感が脳裏を走る。皆、心配して腰も下ろさず、北方の空ばかり注視して待つ事20分、編隊が見えた。「来た、来た」注目の中、着陸したのは15分後に出発した第三中隊の編隊だった。皆、無事着陸したものの、戦隊本部はどうしたのだろう。もう30分も経過している。燃料が乏しくなっている筈なのに。途中不時着か、口には出さないが皆の頭の中は複雑な気持ちでいっぱいである。

ふとその時、一機が東の方から姿を見せた。「ああ、良かった」
と思ったが後続機はなく、ただの一機だけである。着陸したのは本部付の中川中尉である。すぐに状況報告があり、戦隊長機他、山崎機がラバウル東方250kmの珊瑚礁に不時着水し、無事である事は確認したものの、着水する訳にはゆかず進路を西に取りラバウルに向け飛行したが、二機（吉田、小川）が燃料切れで海中に消え、一機はラバウルの東海岸に不時着したとの事。この東海岸に不時着したのは厚木分教所時代からの同僚稲見軍曹で、少々怪我はしていたが原住民に救出されて、1週間余りで原隊に帰って来た。本当に命を得て良かったと励まし合った。

戦隊長の下山中佐と僚機の山崎曹長も海軍の艦艇の救助により、1週間位で西飛行場に帰って来られた。聞くところによると羅針盤が狂っていて、とんでもない方向に道草したとの事。例え針路が1度違っていても4、5時間飛行すると150kmの誤差が出るので、出発前の羅針盤の調整の大事さが痛感させられた。途中、燃料切れして海中に没した戦友が痛ましくてならなかった。部下を亡くした戦隊長の悲しみは、もっと深刻なものだったろう。

この中川中尉も数少ない生還者の一人で、終戦後のニューギニア飛燕会の会合で会った事があるが、当時の面影そのままだった。彼の手記である『幻』に載っていたのを参考にすると、戦隊長に幾度も翼を振り合図して右の方へと進路を変えるよう注意したものの、戦隊長はこれに応じなかったとの事。結果から判断すれば戦隊長の落ち度ともいえるが、自分の羅針盤を信じた隊長の責任感の強さともいえ判断に苦しむ。

編集者M・Hからの注釈

4月27日の第二回目の出発の事について、ここでは本隊、第一中隊の順に第三中隊まで15分毎の間隔を取って出発したと書かれている。しかし、本文に出てくる中川中尉の出版された『幻』によれば、本部と第一中隊を合わせたもの（14機）と、第二中隊と第

三中隊を合わせた（13機）二組に分けて計27機が出発したとある。父も『幻』を読んでこの文章を書いている以上、自分の体験に基づき記憶の中の真実を記していると思う。

しかし、残った資料を照らし合わせていく中で、明らかに記憶違いの箇所は訂正しました。父の原文では第一中隊が帰還したように記されていたが、第三中隊に訂正した。その理由は、整備兵の書かれた別の文章の中に「本部と第一中隊の飛行機は、一機が到着しただけで後は全滅した。スパイ関与説の噂は、我々整備兵の心にその後も重く澱んでいた」とあるので、父の記憶違いの節もある事を了承いただきたい。

第三章・出陣　～ニューギニア戦線と戦闘の日々～（6）不死身の少尉殿

大半の飛行機はラバウル西飛行場に転進したものの、整備兵の一部だけ輸送機で運んだだけで多くはトラック島に残っている。その整備兵を海軍の駆船艇が運んだのは良かったが、2日、3日経つても到着しないので心配された。案の上、途中で敵の潜水艦の攻撃を受け、全員が重油の浮く海上に投げ出された。何名か戦死したが多くは海軍に救助されて、10日余り遅れてラバウルの西飛行場に姿を現わした。顔は原住民のように黒く目だけが光っていて、名前の識別すら困難な様相を呈している。服は重油で黒く染まり、洗濯するにも海水で洗うばかりなので、油が落ちる筈もない。ひどい状態で帰って来たが、数名の犠牲者だけだったのが何よりの幸いであった。

整備が完了するに伴い戦爆連合の進行作戦に、僕等の戦隊からも十数機が上空援護で出撃した。ニューギニア東部の敵飛行場建設地を爆撃するためである。初陣であるが戦隊としての敵機撃墜の戦果は見られなかった。一方、海軍はガダルカナル方面への進行作戦で、多くの戦果を上げたニュースが伝えられた。

僕等は専ら索敵訓練飛行に明け暮れた。飛行機は緑色の模様で擬装しているので、密林地帯の上を飛んでいると判別がつかない。例えば、上空3,000mから1,000m下の敵機を捜すのは困難で、その認識のための訓練である。

戦況の変化に伴い海軍はガダルカナル方面への作戦、陸軍はニューギニア方面への作戦へと転進がなされていた頃、僕等の戦隊はラバウルに前進したのだった。その前に陸軍部隊を乗せた15、6隻の輸送船団がニューギニア東岸近くで敵機の餌食になり、8割位沈没し多くの兵士が戦死したという苦い経験があったと聞いた。その

ため僕等の戦隊に【艦隊護衛の哨戒飛行】の命が発せられた。2時間交代で各中隊から全機出動した。

いよいよ出発、竹内隊長が先頭で後続機の動きを待っていた。僕も機上で窺っていた。僕の長機は垂井少尉である。しかし、どうしても長機のエンジンがかからない。整備班長も必死で、整備兵は汗だくで手動カンセイ機を回しているが、10回、15回してもかからない。すると、竹内隊長の伝令が僕の所に来た。【原口軍曹は垂井少尉と機体を入れ替わり、エンジンが始動したら後から追隨して来い】との命令。僕は仕方がなく下りて「すまん」と言う垂井少尉と入れ替わり、中隊は爆音と共に離陸し北の空へと消えて行った。残された僕は「早くエンジンがかからないかなー」と心焦りながら待つ事5分、10分。とうとうエンジンはかからなかった。【出発は見合わせよ】との整備班長の指示が出て、がっかりした。しかし、遅れて出発して果たして中隊の編隊を捜し得るだろうかの心配もあり、内心はほっとした。

後刻、中隊機は任務の飛行時間を終えて帰って来た。全機着陸したと思っただが、一機足りない。僕と交代して行った垂井少尉が未帰還であった。

顔がこわばっている竹内大尉から事情が報告された。垂井少尉はエンジンの故障で海中に不時着したとの事。その事を護衛の駆逐艦に知らせるため、自分が持っている筆記板に“救助頼む”と書いて自らの航空靴の片方に入れ、駆逐艦の甲板に落としたが確認はできなかった。引き返し垂井少尉の浮いている場所を知らせるため上空を二度、三度旋回したが、護衛艦の反応はなく諦めて帰路に着いたとの事。無念やるかたなしの表情だった。

ところが、3日余りして垂井少尉は怪我一つなくケロリとして帰隊された。労をねぎらい僕の機に乗り替え出発された上の事故なので、僕も自責の念に駆られ、「すみませんでした」と声をかけた。

「やあ、原口。お前は符（運）が良かったよ。お前だったらお陀仏だったよ。着水したのが駆逐艦の左前方だったが、艦は知らん顔して全速力で通過して遠くに見えなくなった。もう助かる術もなく力ボック（救命胴着）で浮いている体を波に任せて天空を眺めた。俺の人生もこれまでかと諦めてから、3時間も経った頃だった。駆逐艦の巨体が僕の横にいた。ボートが降ろされたが、疲労困憊で声も出ず体も動かなかった」生還の喜びをこのように語られ、明野飛行学校時代の教官の優しい眼差しに返っておられた。

その後の救助経過を僕なりに推察してみた。駆逐艦には対空巡視員が四方八方を厳重に監視しているので、事故機の海中不時着は見逃す筈がない。しかし、護衛艦の任務を離れて救助する訳にはいかない。ただちに指揮艦に報告を無電で知らせる事で、初めて指揮艦から隊列を離れ、救助する許可が得られた事だろう。輸送船団を空から護衛してくれていた飛燕機の搭乗員を見殺しにする事は、海軍の恥と心も勇んだであろう。駆逐艦は大きく旋回し引き返したものの、すでに数時間も経っているので発見は容易でない。海上の波間に見え隠れする一点を求めて、近寄る事も至難な技だったろう。やっとボートが降ろされて収容後、艦内に横たわった垂井少尉も感無量だった事だろう。戦闘操縦士1名を救った海軍の友情に感謝の意を捧げたい。

第三章・出陣　～ニューギニア戦線と戦闘の日々～（7）ココポ野戦病院

僕等の宿営する天幕から4、500m離れた所に原住民の住居があった。腰巻を巻いて頭の皿簗に大きな黄色いバナナをいっぱい載せて、物々交換にやって来る。僕等はマフラーとか煙草と交換した。内地を出る時、【原住民と交換するのはマフラーのような布類が良い】と内達があった。僕もマフラーを3枚持っていたが、いざ交換する段になると渋った。

水は雨水を煮沸して冷やしたもの、バナナを食べて水を飲む。トラック島より、なお環境が悪く体を壊すのは必定で、これが下痢の原因ともなった。

便所は20m位離れた林の中に巾が50cm位、長さ4m位、深さ2m位の穴が掘られアンペラで囲い5、6人が一緒に用足しができるようになっていた。衛生兵からの下痢止めの薬を何度も飲んだが止まらない。1日10回、20回と多くなった。もう便所まで行く暇がない。戦友に頼んで味噌の空樽を手に入れた。宿営の天幕から程近い所に仮便所を設けて使用した。

食欲もなく、ほとんど食べない。空中勤務者には特別におやつとして元氣酒というのが配給される。ブドウ酒のようなもので、アルコール分が少ない飲料水のようなものであった。時々、喉を潤した。食べない割りには体力もあり、元氣に振る舞った。夜とか昼間に戦友がいない時は、天幕の中に便器を引き寄せ用を足した。ほとんど出ない。それもその筈、食べないから。ただ搾り出すばかりの便通だが、10分もすると用を終わる。便器の中は消毒薬を入れているので臭いはしない。しかし戦友達には至極迷惑だったろう。衛生兵を通して医務室から何度も薬を貰って飲んでも、一向に効き目がない。もう持久戦だ。1日何回、便通があるのかを試そうと思い、塵紙を1回分ずつ折り畳んで30分に1回として48回分を用意した。この計算は適中した。ちょうど48回をやった事になった。

戦友が心配して上官に報告したのか、その翌日、僕は入院という事になった。ちょうどラバウルの町から対岸に位置する南飛行場の近くに弾薬集積所があり、その横にココボ野戦病院があった。僕がいる西飛行場から2時間はかかった。始動車に衛生兵の下士官が付添っていた。入院手続きのためだった。途中2回の催しで車を止めて椰子林の中に屈んだ。でも事他元気だった。

バラック建ての病棟がいくつも並んでいた。もちろん僕は伝染病病棟に隔離された。長い病棟には粗末な寝台が向かい合っていた。一人ずつの毛布で仕切られ雑魚寝である。暑いので毛布1枚だけの赤痢患者ばかりである。軍医の診察でアメーバ赤痢という烙印が押された。さっそく薬と点滴がなされ、「やれやれこれで助かったなー」と安心感が沸いた。

ここには看護婦3人がこまめに立ち振る舞っていた。白石、斉藤、神戸という20歳前後の女性達だった。食事、便器の始末、衣類、投薬の世話等々、前線基地での待遇とは考えられない看護振りには感謝する他なかった。入院翌日から便通の回数が12、3回、その翌日には9回と、1日毎に下痢の回数は少なくなった。食事の重湯も次第に米粒の量が増えていった。

しばらくしてガタルカナルで戦っていたという兵が赤痢にかかり、骨と皮ばかりに衰弱して運ばれて来た。言葉を言うのもやつとの状態である。リンゲルの注射が腕に入らないので、臀部に大きな針を刺され、痛いと感じていたのが印象的だった。

それに反し僕は幸せだった。順調な経過で1日1回の快便となり普通食が許可されたが、干肉の乾燥物がおかずに出されると、また血便となる始末。退院の機会が遅れるので、努めて平常を装った。食べるとお粥に格下げされるからだ。

困ったのは洗濯で、どんなにゴシゴシと綺麗に洗ってもシラミが湧くのに閉口した。先輩の患者から特策を教わった。それは石油の空き缶で煮沸しないとシラミの卵が死なないから、またすぐ成長

してシラミの親になるとの事。さつそく禪、シャツ、袴下、全部を野外で念入りに煮沸したので、シラミの害からは解放された。

病棟の裏側に細い坂道があった。原住民のおじさんが小さな馬に荷車を引かせ、サツマイモを山積みにして通る時がある。馬に鞭を打ち、どうにか登って行く。僕等はここぞとばかり荷車の後押しを買って出る。その最中に、サツマイモを適当に引きずり落として失敬するためだ。おじさんは、そんな事にはまったく気づかずニッコリ笑って頭を下げている。後で芋を拾い集め蒸かして皆と分け合った事も楽しかった。

敵機空襲により照明弾が投下されて向こう岸に見えるラバウルの町が昼間のように明るく、遠くで爆発の音を聴くようになった。この病院も安全地帯ではないようになって来た。

ある夜、戦局の悪化と共にラバウルへの敵機の空襲があった。隣の弾薬庫の一部に爆弾が命中し爆発した。ある程度、距離を置いている筈だが誘爆して丸3日間爆発が続いた。大損害を蒙ったようだ。病院では毎日2、3名の兵が病死していると聞いた。近くの椰子林の中で毎日、火葬がなされていた。その煙のみが見えて心淋しい思いがしたが、仲間のもとへ復帰する気持ちで打ち消した。

第三章・出陣　～ニューギニア戦線と戦闘の日々～（8）島中尉と戦友の死

いよいよ退院の日が来た。入院して35日目である。おにぎりの弁当にコンビーフの缶詰1個を貰い、看護婦達に深く頭を下げてラバウル行き貨物車に便乗した。

ラバウルに着いて西飛行場行きの車を拾うべく歩いたところ、燃料タンク車が通りかかったので、止めて便乗を乞うたら許されタンク車の縁に掴まった。西飛行場の横に海軍の兵站基地があり、そこへ帰るタンク車だった。飛行場へ通ずる道の両側は海軍農園と呼ばれキュウリ、ナス、カボチャ等が栽培されており内地の様相を呈していた。

竹内隊長に退院の申告をして戦友にも迷惑を謝った。早く操縦感覚を取り戻すためピスト（訓練中の控所）に入った。もう40数日搭乗してない。早く乗りたい。その気持ちを察したかのように、すぐ離着陸の許可が出て、3回程離着陸を繰り返したところで感覚が蘇った。

夕方遅くなると螢が光った。南方の螢は一匹ずつ飛ばない。集団で固まり、いっぺんに光る。バラバラに光らない。その光景は珍しかった。

飛行場の横の空地には前住兵が植えたサツマイモが繁っていた。掘ってみると、かなりの芋がついていた。また、飛行場の端から坂を下りると深い谷間があり、そこに大きなタラ芋が群生していた。葉の高さ2mもある。その小芋も飯盆位の大きさで、二人でやつと引き抜く始末である。この芋を小さく割って石油の空き缶で煮た。味付けに塩を入れたり、キャンデーを入れたりして食べたが、とても美味だった。ちょうど内地でのシロド芋（？）のようで、白くて

固くて味がとても良かった。

この西飛行場からは海軍の一式陸上攻撃機が、ガタルカナルへの爆撃に出撃していた。一式陸攻は俗に『萬年筆』の渾名があり、前部と後部の大きさが余り変わらないところから、そういう渾名を貰ったらしい。それに敵の攻撃を受けると、すぐ火災になるという欠点があった。航続距離を長くするため、燃料タンクを多く搭載する設計になされていたからだ。

連合艦隊司令長官山本五十六大將が前線視察の際、搭乗した機もこの萬年筆の一式陸上攻撃機だったとか。もちろんこの時は暗号が解読され、敵機が30数機で待ち伏せていたのに対し、味方は僅か6機だったとか。これは、山本元師が自ら護衛機を断つての決行だった。余りにも大きな出来事であり、この痛手は深刻であった。司令長官を失った日本海軍は先のミッドウェイ攻撃の失敗と合わせ敗戦へと急に傾く状態となった。ミッドウェイの時も、今回の悲劇も暗号が解読され筒抜けだったと聞いた。大本営作戦のおごりか、油断としか考えられない失敗であったと思う。

昭和18年6月末から7月にかけて、陸軍部隊はニューギニア作戦へと転進する事になり、僕等の飛行第六十八戦隊も故障機を残し移動を開始した。まだトラック島には残存機があり、僕等の中隊にも島中尉と大西伍長が残っていたが不幸な事故が伝わった。

着陸した島中尉の滑走がまだ止まらないところに大西伍長が着陸し、島中尉は無惨にも即死となったとの報告があった。もちろん、大西伍長が間隔を誤り早く着陸したための事故だったと思われるが、大西伍長の責任衝動での自殺がひどく心配され氣遣われたと後で聞いたが、無事立ち直った事は嬉しかった。島中尉も士官学校出身で僕等より一期（半年）古い現役バリバリの、てきぱきとした士官であつた事が印象に残っている。誠に優秀なる戦力を一人失った第二中隊の痛手は大きかった。

ニューギニアウエワク東飛行場への転進では、僕と柴軍曹は九七式軽爆機の後方座席に同乗して行く事になった。飛燕機の数にもよるが、竹内隊長の判断でもあったようだ。少々引け目を感じたのは、同期生の友井曹長と半田軍曹は根っからの六十八戦付だったからか。飛燕機にてウエワクへ飛んだまでは良かったが、友井曹長は岬の先に不時着。半田軍曹は飛行場の手前で着陸に失敗して殉職した事をウエワクに到着してから知った。同期の戦友を二人も失った事は本当に痛ましかった。

ちなみにウエワクの飛行場は、巾60mの長さ1,200mの砂地の飛行場で、一方は椰子林であり、一方はむき出しの椰子の根がゴロゴロ転がった湿地帯であった。そして両側には整備中または待機中の機が機首を連ね、各中隊毎にピストの天幕は操縦士達の控える場となっていた。正味50m巾しか利用されない飛行場での離着陸は命がけであった。

500m位離れた海岸の松林に宿舎用の天幕（宿泊用のテント）が張られ6人ずつが寝泊まりをしていたが、食事は当番兵が運んでくれて助かった。乾燥肉や乾燥野菜の煮付けが多かった。

第三章・出陣　～ニューギニア戦線と戦闘の日々～（9）敵機来襲

1週間余りで整備が完了したのか、いよいよ戦爆連合の大攻撃作戦が展開された。3日間の連続攻撃で、目的地はニューギニア東岸ラエ付近の敵飛行場群および陸軍の上陸地点の爆撃である。九七式重爆、九八式軽爆30機余り、その直接援護の隼機20数機、それに間接援護の六十八戦隊飛燕機20数機の大編隊である。

西飛行場から出撃して来た爆撃機と空中集合するには、また戦闘機的全機が離陸する時間と編隊を組む時間、高度3,500mで編隊状態になるまでには30分、40分と時間がかかる。敵陣まで約2時間を要するため、戦闘機には2個の落下タンクをつけて行かなければならない。敵機と遭遇する直前にこの落下タンクは切り落とされ、機体の抵抗を少なくして戦闘するよう指示されている。従って最初に落下タンクの燃料から使用しなければならぬ。途中、敵機と出遭えばタンクの燃料は入ったままでも切り落とされる。隊長がタンクを切り落としたら僚機他、全機がまるで爆弾でも落とすかのようにバラバラと落下する様は見事である。たまたま落ちないのか、隊長機が翼を大きく振り動かし揺すっていた事もあったが、無事落下して行った。

行きは爆撃機が遅いので僕等の戦闘機は上空を蛇行しながら飛んでいるが、爆撃が終わったら援護どころの騒ぎではない。燃料が心配である。2時間以上の帰路に「我が任務終了、後はごゆっくり」とばかり帰途を急ぐ。爆撃機が3,500mを飛行するならば僕等の戦闘機は5,000mの高度の間接援護である。敵機は5,000mで待機している状況が多く、そのため酸素マスクをつけ空気の不足を補っているが、いざ戦闘となるとマスクは放り出して戦闘するのが常習であった。

僕も初陣の作戦に参加し2日間の攻撃も充分確認したが、幸か不

幸か敵機との交戦はなかった。2日連続の攻撃で飛行機の整備を要するものが続出した。操縦士の疲労も考慮され、1日休養して次の日に再度出陣となった。飛行場の両側には落下タンクを満タンにし、機関砲弾を補充した機が所狭しと並んでいた。あと1日の進行作戦が終わったら、飛行機の補給のためマニラのクラーク飛行場へ受領に向かう内命も出され、僕も柴軍曹もその人員に選ばれていて航法計画を立てるよう指示されていた。僕等は航空地図に航法計画を立てるため、いつもより30分早くピスト（訓練中の控所）へ行った。みかん箱を崩して作り直した地図を広げるのに格好の机があったからだ。

作業に取りかかって間もなく、異様な爆音が聴こえて来た。今までも朝早く、友軍の連絡用飛行機が敵の空襲前にと離着陸する事があったので、「今朝も早くから連絡に来たもんだ」とばかり思った瞬間、濃い茶と緑色で異様に擬装した3機編隊のノースアメリカン機が高度100m位で進入して来た。見上げたと同時に機銃掃射と落下傘爆弾の投下、夢中で机の下に潜り込んだ。あつという間に敵機は飛行場を縦断して行った。並んだ飛燕機が爆発し何機も燃え出した。装備の機関砲、機銃の弾が破裂して四方に飛び散っている。

ポカンと立っていたものの第二次攻撃がやって来るかも知れないので、とにかく防空壕に入ろうと思い30m余り離れた土堤の横穴の壕へと走った。しかし、もう第二次攻撃機の編隊が襲って来た。壕まで入る余裕がなく、椰子の根元に身を伏せた。大きな蟻がたむろしていたが、我慢して顔を伏せ数秒間経った。

敵機が通り過ぎると同時に、防空壕に駆け込んだら奥に2、3名の先客がいた。防空壕の中は10cm余り水が溜まっていたので、中腰になり外の様子を窺った。

遠くで爆音がするだけなので、外に出て滑走路に近づいた。燃える、燃える。明日の3回目の攻撃のため、満タンにしていた落下タンクの燃料に引火してもものすごい炎が天中を覆う。ぎっしり詰めて

並んでいるので誘爆している。滑走路は火の海と化し悪夢を見ているようだった。上空には敵機P38が編隊のまま悠々とこちらの様子を窺っているが、とても離陸する術もない。

落下傘爆弾とは、小さな落下傘（直径1m余り）の先に直径10cm位で長さ40cm位の円筒の爆弾がついていて、地面に落ちた瞬間に心管が破裂して爆発するのである。しかし風圧で揺れて地面に落ちた時等、横になったら爆発しないのである。

半分以上が不発になって、白い落下傘が花のように散らばっている。あまり低空で投下したので自機の風圧に左右され、揺れが止まらないうちに地面に落ちた結果とも思われる。初めて見た落下傘爆弾、それは豊富な物資に任せて作られた僕等の思いもつかない新兵器だった。

徹底的にやられ被害は大きかった。とにかく出撃できる飛行機の数が報告された。第二中隊には4機しかなかった。さっそく飛行機補充のためマニラのクラーク飛行場へ行く事になったが、僕等を運ぶ輸送機がない。ウエワク港から小さな発動機船に14、5名乗り、後方アイタベ港まで海岸線近くを急いだ。敵機の発見から逃れるためだった。

悪夢の出来事も落着きを取り戻してみると次第に反省へと変わり、なぜ前線からの情報が入らなかったのか。友軍の対空監視所が前線に数ヶ所出されている筈なのに、全然その情報が入らなかったのはなぜなのか。

これには理由があった。昨夜、すなわち2日間連続攻撃したその夜、敵のB29爆撃機の2機が夜間攻撃に来た。こちらから二式複座戦闘機が迎撃に上がり、見事その1機を火祭りにした。地上の僕等は拍手して喜んだのは良かったが、敵機が投下した爆弾が飛行場にこそ落ちなかったが、通信網を切断していたのだった。真夜中の事ではあるし、通信隊も承知はしていても動けず夜明けを待ったのだろう。この打撃により前線からの情報は不通となり、最悪の結果

を招いた。

飛行機補充用員として、マニラに派遣された僕等一行はホテルに宿泊した。そこで思わぬ戦友に出会った。矢吹訓練校時代の同期生だった。彼は爆撃科に進み、お互いの任務は異なるが、ここマニラで会う事も奇遇だった。彼は飛行機輸送部隊に所属し、目下、日本とマニラまでの補給機輸送の任務に就いているとの事。「なぜニユーギニアまで輸送しないのか？」の問いに、彼は、「前線基地は危なくて、とても僕等じゃ行けない」と弱気の返事だった。

第三章・出陣　～ニューギニア戦線と戦闘の日々～（10）哀れな僚機操縦士

マニラでは毎日、滞空時間1時間以上の周到なる試験飛行を実施した。長時間飛行で生ずる故障に備えての試みであった。整備ができた機から順次出発する事になった。マニラに来て15日余り経っている。ウエワクでは僕等の帰隊をどんなに待ち焦がれている事だろう。先発6機が出発となった。僕は垂井少尉の僚機として四番機で出発。タバオ飛行場で燃料補給し、メナド飛行場へ向かった。

メナド飛行場に接近しているが、まだ雲間には見えない。高度2000m位に下がった時、僕の機のエンジンが止まった。プロペラが空回転している。飛行場が近くに見えるなら、滑空で不時着できるのだが視野に入らない。断念したところで東海岸の白浜が見えた。そこを不時着地点と決めて降下姿勢を取ったが「もしかしたら燃料切れかも」と思い、まだ高度が充分あるので、胴体タンクに切替え燃料ポンプを手動で加圧した。飛行時間から考えれば翼内ガソリンは充分残っている筈だが。10回余り突いたらブルブルとエンジンがかかりプロペラが回転したので、ほっと胸を撫で下ろしメナド飛行場へ機首を向け降下した。飛行場はすぐ近くにあった。やれやれと安心して着陸したが、他の飛行機はすでに降りていて、僕の機影が消えたのを心配していたと語ってくれた。

水戸飛行学校時代、燃料切れで不時着した時は高度が2000m位しかなく、燃料コックを切替える余裕もなく不如意な自分だったが、今回は高度は充分あるし、その時の経験が生かされ事無きを得た。それにしても飛燕機の原因不明の故障は数多く、今回は気化器の針弁の癒着と思われるので、取り外して念入りに磨き整備した。

メナド飛行場は、海軍の落下傘部隊が降下していち早く占領した所だと聞いていたが、それを証明するか如く、あちこちに墓標が建てられていた。その一つに『。海軍兵曹長戦死の地』と標され、激戦の跡が偲ばれた。

一泊するための宿舎は民家だったが裕福な豪邸で、給与（食事）も目を見張るご馳走だった。また黄色く熟した大きなバナナの美味を、いまだに忘れる事ができない。ここには馬車に揺られ10分ばかり離れた所に温泉風呂があり、日本にいるような気分を満喫した。

翌日、ニューギニアのバボ飛行場に向かって飛び立った。ニューギニアの果てしなく千古を誇る密林地帯の上を飛びバボ飛行場に着陸した。燃料補給の休憩もほどほどに、ホランジア飛行場へ向け飛び立った。

ここは滑走路がなく草原の飛行場だった。整備兵が小さな青いバナナを出してくれたが、とてもおいしかった。ウエワク東飛行場に着く時間がちょうど薄暮（黄昏時）になるように、2時間余り休息してここの出発を加減した。それは明るい内にウエワクに着くと、敵機から発見されるのを考慮されての事だった。50分位の飛行時間である。そのためウエワク飛行場では夕暗みの訪れと共に燈火が置かれ、着陸には不安があつたが無事着陸できたのでほっとした。

マニラから2日目にして、また生臭い戦場に身を置いた事実がひしひしと感じられた。迎え入れた戦友達は飛行機の増援に喜び合っていた。宿舎は海岸線から山に入った中腹の密林地帯の中に変わっていた。次回の攻撃を恐れての事だった。この前の空襲で海岸線の宿舎は機銃掃射を受け、天幕に穴が空き雨洩りで困った事を思い出した。しかし飛行場から30分も夜道を登らなければならず、毎日しんどい思いをした。

飛行機の補充と共に敵地への進行作戦も開始された。

出撃者の氏名、目的、出発時間等、編隊の構成が通達された。僕は波佐間曹長の僚機で出発した。2、3日前から下痢をしていた。「大丈夫かなー」と思ったが、下痢しているからと出撃を断るのはまずい。「まあ、どうにかなるさ」しかし、出発の時刻が近まってまた便通を催した。急いで近くで用を足し機上の人となった。

ラエ飛行場への戦爆連合の攻撃である。僚機についているので長機の行動で二転三転する内、前に行く波佐間曹長の後ろに敵のP38が上から降りて来てピタリとくつついた。僕の前方である。すぐさま機銃を2、30発放った。すると敵機も急反転して降下して行った。ふと、曹長機を見ると左翼から白い煙が出ている。燃料タンクをやられているらしい。急いで側に近づき、指を差し知らせた。曹長は大きく頷いたが、火災を起こさないかと心配した。僕は、後ろからの敵機の攻撃を警戒しながら帰途に着いた。

曹長機はアレキレスの飛行場に燃料補給のため着陸したので、僕も後を追って着陸した。曹長は飛行場の端に機を止めたので、僕もその側に寄ろうとしたが、整備兵が誘導路に招き入れ掩体壕に入ってしまった。曹長と100m余り離れてしまった。飛行機から降りたら再び便通を催したが、整備兵達が物珍しく見ているので草むらに飛び込む事もできず、堪えながら曹長の所まで辛抱した。その格好たるや戦闘操縦士とは思われない哀れな姿、歩き方だったろう。曹長に報告が終わり、側の草むらに駆け込み我に返った。

応急の修理と燃料補給をし、2機共無事ウエワクの飛行場へ帰り着いた。僚機としての僕の任務も達せられたのだった。

第三章・出陣　～ニューギニア戦線と戦闘の日々～（11）まぼろしの撃墜

進行中の編隊の間隔は【一機長一機幅】が原則となっている。すなわち一機の長さだけ下がり、一機の幅だけ横に離れて航進するのである。いざ戦闘開始となると、右、左斜後方に200～300m程雁行形に展開して、戦闘行動ができる隊形になる。

ある日、一列になって敵機を山あいの谷間に追い込んだ事があった。竹内隊長の前に敵機は逃げて行くが、速い。ものすごく速い。高空から反転して急降下で逃けている。僕等も竹内隊長の後に続き追いかけたが、射撃距離に達しないので攻撃できない。その内、敵機は谷間の上部を覆っている雲の中に逃げ込んでしまったので、竹内隊長は急旋回して離脱した。敵機は苦肉の策として雲間に逃げ込んだが、山腹に衝突するか雲中で失速して墜落するかのどちらかである。

ある日、僕等の部隊は戦爆連合40数機で攻撃進行中、遙か右手に敵の戦爆連合の4、50機が、僕等の後方陣地の飛行場へ空爆に行くのと擦れ違った。お互い任務を持っているので隊形から離れる訳にはいかず、見過ごして「あばよ」である。その任務が終わり、帰路に着いた。

30分も経った頃だった。敵機との遭遇を警戒していた時、任務を終えて三々五々に帰投して来る敵機と出遭った。500m位の左下にP38一機が、こちらに向かって来る。「しめた。今、攻撃すれば最高の条件。確実に撃ち落とせる」と思ったが、編隊の最後尾を飛んでいる僕が勝手に隊形を離れ攻撃する事は禁じれている。「おしいな、おしいな」と振り返った時、隊長機が急上昇したので僕も慌てて急上昇した。隊長機は前上方から戻って来る敵機に前下方から一撃くらわして、その敵機を撃墜された。見事な腕前だった。

しばらく経って今度は僕の長機波佐間曹長機に、前上方から急降

下しながら攻撃して来るP38を見た。僕はこの時とばかり機首をP38に向け、一撃くらわした。上昇せず降下して逃げようとする敵機の後を追いかけて、また一撃くらわしたが。しかし、深追いは厳禁とばかり機首を返して編隊の後を追ったが、遙か離れてしまい歸路を急いだ。

思わぬ戦果を上げたが、帰投してウエワクの飛行場が爆撃を受けていたら着陸できないだろうと心配や不安もあったが、帰ってみると被害はなく安全に着陸できてほっとした。今まで何度も飛行場を爆撃されたが、滑走路にともに落ちて大きな穴が空いた事は一度もなかった。ただ一発だけ滑走路の入口の横に落ちて直径10m位、深さ3m位の穴が空いていた。敵の200kg爆弾の穴だった。5,000~6,000mの上空から飛行場の軸線に真っ直ぐに入ってくる事が困難のようだし、風によっても弾がそれる。また投下時機に關係するので手前に落ちたり行き過ぎて落ちたり、余程の訓練が要求されるようだ。僕が負傷してウエワクを去る日まではB29による爆撃は10数回受けたが、滑走路に落ちて大きな穴が空いた事は一度もなく、いかに爆撃が難しいかが想像されるのである。

帰還後、隊長が「一機撃墜したが、もう一機の火災を起こして落ちたP38は、誰が落としたのか？」と詮索された時、僕は撃墜したのか不確認に終わったので「不明」と言った。しかし隊長の僚機だった高橋少尉が落とした事になっていた。

後に、僕が負傷してマニラの病院に入院中に、高橋少尉が見舞いに来られた。「あの時、撃墜した一機はお前が落としたP38だったんだよ、俺が撃つたのは自信がなかったが、あの時の経緯で俺が落とした事になっていたのだ」と煮え切らない告白だった。「はあ、そうだったのですか」僕の気持ちは嬉しさと悔しさの混じった複雑なままで一件落着した。

第三章・出陣　～ニューギニア戦線と戦闘の日々～（12）二人乗り飛燕

戦闘になると後方について援護している僚機ほど燃料消費が多い。その理由はレバー全開で長機の後を追うからである。常にこの事を考え、コックの切替えと飛行時間を計算し、余裕の燃料を残し基地へ帰らねばならない。せつかく基地に帰っても、飛行場にただちに着陸できない場合もある。編隊で帰っても後方機が着陸するまでは5分、10分と時間がかかったり、事故機でも生じた場合は、他の飛行場に着陸せねばならない時もあるので、それだけの燃料を残して置く事が肝要である。

こんな例もあった。ある戦闘で20分余りの交戦が終わり帰路に着いた。長機は容赦なく先を急ぎ行ってしまう。僕は追いかけるためレバーを引いて速度を増したが、ガタガタと機体から振動が出るのが心配なので、レバーを戻し速度を落として基地へ向かった。先方の友軍機はとうに見えなくなったが、後方からの敵機の追撃を警戒しながら飛行していた。

ふと燃料の事が気になった。出発してから4時間以上飛んでいる。基地まではまだ30分はかかるのに燃料計から計算すると、ちょうど30分しか残っていない。今日は戦闘開始が早く、落下タンクを10分も早く切り落とし、また戦闘している時間も長かったからだ。不時着用の飛行場として指示されていたハンサー飛行場に着陸する事にした。しかし巾が30m余り、長さ1,000m余りの小さな飛行場で、ウエワクまで30分の飛行時間を要する地点である。巾30mあれば何とか着陸できる（ちなみにウエワクは巾60m）と決心し、高度を下げ何とか無事着陸し、ほっとした。

燃料補給を頼むと、皆てきぱきと動いてくれた。すると、爆音と共に低空より我が部隊の飛燕機が進入して来て、一周しながら着陸姿勢に入り降下して来た。よく見ると脚を出していない。「はて、忘れていいのか。故障なのか」と心配した。安全をとって着陸復行

の合図をし、脚の出でない事を知らせた。相手の操縦士も気づいたのか着陸を断念して舞い上がった。しかし、また一周しながら着陸降下を始めたので、「脚の故障だなー」と判断し見守った。すなわち胴体着陸である。プロペラは3枚とも地面を切り内側に曲がり、胴体下部についている水を冷やすラジエターは飛んでしまった。

降り立ったのは波佐間曹長であつた。曹長は滑油タンクをやられ、やっとここまで帰って来たけれども滑油計が“0”となりエンジンが焼きつき、このままウエークまで帰る間にプロペラが止まったら、海岸線か密林地帯の中に不時着を余儀なくする事を恐れ、ハンサーに不時着を決心したのだつた。滑油タンクの油が少なくて、油圧が足りなくなり脚が出なかつたのである。無事着陸したものの、その時の衝撃からか「頭が痛い」と言つて、ピスト（訓練中の控所）の椅子に横になられていた。

僕は曹長の回復を待った。しばらくして気分が良くなつたのか起き上がり、僕に「基地に帰り報告してくれ」と頼まれたが、上官を残し帰る訳にはいかず、「いや曹長が僕の飛行機で帰ってください。僕は後から何とか帰りますから」と二、三問答した。

ふと、僕はある考えを口にした。「胴体内にもう1人乗られないでしょうか？」もちろん操縦席は1人でやつとであるが、真ん中付近に整備点検用の扉がついていて、中に人が入れる事は知っていた。扉を外して中を見ると操縦索（大きな綱）が張られ腰を下ろす余裕はないが、操縦索を股越えて中腰に屈めば何とかいけそう。「一度試してみるか」胴体タンクの燃料を全部、また翼内タンクの燃料も半分にして出発する事になった。波佐間曹長が僕の機を操縦し、僕は胴体の中に潜り込んで、外から扉を固定して貰い離陸した。

機体はぐんぐん上昇して行く。僕を乗せた事で機体の振動が再発しないか心配だつた。外の見えない薄暗い機内で、「無事に着いてくれ」と祈るしかなかった。30分の飛行時間がとても長く感じられた。高度が下がり始め、着陸態勢に入った。

無事ウエワク飛行場に着陸したが、整備兵はびっくりしていた。

「原口軍曹の機に波佐間曹長が乗っている。どうした事か」と。曹長が点検用の扉を開けるよう指示を出している。外から扉が外されると夕焼け空が見えていた。何事もなかったかのように、僕は二ツコリと地上に降り立った。まるで手品師になったような気分だった。整備兵達は目を丸くして僕を見ていた。三式戦にも二人乗れるという事を実証した最初の殊勲者である。殊勲甲の感謝状ものである筈だったが、反応はなかった。

しかし、この経験を生かして最前線への出撃が可能となり、行動が起こされた。すなわち最前線基地マダン上空に敵のP38が毎日偵察にやって来る。高度5,000〜5,500mで偵察に来る。マダンから敵陣まで1時間の航続距離である。この敵機を捕捉攻撃する命が下った。僕の中隊の本山中尉、高橋少尉、垂井少尉と僕の四機が出撃する事になった。ところが前線基地には飛燕機の整備兵が一人もいない。最小限4名の整備兵が必要なので、胴体内に一人ずつ入って前線へ行く事になり、僕等が経験した事がさっそく利用された。

ウエワクを出発し、マダンに無事着陸し整備完了した午後、相変わらず敵機P38の定期便がやって来た。ただちに僕等4機は飛び立った。僕は四番機、ぐんぐん上昇しているが、心焦るためか高度が上がらない。4,000m位になった時、敵機P38は気づいたらしく旋回し5,000m位から急に機首を下げ遁走し始めた。敵は速度をつけているのでみるみる遠ざかって行つた。僕等も後を追つたが、上昇中だったので速度が出ず離されてしまった。無念ながらも引き返し、着陸せねばならなかった。

翌日、再び空襲警報と共にすかさず僕等は機上の人となった。敵機はまだ見えない。3,000m位で敵の定期便を捉えた。5,000m位の高度で進入して来る。また昨日の二の舞いをするのか、僕は天蓋を被った。本当は視野が悪くなるので被りたくないのだが、

天蓋を被ったため速度が増して前の三機を追い越し5,500mまで上昇した時、5,000mで飛んでいた敵機P38は気がついたらしく急旋回して逃げ始めた。「逃がしてたまるか！」僕も急旋回してP38を追った。僕の方が高度が高かったので瞬く間に接近し、思い切り撃ちまくった。敵機と衝突の危険を感じたので、離脱して大きく旋回して友軍機を探した。1,000m位離れて飛んでいる。撃墜の確認はしないまま後を追った。

僕は長機から単独で離れ、功を先取りした出しゃばりが気になっていた。大目玉をくらうかも知れないが、僕に言わせるとあのまま上昇していたら昨日と同様、僕等が高度を取らない前に敵機に気づかれ逃げられてしまった筈だ。僕の機が馬力があつたのかも知れなかった。天蓋を閉めるのと開けるのとの差は、10km/h位速度の変化があると言われていたのが事実かも知れない。しかし、僕の慢心がそうさせたのかも知れない。いつも後から追いかけるばかりで敵機に一撃する機会がないので、今度こそ思いを遂げようと一人でやった事も、考えてみれば他の三機が後に続いている安心感からの行動だった気もする。

着陸後、「異状なし」と垂井少尉に報告したら、「見事だったよ」「は、落ちたんですか?」「火災を起こして落ちたよ」「はあー」と、わざととぼけたような返答をした。僕が初めて敵機を確実に撃ち落としたのを、垂井少尉が見届けてくれたのだ。僕は内心「やった!」と喜んだが、編隊長の本山中尉は「してやられた」と憮然たる顔をして、この戦果には一言も触れなかった。それもその筈、僚機の出しゃばり行為が気に入らないのだろ。僕は知らん顔で内心は燃えていた。

2日間の出撃作戦を終えて、無事ウエワク基地に帰った。以前、ピスト前に操縦者を集め厳しい訓示があつた。「敵機の直接攻撃は編隊に委ね、僚機は後方を警戒して長機の攻撃を助けるのが任務だ。バラバラに離れての勝手な行動は決して許さん。我が中隊の今の戦

闘模様は個人の功績を焦っているが、中隊の戦果は皆の戦果だ。その事を忘れるな』というきつい訓示があっていた事が頭にあつて、心も晴れなかった。

僕はよく迎撃作戦に引つ張り出された。本部から電話のベルが鳴る。敵機の戦爆連合の来襲である。相手はいつも40機、50機の編隊の攻撃である。隊長竹内大尉はただちに攻撃者を指名される。隊長自ら出撃する場合は、「僚機波佐間、小隊長（三番機の事）垂井、僚機原口」と、よく僕は引つ張り出された。隊長にしてもそうだが、自分が引き連れて行く部下は最強の強者をとというのが常識だろう。僕はそれだけ信頼されているという自信はあった。そして確かに出撃回数は誰よりも多かった。

飛行機の損耗もひどく戦隊で5、6機しか出撃できなくなり、各中隊がその飛行機を共同で使用していた。ちょうど空襲警報が発動され、第一中隊の猛者連中が5機迎撃に離陸した。1時間余りで戦闘も終わり、着陸し始めたが最後の1機が片脚しか出ず、片脚は半分出たまま30分間も空中操作で揺さ振ったが、とうとう出ないまま飛行場に胴体着陸した。

ところが30分位経って、再び空襲警報の電話が鳴り響いた。「敵襲！」と言って隊長自らバンドをつけ、「僚機高橋（少尉）三番機波佐間、四番機原口」と続いた。整備班に「プロペラ回せ」の号令をかけ、残る本山中尉に4人の出撃を報告敬礼し、僕等に「滑走路に障害物があるので、飛行場の一番端からフラップ5度降ろして離陸せよ」と注意を促し飛行機の側に走った。すでにプロペラが動いていた。隊長はすかさず車輪止を外し一目散に出発点へ。他の2機も続いたが僕の搭乗する機のプロペラが回らない。他の3機は1回で始動し、出発地点へ移動し始めた。始動するには右翼に上り胴体中に手動桿を入れ回転させ、勢いがついた時に操縦席でスイッチを入れる。しかし一度失敗すると2、3回はかきにくいようだ。始動車で前の方からプロペラを回転させる法もあるが、始動車が滑走路にはみ出すので使用しないらしい。

長機の竹内隊長が爆音と共に飛び上がって行った。物凄い土埃で10秒位は動けない。やっと僕の乗る機のエンジンが始動した。急いで飛び乗りバンドに落下傘の吊金をはめ、両手を上げて「車輪止め外せ」の合図を出し、機首を出発地点に向け滑走を始めた。二番機が飛び上がった。またもや土埃。三番機が離陸して行った。埃の中、まだ50m位はあるので左右を気配りながら急いだ。

ところが前方にいた整備兵がけたたましく蜘蛛の子を散らすように動いた。「変だな？」と思った瞬間、異様な爆音が上をかすめた。

頭を上げると敵機ノースアメリカンの3機編隊が超低空100mで入って来た。機銃掃射しているが爆音で聴こえない。飛行機から離脱して地上に伏せようかとも思ったが、幸いにも三番機の離陸直後の埃で僕の機が見えなかったらしい。離陸を決行の他なし。しかし出発点までには、まだ50m滑走しなければならないが、頭上の敵機から攻撃されるのを避けるため、その場で180度回転して離陸に踏み切った。機は轟音を上げながら埃の中を突き進んだ。尾部が浮いて100km/h位の速度は出ていた。

ちょうどその時、前方に不時着していた友軍機が目の前に現われた。とつさに操縦桿をいっぱいに引いた。1m50cmは浮いたが、速度不足で不時着機の胴体に衝突して僕の機の脚は折れ、飛び越えて胴体のみで接地して止まった。異状な衝撃だったと思うが、僕はあまり感じなかった。急いで機から離れ滑走路外の凹地の椰子の根元に身を置いた。敵の第二次攻撃を予想しての事。案の定、次の編隊が低空で入って来た。すごい攻撃のため頭を上げる事ができない。爆音が過ぎたので頭を上げてみた。

敵機の後部座席で身を乗り出して機銃掃射しているパイロットを見た。白い頭巾を被り目だけ出していた。航空帽も被っていない大胆な奴が憎らしかった。落下傘爆弾がふわりふわり落ちて来るのも見えたが、飛行場の滑走路には先の不時着機と僕の事故機があるだけだった。貴重な1機を駄目にした自責の念に駆られた。

敵の攻撃の最中に離陸した事、離陸を断念して退避していたとしても飛行機は第二次攻撃の餌食になって撃破されただろう等々、複雑な気持ちで反省していたら友軍機が着陸して来た。僕の前に離陸して行った三番機の波佐間曹長だった。曹長は離陸して脚を入れたと同時に前から進入して来た敵機と真正面となり、低空に機を下げて難を逃れたものの滑油タンクをやられ、油洩れのため回避していたとの事。

ちなみにこの戦闘で竹内隊長は未帰還となった。皆、心配しながら

ら隊長の無事を祈願した。3時間余りして情報が入った。隊長は敵10数機と交戦し、その3機を撃墜したものの残念ながら被弾し、落下傘降下で海に落ちたところを沿岸警備隊の兵士により救出されたらしい。

その3日後、帰投され皆、無事を喜んだが、落下傘で降下する途中、敵機の機銃掃射の弾が口唇をかすめ前歯2本が欠け顔立ちが変わっていたが、助かって幸いだった。それにしても1対10数機の戦闘にもかかわらず、3機を落とした隊長の勇猛さに敬服せざるを得ない。

第三章・出陣（ニューギニア戦線と戦闘の日々）（14）四発被弾

こんな経験もあった。空襲警報がかかり、これを迎え撃つため離陸し左旋回しながら射撃用のスイッチを入れ、海上に向け試射をして弾が出るか出ないかを確かめながら上昇する。長機は後続機が追いついて来るよう、旋回しながら編隊を組む。進攻作戦の場合は機数が多いため、【空中集合何時何分、飛行場上空高度3,000】等と指示され、戦爆連合の隊形が整った後、敵地へ向かうのであるが緊急の迎撃作戦はそんな時間はない。地上にまごまごしていたら、すぐにやられる。我先にと離陸し空中にて編隊を組み、敵機に向かって行くのである。

僕も離陸し上昇しながら友軍機を捜したが、どうしても視界に見えない。しかし1,500m位で、上空5,000mに敵機の進入を見た。B24が6機、その上に戦闘機が点々と編隊を組んでいる。30数機はいるだろう。とても僕一機で迎え撃つ状態でない。上昇を断念し山手の方へ退避して、敵機の攻撃を警戒しながら飛行場を見ると、爆撃により黒白の煙がむくむくと上がっている。飛行場がやられている。「着陸できないならどうしよう」ふとそんな不安が脳裏に浮かんだ。とても淋しい気持ちであった。なぜなら着陸する所を失った機には不時着しかない。命の保証はない。

しかし、ウエワクの西飛行場、またはハンサーその他の飛行場もあるんだと気を取り直し、上空からの攻撃を警戒したが、あまり高度差があるため敵機も攻撃を断念したのだろう。爆撃機を援護し帰路に着いている。やっと重苦しい空気から解放され、着陸するため降下し飛行場上空で、滑走路の状態を確認したが爆撃され穴が空いた痕跡はない。それにしても僕の前に離陸した友軍機は、一体どこを飛んでいたのだろうか。不安を抱きながらも無事、無傷の飛行場に着陸した。しばらくして他の機も無事帰還した。後で聞いてみると、皆、退避して無理な迎撃戦を避けたのだった。

迎撃戦ではいち早く上昇して、上空を制覇して高位から敵機を迎え撃つのが原則である。下方から敵機に挑む事は自滅の他なく、損害を蒙るのは必定であり、退避は当然であつたと思う。いかに早く敵の襲撃の情報を得る事が作戦の要だが、こちらへの情報は前線の対空監視哨から送られて来るが形勢不利の場合が多かつた。後手、後手では、實際応戦するのは戦闘隊だから堪つたものではない。「戦闘操縦士は消耗品ではない。心してくれよ」と叫びたい。

【飛行機送れ】の矢のような催促により、やっと僕の戦隊も20数機の出撃体勢となつた。相変わらず最前線から戦爆の大編隊が進中の情報が届いた。「いざ出撃」第一中隊が10機、僕の第二中隊からも10機、次々と離陸し編隊を組み上昇した。僕は最後尾を警戒した。久し振りに集団で戦闘できると勇み切つて上昇した。

高度3,500mで敵機発見、爆撃機は別な航路を取つたのか見えないが、高度5,000m位の敵戦闘機の大編隊に上から被られた。高度差1,500m、絶对的に僕等が不利の形勢である。「ああ、もう5分早かつたら高度差がなくて同等に戦えるのに、好機を失つたな」今日こそは快心の余裕あるものと、上昇していたのになんと不運な事だ。仕方がない。速度をつけるため水平飛行に移り、隊長の【敵機発見、戦闘隊形を取れ】の合図で隊形を取つたと同時に、敵の第一撃の攻撃が始まり、編隊で急降下攻撃をして来た。もちろん急旋回でかわす。だが次から次へと攻撃を緩めない。僕等はこれに反撃する余裕はない。僚機も同様に急旋回するが、それを狙つて次の敵機が500m位の距離から撃つて来る。弾道がはっきり見え、首を引つ込めて旋回に旋回を。敵は200m位まで近づいては、また急上昇したかと思うと、次の敵機が狙つて攻撃して来る。必死で右、左へと旋回していたら、僕は左翼に大きな衝撃を受けた。操縦桿を操作しても思うように反応しない。「しまった！」と思い反転して高度を下げ、敵機の追撃を警戒したが敵機は他の友軍機への攻撃中で、僕を追ってくる様子もない。速度を落とし水平飛行に

移ったところ、操縦桿も操作できるので飛行場へと降下して行つた。左翼に大きな穴ができている。弾倉に弾が当たり破裂したのだった。着陸には細心の注意をして降りた。

点検したところ左翼に4発被弾していて、その一発が機銃の弾倉に当たり爆発したのだった。運良く命は繋がり死なずに済んだ。確か僕の中隊にも2、3機未帰還機があつたようだったが、今は記憶に留めない。

第三章・出陣 〜ニューギニア戦線と戦闘の日々〜 (14) 四発被弾(後書き)

- 2009年10月22日よりSF映画シナリオ「クリムゾンX」を連載。

<http://ncode.syosetu.com/n3801i/>

第四章・負傷　ゝ生死の境と内地送還ゝ（1）敵弾貫通

これまでいろいろと戦況を綴ったが、僕が負傷して戦列から離れた時の状況を思い出してみたい。

昭和18年10月11日、可動機数も4機になり、敵機来襲と共に機上の人となった。編隊長本山中尉、その僚機波佐間曹長、分隊長垂井少尉、その僚機として僕がしんがり固めた。高度5,000mで雲間を出入りして飛行場の上を旋回、敵機のを来襲を待っていた。敵機が5,000mでやって来ても対等に戦える。たとえば10数機を相手としてもだ。5,000m以上では空気が稀薄なため、酸素吸入が必要となるのだが使用していなかった。5,000mでも長時間飛ぶのは意識が薄れ危険であり、体も冷え切って寒い。

30分余り哨戒していたが敵機のを来襲もないと判断したのか、編隊長が降下姿勢を取り3,500mまで高度を下げ海上に出た。僕は「このまま高度を下げて、大きく迂回して飛行場へ帰るのだな」と判断して、安全のため射撃用スイッチを切った。隊形は雁行形右後方へ一線の距離300m位である。僕は最後尾から長機垂井少尉を、左前方の視点の中に見ていた。その前方左には編隊長とその僚機も飛んでいる。

ふと僕の左上方に、垂井少尉に向かって後上方から突っ込んで来る機が目に入った。友軍の隼機が急降下して来たのかと思った。実はその日、僕達の出撃前に、隼2機が離陸して行ったのを思い出した。よく見ると胴体に赤い日の丸ならず、マークの敵機だった。僕は慌てて機首を敵機に向け、援護射撃の引金を引いた。しかし弾が出ない。「しまった！」スイッチを切っていた。急いでスイッチを入れ、撃ちまくった。垂井少尉に攻撃されている事を知らせるよりも、敵機を撃ち落とす照準だった。もちろん弾道は垂井少尉の方向に流れていた。敵機は僕の攻撃を避けるため急上昇するのが常道であるが、なぜか降下して行くため僕は切り返し、その後を追って

また一撃を見舞った。その瞬間、僕は“ガン！”と大きな衝撃を感じた。敵機の僚機が僕を狙って来ていたのだった。「やられた！」と思った。「もうだめだ」急反転して次の攻撃を逃れ後方からの追撃を心配したが、追って来る様子もない。

機を水平飛行にしたら、高度計は1,500mを指していた。機体の左前から白煙が噴いて座席内を洗う。急いで天蓋を閉めたが、ガソリンの噴出なら引火して火災となるかも知れない。バンドを外し天蓋も開け、いざ火災発生時には、すぐ反転し落下傘降下できる準備をした。やや落着きを取り戻したが、匂いが、ガソリンの匂いではない。「はあ、水タンクから噴出しているな」と判断し、プロペラの回転を落とし海岸線へと直行した。水冷式エンジンのため、水がなくなると過熱でエンジンが焼付けを起こし停止する。なるだけ海岸線に近づき、不時着して友軍の兵隊に救助される事を願いつつ飛行を続けた。10分余り祈るような飛行だった。

やっと海岸線に出た。そこから500m位の所に飛行場がある。何とか飛行場に着陸できるかも知れない。「プロペラよ、止まらなideくれ」着陸布帆は逆方向を示している。しかし、その方向から正規に着陸するには、左旋回180度せねばならない。もういつ止るかも知れない、そんな余裕はない。逆方向から着陸するのに躊躇はしなかった。急旋回し不時着の態勢で近回りし、スイッチを切り滑走路に突っ込んで行った。

何も憶えていない。気がつけばうまく着陸できていた。我ながら良く着陸したもんだと思った。速度が落ちると共に両足先でブレーキを少しずつ踏み、早く停止させようとしたが何やら右のブレーキが効かず、左の方にばかり片寄りするので「おかしいな、おかしいな」と思いながらも、左のブレーキもこれ以上踏めない。惰性で転がるのに任せた。駆け足位になったが、なかなか止まらない。「行くところまで行け」とそんな気になった時、じんわり尾部が持ち上がりプロペラの先が地面についた。普通、この事を“鼻をつく”と言っていた。前に30度傾いた状態だ。

僕は立ち上がるため天蓋の縁に手をかけようとした。右腕が上がらない。ひよっと見ると右の肩から臀部にかけ、べっとりと血が滲み出ている。しかし、痛さを感じない。もう一度立ち上がろうとしたが、右足に力が入らない。見ると航空長靴が血で覆われている。動けない、もう万時休す。「おい、降ろしてくれよ」と叫んでみたが、声にならなかった。整備兵が集まって来て機体の上に飛び乗ろうとするが、翼が前に傾き油が流れているので滑って登れない。脚立を持って来て、4人がかりで座席から抱え出してくれた。

地上に降り立って初めて肩と右足首の負傷を知った。その途端、物凄い激痛に襲われた。戦友に掴まりピスト（訓練中の控え所）まで歩いて行き状況報告しようとしたら、「このまま野戦病院に連れて行け」というピストからの伝令で、始動車に乗せられ衛生兵が付添い病院へと急いだ。車に乗る前に右大腿を止血してくれた。激痛を紛らすため、僕は「畜生、畜生」と繰り返し、無念さを訴えた。

第四章・負傷　ゝ生死の境と内地送還ゝ（2）野戦病院と空襲

それにしても負傷して着陸するまでの14、5分の間、我が身の激痛は少しも感じなかったのは不思議である。昔、ある禅宗の高僧が火を放たれ焼ける山門の上に座し、『心頭滅却すれば火もおのずから涼し』と言って大泰として死を遂げた話を聞いたが、ある事に精神が統一し集中すれば身の苦痛は感じないものだとは自ら体現したのだった。

泥水の道に揺られ、呻く力もなく遠くなる意識を衛生兵に起こされながら約一時間後、野戦病院の処置台の上に真っ裸で横たわっていた。服はハサミで切り取られ、身体についた血を拭いた後、5、6人がかりで手当てをされた。激痛も和らぎ、脚は木のギブスで固められ、肩は三角巾で吊られて50m位離れた病棟に運ばれた。蚊帳の中の8人に仲間入りとなった。中隊から1人、看護付添いに来てくれて何かと世話をしてくれた。

僕の負傷の様態を述べたい。右肩甲骨に、4cm×3cm位の防弾板の破片が突き刺さっていたとか。後日、僕に見せるために柴軍曹が保管していたのを貰ったが、その後どこかに紛れ込んでしまった。その防弾板とは、操縦席の後ろにある厚さ1cmの防護鉄板の事で、敵機の撃った機関砲13.3mmの弾が僕の右後方の防弾板を撃ち砕き、その破片が突き刺さったのだろう。そして右上腕部を玉子ぐらいの大きさに抉り取っていた。もう一つの弾が、右後方から僕の右足首の上を外側から内側へと貫通して、滑油タンクが水タンク系の配管を破壊したと判断される。

終戦後、その時の整備班長の安永少尉とお会した時、「君の飛行機は冷たい所から急に降りて来たため、地上の暖かい空気に触れて真っ白い霜が降りたようだった」と当時の事を話されたが、僕は朦朧としていたのでまったく分からなかった。

病棟は密林の中にあつて1 m余りの高床に作られ、アンペラが布団代わりに床に敷かれ毛布を広げ、蚊帳は張りっぱなしである。1日毎に衛生兵か軍医が包帯を交換消毒に来るが、日曜日は休診のため化膿気味となり痛みが激しくなる。小便の量も多い。口の渇きに任せ湯を飲む量が多いからだ。大便の世話から食事の世話、洗濯物まで付添いの兵隊には非常に世話をかけたが、その兵隊の名前も、そして戦死したのか無事内地へ帰れたのか、今では遑として不明なのが心残りだ。

野戦病院の周りは椰子の木も繁っているので、「敵の空襲からも逃れているのかな」と思つた矢先、さつそく見舞われた。起き上がり退避すると、痛みがともひどくなるので蚊帳の中に寝ていた。幸い近くで爆発音が聴こえなかつたので、安心して横たわっていた。2、3日後、また空襲があつた。付添いの兵隊が「防空壕に入りましょう」と心配してくれたが、2、30 m離れた所まで背負われて退避するのも嫌なので、僕は一人だけ残つた。今度はひどかつた超低空で入つて来たノースアメリカン機の爆撃で、樹木の炸裂する音に肝を潰した。「どうせやられるなら寝たままで、ここでいい」と高を括つていた僕は、途端に飛び起き1 m位ある床下へ潜り身を伏せた。無事難を逃れた。

空襲は終わったが、傷が痛く動けないで呻いていた。兵隊が戻つて来て、僕が蚊帳の中にいないので「班長殿、班長殿」と呼んでいる。やっと呻き声に気づき、床下から引きずり出し毛布の上に寝かしてくれた。その後の空襲からは絶対逃げないで、蚊帳の中で諦めて寝ていた。開き直るという事だろう。幸いな事に、それ以後たいした空襲はなかつた。

第四章・負傷　ゝ生死の境と内地送還ゝ（3）過ぎ去りし思い出

2週間余り経ったある日、僕の長機だった垂井少尉が見舞いに来られた。僕の傷を心配し労って下さった。「あの日、戦闘が終わり君がいなくなったので心配だった。海上に油がどつてり浮いていたので、君が落ちたのなら海面に姿が見えないかと、何度も何度も旋回して探した。しかし発見できずがっかりして飛行場まで帰って来たら、鼻をついた君の飛行機を見つけて急いで降りて来たんだ。君が負傷してすでに入院している事を知って安心したよ。助かって本当に良かったね。仇は1機落としたよ」と慰めていただいた。僕は垂井少尉の優しさ、部下を思う心情にとても心を打たれた。

海上の油は、僕が追撃した敵機ではないだろうか。通常は上昇して退避する筈なのに、そのまま突っ込んで行ったのだ。パイロットに弾が当たり、海に突入したのではないだろうか。僕は確認の余裕もなく、僕を狙って来た敵機にやられたのだった。飛行機が海に落ちると、海上に油が浮くので確認されるのが通例だった。いずれ不確定のままである。

野戦病院の横に食料集積所があった。夜間の動哨が遠く離れた時、その隙を狙って兵隊達が缶詰を失敬するらしい。僕の付添いの兵隊がある夜こっそり、「班長殿、パイ缶を食べんですか」と差し出した。何よりのご馳走だ。あの大きなパイ缶を二人で平らげたのだった。それにしても大胆な兵隊達だと呆れてしまった。

傷の痛みも和らいで来ると退屈となる。いろいろ過ぎ去った事か思い出された。

ある日の事、空襲警報が出て他の中隊が迎撃に飛び立ったので僕は防空壕入りとなった。遠くの防空壕に入るのも、暑さのためだるくて走りたくない。たまたま側にいた川本軍曹、六期か七期だっ

たか。彼もそうだったのか意見が一致し、ピスト（訓練中の控え所）の側のタコツボ防空壕に潜り込んだ。やっと二人を収容する位の浅く幅も狭い緊急用の防空壕である。

最初は首を出して進入するB29を見ていた。だんだん近づいてくる。飛行場の軸線にきつちり乗って入って来た。これが一番怖いのだ。軸線から離れていたら爆弾もそれるが、やっぱり軸線上だ。これは大変だ、遠くの防空壕まで逃げる暇はもうない。一か八か運を天に任せ、顔を引つ込め固唾を呑んだ。爆発の音が遠くで響いた。第一弾だ、一秒間隔位で第二弾、100m位かな。また第三弾、物凄い爆発音、地割れの響き。その時、川本軍曹が「南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏」と言って僕にしがみついた。まさか、まだ若い22歳位の少年飛行兵の彼が、思ってもみなかった。故郷の家が真宗だったのだろうか。後で聞いたら、何も憶えていないという。不思議な念仏で、僕も助かったようなものだった。50m近くに大きな穴が空いていた。僕等は命を救われたのだ。それ以後、二度とタコツボ防空壕のお世話にはならなかった。

また、ある時は横着に構え、歩いて遠くの防空壕に向かっていた。するともう上空に敵機が現われていた。「しまった」と思ったが、どうしようもない。大きな爆弾のような物が、くるんくるん回っていくつも落ちて来る。思わず椰子の根元に身を縮めたが、“バサッバサッ”の音だけで爆音がない。よく見ると敵機が落とした燃料タンクであった。やれやれと胸を撫で下ろした事もあった。

飛行場の近く、南側の低い丘に高射砲陣地があった。ある日、部隊長の下山中佐がその陣地を見に行くので「ついて来い」と言われ、僕等5、6名も後に続いた。

丘に上がると陣地に十五門位高射砲が空を睨んでいた。兵隊が5、6人ずつ待機していた。僕達には物珍しかった。前の空襲の時、低空で攻撃して来た敵機を水平射撃で2機撃墜したと話していた。あっぱれである。

第四章・負傷　ゝ生死の境と内地送還ゝ（4）自己退院と傷口

ある日、原隊から伝令が来た。「飛行機受領のためマニラへ近く出向する。歩けるようだったら、その飛行機でマニラの陸軍病院へ連れて行くから病状如何ん」という内容だった。とてもまだ歩く事はできない。病棟の鴨居に掴まり歩こうとしたが、歩けない。しかし、この機会を逃したくない。そこで松葉杖を作って貰い、歩く練習に取りかかった。病院から許可なく退院する事を『自己退院』というそうだが、自己退院すれば再度入院はできないらしい。隊長の事情説明依頼書により、退院の許可を得た。

病院の外に車が迎えに来た。100m余り松葉杖を頼りに歩いた。疼痛を我慢して歩いたが、先が思いやられる。原隊に帰り隊長に仮退院の申告をして宿舎に落ち着き、戦友達と1ヶ月振りの再会を喜び合った。ドラム缶風呂に入れたのが嬉しかった。久し振りの入浴である。戦友が肩背を流して手伝ってくれた。

毎朝早く、海岸の砂浜に穴を掘り、松葉杖を踏み板代わりとして用を足し砂を被せる。潮が満ちて来ると綺麗になって、それがどこだったか跡形もない。至極便利だった。

輸送用に九七式重爆が充てられ出発が1週間遅れたが、14、5名乗り込んでウエワクを離陸した。

途中、バボの飛行場に燃料補給に着陸した時、空襲警報が鳴った。まだ補給が終わっていないので出発はできない。皆、100m位離れている防空壕に逃げ込んだが、僕は疼痛がひどく機外に出る気になれず、機と運命を共にする覚悟で横たわっていた。「当たるなら当たれ」そう強がりながらも心中は爆音にビクビクしていた。30分もして解除になり安堵した。機は大急ぎで準備を終え、次のアンボイ飛行場へ向かって飛び立った。

アンボイ飛行場での燃料補給の合間を見て僕は医務室に馳せ参った。包帯を交換して貰うためである。傷口のガーゼを取り替え、赤

チンキで消毒して貰うと痛みが和らぐのである。

次にタバコ飛行場に飛び一泊した。ここでも包帯交換すれば良かったが、「この位の痛みなら一晩位大丈夫だろう」と高を括ったのがいけなかった。夜半から痛み出し一晩中眠れなかった。

翌朝の昭和18年11月1日、マニラへ出発し、昼頃マニラ第十二陸軍病院に無事収容され、初めて落ち着いて治療に専念できるようになった。隊長の計らいで、僕をマニラまでわざわざ後方移送して、回復を願っていたいた恩情に感謝せざるを得なかった。

まだ少し膿が出るけど肩と腕は肉も上がり九分通り良くなったが、右足首の上はなかなか膿が取れない。内部に骨の砕けたのが残っているとか。小さい骨はいくつか化膿と共に出て来たのに、切開手術しない限り大きいのが取れないらしい。「早く切開してくれないかなあ」と思いつつ日は重なうて行った。

第四章・負傷　ゝ生死の境と内地送還ゝ（5）曹長の星

2週間余りしたら急に病棟が賑やかになった。白衣の看護婦達が行き来するようになった。包帯交換にも付添い、てきぱきと処置もしてくれる。よく顔を見ると見覚えのある顔である。僕がラバウルにあるココポの陸軍病院に入院していた時の看護婦達だった。3人共、また僕の病棟付になった。斉藤、白石、神戸という新潟出身の3人は、交替でマニラまで帰って来たとの事だった。再会を喜縁として僕は特別に良く看護してもらった。日曜日に市街に外出したとかで、寿司やチョコレート等をお土産に届けてくれた。窓際からそつと差し入れてくれる優しい仕草が堪らなかった。もちろん隣の戦友にもお裾分けしたものだ。

痛みも少なくなりギブスのまま散歩に出て、松葉杖をついた病衣姿の写真を撮り家へ送った。家族がその写真を見て左手指がないとかで、たいへん気を揉んだと終戦後に聞いた。笑止の至りである。両親の心配、気遣いの大なる事を感じざるを得ない。無事復員した事が最大の孝だったと思う。

1ヶ月余り療養したが切開手術もされず、早く前線復帰を願う心も意のままにならないある日、面会に高橋少尉、村上伍長の二人が来られた。飛行機を取りにマニラに来た由。戦地の様子も聞いたが、だいぶ戦死しているようだった。村上伍長が階級章を僕に差し出した。昭和18年12月1日付で僕は曹長になったのだ。柴軍曹が、上官にいろいろ取り計らってくれたらしい。戦友の友情が嬉しかった。柴軍曹、ありがとう。僕の白い病衣の胸に、曹長の星が煌めいて嬉しかった。

昭和18年12月23日、突然、内地後送の発表があった。【内地でゆつくり療養せよ】と。日本へ帰れるという喜びと前線復帰が

叶えられない失望とが入り交じり、どちらかと比べれば後者の方が強かった。不思議なものだ。前線の戦友と共に戦いたい、命は運だ。戦友達を残して内地へ帰るのが本当に辛かった。

ギブスが取れないまま担架で病院船に運ばれ、船内に横になった。病院船とはいえ、敵の潜水艦の餌食にならないとは限らない。運を天に任せる他はない。

午後3時頃、台湾の東方海上を航行中、警戒警報が船内に響き渡った。国籍不明機の爆音が聴こえる。ただちに船内は騒然となり、皆にカボック（救命胴具）が渡され装着した。僕は右足のギブスを外し、万一、海に飛び込んでも泳げるよう決心を固めた。緊張した空気が20分余り続いたが何事もなかった。友軍機だったらしい。それにしても人騒がせな出来事だった。

マニラを出航して、大晦日の夜中に大阪港に接岸した。バスに運ばれ、雨がしとしと降る街中を通り、零時過ぎに大阪陸軍病院に収容された。いろいろ注意事項の指示があり、床に入ったのは午前2時過ぎだった。うとうとする間に起床のベルに起こされた。

第四章・負傷　ゝ生死の境と内地送還ゝ（6）鬼の監獄、蛇の看護婦

昭和19年元旦である。再び内地の正月を迎えられた事が不思議に思えた。運のいい僕だったとしみじみ回顧された。朝食は鯛の尾頭付き、赤飯に雑煮という病院の心尽くしを目の前にしながら南洋の戦友達の事を思うと、自分だけが贅沢をしているようでなかなか箸が進まない。早く復帰せねばと心は焦るばかりであった。

ギブスが取れないので、大便をするため松葉杖をうまく具合に倒して用を足すのに一苦労した。マニラでは洋式だったので不便はなかったが、内地の陸軍病院にも松葉杖の患者はいる筈。洋式のトイレを用意しない軍隊の無神経さに憤りを感じる。切開手術をする様子もなく、切損した骨片を挟り出した軍医の横暴さ。脂汗をかく痛さだった。レントゲンもなかったのか。傷病兵を厄介者として待遇しているとは思えない。

大阪の陸軍病院はこんな渾名で呼ばれ恐れられた。“鬼の監獄、蛇の看護婦”と。衛生兵は威張り散らし、「病魔の兵士は精神がたるんどるから病気になるのだ、皇軍の屑だ」と言わんばかり。雑巾を足で踏んで左右に動かし軍歌を歌って、一つ一つ寝台を動かし毎朝の掃除を30分位する。僕は階級に物言わせ知らん顔して見ていたが、命がけて戦場で戦って来た負傷兵も、今は役に立たない兵士として無視された言動に少なからず不満だった。

大阪泉北郡には柴軍曹の実家があった。僕も一泊して世話になった事があった。手紙でここに入院している事を告げたら、早々に彼の母親と弟が見舞いに来てくださった。いろいろ戦地の事で話はずんだ。柴軍曹のイボ痔の治療もしばしばしてやった事など、お互い何かと気を使って意気投合の仲だった。僕がウエワクを去る時までは、彼が元気でいた事だけしか分からなかったが、それを聞いて二人共安心して帰られた。

その柴軍曹も昭和18年12月10日、ラム・マーカム河谷進攻で未帰還となり、僕の尊敬した波佐間曹長も、同日の進攻作戦で戦死されている事を京城在住時に耳にした。僕が負傷してちょうど2ヶ月目である。運命とはいえ戦友の最後が偲ばれてならない。12月10日といえば僕はまだマニラの陸軍病院にいたが、前線の事は一切分からなかった。僕はウエワク上空で運良く負傷で済んだものの進行作戦であつたら、とても今日の僕はいなかった筈だ。幾多の事故、病気にもめげず七転八起の僕の人生まだまだ健在なり。

僕の宗教的経験を語りたい。僕の寝台の隣に上等兵のマリア患者がいた。ある日、その患者に面会者が来て帰った後、その患者が僕の前に分厚い本を遠慮がちに差し出して「曹長殿、良かったら読まないか」と言う。手にすると題字が『生命の実相』の12巻をまとめた一冊の本だった。僕はすごく驚いた。因縁の深さを思い知らされた。

実はこういう事があつた。僕の一番上の姉、千代子が片山氏と結婚し満州の新京に渡った。昭和9年頃だったろうか。ふとした縁で『生長の家』に感銘した姉は、それを実家の父母にも読ませようと思いつてくれたのだ。生長の家の月刊誌が届けられ、『病氣や苦悩は本来存在しないものだ。人間の生命は天地の生命の如く無限大の命と同一だ』という教えだったと記憶している。父母に読んで聞かせると、とても喜んでいた。

その後、その生命の実相の12巻が送られ、毎晩読んでやった。この法縁により、従兄に当たる星野村本星野の倉住義郎氏の心に響いた。彼は次男のため家を出て、宮崎県的小林市に住み熱心な生長の家の信者となり、宮崎地方の支部長の世話人までになった。

横道にそれたが、生長の家の勸行本にあたる詩みたいなの『甘露の法雨』という折り畳み式の小さい本があつた。横5cm位、縦12cm位の本である。心の琴線に触れる言葉が綴られ、一時は全部暗唱するまでになっていたのは入営前だった。入営する時、僕は伴侶

としてこの甘露の法雨を持参した。幾度か私物検査に引っかかり班長預かりになろうとしたが、すぐに許可になり僕の手元にあった。たまに紐解いても、さしたる感情は得られないが故郷の父母の祈りに通ずる思いであった。ずっと持ち続けた。満州、内地、戦地へと続いた。

僕がウエワクで負傷し野戦病院に入院中に、飛行場周辺の宿舎が爆撃された時、私物の入った僕の大きな航空バッグ（操縦士のみ携行）もどこかに雲隠れしてしまった。不在者の分まで運ぶ余裕もない混雑だったらしい。それ以後、出合う事もなく忘れてしまっていたのが、再びこの病院で偶然にも巡り合うとは、まったく縁のつなかりの深さを感じられたものだ。しかし、それ以後はページを捲っただけで、ぶつたり縁が切れてしまった。

戦後、幾度か谷口雅春氏の生長の家の情報も目に止まったが、現実主義を追う僕の心情に触れるものがなかった。今までにも書いたように5回、6回の死線を生き長らえ、戦後は三度に渡る大手術にも負けず、命ある今日の僕が存在を思うと「不思議に生かされている」と言う他はない。

第四章・負傷　ゝ生死の境と内地送還ゝ（7）加古川陸軍病院

この大阪陸軍病院での治療も1ヶ月で終わり、1月29日に兵庫県の加古川陸軍病院に転送となった。

松林の中の静かな所だった。病院での内務規定は厳格で、昼間は寝台に腰を下ろす事は禁じられ、院長がときどき巡回していたのも好感が持てなかった。食事は大豆入りのご飯で、日曜日の昼食だけは揚げパン食のお粗末な味を頼張った。

この加古川には飛行場があり、実用機の訓練が実施されていた。また、僕等の原隊がここに所在している事も知った。原隊とは、戦地に派遣されている部隊の留守業務一切を担当している部隊であるが、ほんの僅かの人員のようだった。そこに行けば戦隊の状況、特に操縦士達の現況も分かったかも知れなかったが、何だかそれを知るのが恐くて、ついに訪れる機会を逸した。

昭和19年4月頃だったか突然、面会の呼び出しがあった。郷里の父と弟の良則の二人が、はるばる九州の田舎からやって来たのだった。僕の負傷入院を案じ、居ても立つても居られなかったのだろう。親心、弟の気遣い。統制下の食料難や交通難を克服し、良くもここまで面会に来てくれた心情が胸に響いた。また先の明野飛行学校にまで面会に来てくれたその心根、何度も道を尋ねた事だろうが、移民先のハワイと日本を行き来して、案外旅に慣れていたのだろう。まだギブスも取れず松葉杖をつき、松林の中を散歩しながら戦地の思い出を語った。幸い五体満足を見て安心して帰る姿を感謝して見送った。汽車の中の弁当にと持って来た梅干し入りの握り飯が余ったと言って12、3個置いて行った。「帰りはどうするのか？」と返したが「何とかなる」と言って帰って行った。僕は久し振りの故郷の味に満足だった。

終戦後、このために意外な苦難が二人に待っていた事を知った。

それは帰りの汽車で羽犬塚駅に降りたのが、夜中の3時頃だったとか。食べるものがない。腹はぺこぺこ、車もない。駅にいるより行ける所まで歩こうと、二人で福島の間まで歩いた。まだ夜明けまでは永い。歩こう。長野地区まで行けばマサ子姉の嫁ぎ先がある。そこまで行けば何とかなる。腹ごしらえはできると懸命に歩いたそう
だ。

そして夜明け前頃、表戸を叩いて起こし朝食のほどこしを受けたとの事であった。

昭和19年4月、切開手術をする事になった。傷口の化膿が取れないので、切開して砕けた骨を除く手術である。今さら手術なら、なぜもつと早く切開手術をしなかったのかと、病院側の優柔不断さを非難したい気持ちだった。大小4個の砕けた骨を取り除いた。ノミのような物でコツコツ叩いていたので、くつつきかかった骨を削ったのではなかったか。局部麻酔なので痛みはなかった。その結果、化膿も少なくなり快復へと進んだ。

歩行訓練のため1ヶ月余り温泉治療の許可があったが、もう病院はこりこり。早く退院して自由の身になりたい思いで、温泉行きを断った。

第四章・負傷　ゝ生死の境と内地送還ゝ（7）加古川陸軍病院（後書き）

●2009年10月22日よりSF映画シナリオ「クリムゾンX」を連載。

<http://ncode.syosetu.com/n3801i/>

第五章・教官く戦況悪化と特攻隊の出撃く（１）原隊

昭和１９年５月２７日、確か海軍記念日だった。負傷して７ヶ月と１５日、治癒退院の判印も晴々しく原隊に入った。

自分では感じないが、後ろから見ると右足を少し引きずっていると言う戦友もいた。しかし、この治癒退院が傷庚軍人としての判定に大きく左右された。僕のような負傷程度なら傷庚軍人として認められ、今の恩給の倍位の年金が貰える筈だったのに。当時の軍医の証明が治癒なら後々の障害があっても仕方がないとの事。余り障害もないのに恩給を貰っている僕以外の戦友達は、負傷した段階で傷庚軍人の証明を貰っていた。たとえ障害の如何にかかわらずだ。軍医の計らいの結果と思わざるを得ない。運があつての今日の命だから沈黙の他なし。

ここ加古川の飛行場は、第一練成飛行隊の訓練が実施されていて、少年飛行兵実用機（隼戦闘機）の実修訓練場である。退院した以上は早く飛行機に乗り操縦したい。

その願いが叶って、今では連絡用に使用する程度の第一線から退いた『直協』と呼んでいた偵察用複座低翼固定脚の機に乗った。一期下の和田軍曹が同乗してくれて、離着陸を３回繰り返した。７ヶ月も搭乗していなくても、操縦桿の感覚や着陸の目測感覚が蘇るのも早かった。２日間の練習で「大丈夫」の許可が出た。

翌日から第一練成教育隊付となり、学生の助教の任に就いた。午前の訓練が終わると、午後は操縦見習士官の射撃訓練の助教となり、弾こそ発射しないが、いろいろな角度からの攻撃の指導に専念した。階級は僕の方が低く相手は将校である。敬語から敬礼に気遣う事しきり。不便だったが見習士官達も割り切って、操縦においては至極素直に耳を傾け真面目な態度だった。

また、ここでは教官の岡田少尉が良かった。少年飛行兵出の二期

生とかで精悍そのものだった。

しばらく経って飛行機受領のため満州の奉天航空廠に出張を命ぜられ、僕の引率で5人の部下と共に汽車で下関まで行き満州に渡った。その飛行機は新型で、隼機の胴体に九七式戦闘機のエンジンを取りつけたものであった。偶然に思いついた機だとかで、脚は引込むし、隼機よりは劣るが九七戦より、速度、旋回性能が良く、軍が期待を持った練習用の飛行機だった。九七戦から隼機に移る中間段階の操縦には最適だと好評を得ていた。僕等6人はその機を受領するため、6日間の予定を貰って奉天に着いた。

宿舎は旅館だった。新京の姉に便りをしていたら、千代子姉夫婦とマサ子姉が奉天まで面会に来たのには驚いた。新京から奉天まで相当な時間がかかるのに……。戦闘操縦士になった弟が戦地で負傷してどんな姿になっているか、自分の目で確かめたかったのだろう。遠路の労も惜しまず駆けつけてくれ再会できた事が嬉しかった。昭和19年7月の事である。

受領した飛行機は、毎日1時間ずつ飛行し滞空時間を稼いだ。それぞれ5時間余りの滞空時間中に異状がない事を確かめ、1週間の滞空飛行も終わり奉天を後にした。

途中、金浦、福岡の雁ノ巣で燃料補給し、再度飛び立ち加古川飛行場に無事降り立った。だが、何となく重苦しい空気が漂っている。せっかく僕等が新機種を持って帰ったのに皆に歓迎されるどころか、しょんぼりしている。聞いてみると、岡田少尉が一昨日の事故で殉職して、部隊葬が昨日あったとか。びっくり仰天、惜しみても余りある名教官。僕が退院して感覚を取り戻すための練習に使った直協機の試験飛行を、日曜日にもかかわらず航空廠からの依頼で行った際、上空の空中操作できりもみ状態となり、滑走路に墜落されたとか。足の骨が胴体に突き刺さった悲惨な状態だったと話してくれた。運命とはいえ、あまりにも惨い操縦士の命を痛感させられた。

その翌日、僕は一人淋しく汽車で任地へ向かった。第一から別れた朝鮮京城金浦飛行場の第二練成飛行隊付を命ぜられたのだ。僕が奉天に出張した帰路、金浦飛行場に燃料補給に寄り本部に申告に行った時、そこにいた大塩准尉が「お前はここ第二練成飛行隊付に命令が出ているので加古川まで帰る事もないのだが、大事な飛行機の輸送の任務が終わったらすぐ戻って来いよ」と笑って送ってくれた事を思い出す。

第五章・教官く戦況悪化と特攻隊の出撃く（2）訓練ままならず

知らない朝鮮の京城金浦飛行場に到着するには道遠だった。京城駅から永登浦まで電車で30分、そこから歩いて3時間の行程。途中で軍用トラックに便乗して、やっと営門を潜った。

ここ京城第二練成飛行隊の任務は少年飛行兵の操縦訓練で、彼等は赤トンボに始まり九七戦を修練して、ここで実戦用の隼機の操縦を修得するのである。もうこの時期は、どの戦隊も隼機を主流として戦っているので、ここで操縦を修得したら各地の戦闘隊に配属されて行く。しかし飛行時間が100時間そこそこ、玉子から孵化したヒヨコと同じで、実戦の経験もなく射撃訓練もしていないので、それぞれの原隊での訓練による他ないのである。この時点で米軍は300時間操縦経験をしているとか。技能の差を認めざるを得ない。沖縄の攻防戦が烈しくなつて、ここ京城金浦飛行場にも、頻繁に九七式重爆とか海軍の一式陸上攻撃機が発着するようになり滑走路を占領してしまった。

僕等は北朝鮮の連浦飛行場に出張訓練に出かけた。滑走路はないが広い草原なので離着陸の訓練には事欠かなかったが、海岸に近いため気温が急変し、霧が発生すると10分位で飛行場に押し寄せ、あつという間に飛行場は視界“0”となった。上空の飛行機は着陸できないため、南方に10分位の距離の不時着用飛行場に着陸した学生もいた。ここでは常に霧の発生に注意しなければならなかった。

この連浦飛行場での給与（食事）に、蟹のご馳走がよく出された。蟹が良く獲れる所らしい。海岸の砂浜にうず高く積んである蟹の山をいくつも見た。聞くところによると、月夜の蟹は身入りが少なく商売にならんとか。暗夜だと蟹は底で餌を食べているが、月夜になると浮いて来て餌を充分に食べないので、身が詰まらないうえ魚を獲る網にかかり不用の物となるという事だった。

連浦の港の沖、漁船で20分位行った所に島がある。ある日曜日、浜に上がった鯨を見物に行った事があった。炊事場の民間の使用人（日本人）が徴用してくれた漁船2隻に40人余り乗って島に渡った。6、7mの鯨が浜に引き上げられていた。初めて見る鯨の巨体が珍しかった。丘で昼食をとり、海が荒れて来るようだったので急いで帰路に着いた。お土産にと生鯨肉を10kg余り貰った。帰隊後の宿舎で皆と会食して、たら腹ご馳走にあずかった。

第五章・教官く戦況悪化と特攻隊の出撃く(3) 靖国隊

連浦への出張訓練は2度行われた。ある日、僕は京城の金浦飛行場へ伝達指令を命ぜられ九九式司偵で飛んだ。途中の天候が悪く雲の上を飛んだ。層雲の上の素晴らしい光景に見とれた。真っ白い絨毯を敷いたような水平面の雲である。着陸しても良いくらいの美しい雲面をすれすれに飛んだ。こんな光景は初めてだった。

金浦飛行場に戻り、ほどなく僕等の部隊に初めての【特攻機出撃】が命令された。今までは海軍の十八番のようだったが、消耗烈しく陸軍もという事になったらしい。僕等の部隊にその第一の白羽の矢が立ったのだと思う。

第一回の特攻隊である。隊長出丸中尉隊員の他、少年飛行兵の中から優秀なる兵が選ばれ、合計13名であった。別れの夜は心ゆくまで盃を交わした。涙、涙の感激は今も忘れ得ない。彼等は内地へ飛び、知覧飛行場に集結した。

数日後、大本営の発表を聞いた。『靖国隊』と命名された由。レイテ湾の艦泊に多大の損害を上げた事が報道されたが、その真実は大本営発表を信じるしかなかった。その隊の一人、僕が期待していたB伍長は途中で奄美群島に不時着して助かり、彼が故郷に帰っていた事を戦後に知った。一度便りを出したが、自責の念が強く表沙汰にされたくないという返信だったので、以後音信も途絶えてしまった。

特攻隊に13機の隼機を使用し、後の訓練に影響するので受領のため立川航空廠へ飛んだ。田畑准尉操縦の高練(高度練習機、主に爆撃隊要員の訓練する機)で、僕以下6名同乗し、立川に降り立った。新しい隼機は戦地へ配備されるため、僕等が受領するのは故障機か不時着機を改良した物ばかりなので、試験飛行も充分やって天

候を選んで飛び立った。

途中、加古川と雁ノ巣で燃料補給をし、金浦飛行場に無事着陸し任務を果たした時の達成感は、ひとしおだった。

その後、金浦飛行場は爆撃隊の使用が激しくなり、僕等の部隊は南に下り水原の飛行場に移動した。ここは一本の長い飛行場だった。1,500 m位ある。ここでの訓練の途中、南の群山の飛行場でも出張訓練があった。

第五章・教官く戦況悪化と特攻隊の出撃く（4）飛行機受領の思い出

戦局は次第に内地本土の空襲が報じられるようになった。

金浦飛行場時代、第二回目の立川への飛行機受領があった。僕が引率し、6名で立川へ出発した。立川に到着する時間を考慮して、夕方出発する汽車に乗る事にして下関の旅館でくつろいだ。そして、携行した米の半分を旅館に出し僕等の食事と途中の食料として、できるだけ多くの握り飯をこしらえて貰った。その数35個。塩をつけただけだった。翌朝と昼の食事でその握り飯も消えてしまった。

夕方、大阪駅に着いた時、思わぬ事態となった。鈴ヶ峠が深雪のため汽車は大阪駅止まりとなり、いつ回復するか分からないとの事。明日は運行するだろうとの話で、仕方がなく下車して駅前のホテルに一泊する。残りの米を出し、どうにか食事もできた。こんな時、米の携行をしていたのが救いだっただ。

翌朝、汽車は動いた。やれやれと安心したものの前途はまだ遠い。食料が尽きたので後は幸運を待つばかり。ところが名古屋駅で空襲があったので、またまた運行停止となり、これまたいつ動くか分からないので、駅前の旅館に一泊したが食事はなかった。しかし布団にくるまるだけでも幸せだった。

翌朝、汽車は運行した。しかし、立川に到着するのが夜になって連絡が取れなくなると困るので、朝に着く予定の汽車の時間を選んで出発した。立川に行くには小田原駅で降り、小田原急行の電鉄に乗るので、その時間も入れての細心の計算だった。

途中、浜松を過ぎてほどなく汽車が停車した。「変だなー」と思った矢先、【空襲警報発令】と車掌が伝えた。田園の真ん中、車内に居るしかない。窓から首を出してみると六機編隊のB29が高度6、7、000mの上空に銀色の腹を見せて飛んでいる。富士山を目標に飛んで来る由、まさしく僕等の頭上にある。また空は雲一つない天気、富士山が頂上に雪を被り悠然と目の前に見える。何と偉

大な勇姿、初めて裾野から富士を見上げる。その美観、偉大さ、力強さに空襲も忘れる位に見とれていた。敵機は方向を北に変え、東京方面に向かつて行つた。やれやれ僕等には目もくれない。大きな都市の爆撃が優先らしい。1時間余りで汽車は走り出すが、のろのろ運転で気を揉むばかり。

汽車は時間が大きくずれて夕方に小田原駅に着いた。小田原駅から立川に向う電鉄の最終時間は過ぎてしまっていた。またもやがっかり。明日の一番発車に乗るしかない。とにかく旅館を探して泊まるしかない。旅館探しでぐるぐる回つたが、どこも営業中止の札が出ていてどうにもならない。一軒の宿屋に交渉したが「食料がないから」と断わられた。事情を話し「泊めて貰うだけで結構」と懇願して一泊した。旅館からは薄いお茶だけが振る舞われ、他に何もない。幸いに少年飛行兵の一人がキャンデーを一袋を持っていたので、それを皆でしゃぶりお茶を飲んだ。昨夜から食事なし、水ばかり。腹がぐうぐう、こんな事なら、もう少し米を残して置くべきだったと悔やまれたが後の祭り。早く夜の明けるを待つばかりで、布団の軽さが身に染みた。

早朝、駅に行つて一番発の電鉄に乗った。立川に着くのは10時近くの前。立川に着けばあらかじめ部隊から派遣された整備兵がいる筈だから、何とか食事は準備して貰える望みがあるため急に元気づいた。

大きな格納庫が並んでいて、さすがは日本最大の航空廠の感を抱く。幸いにも僕等の部隊の整備班長（下士官）とばったり会つた。班長も本隊から操縦士の到着が余りに遅いので心配していたらしく、僕等の到着を喜んでくれた。事情を話したら、さっそく朝食を準備してくれた。時間外の朝食で炊事班も戸惑つたようだった。三食抜きのお陰で特別においしかった。

昼食からは廠内の食堂で世話になり、午後からそれぞれ持ち帰る飛行機（隼二型機）の点検をした。それぞれ3時間余りの試験飛行を繰り返す。これは3時間飛んでもエンジンの故障がないかを試す

ため。整備が完璧にできていたお陰で明日の出発準備は完了した。

宿泊は郊外の旅館に案内され待遇も良かった。操縦士達への最高のもてなしだったろう。旅館の主から樽酒の栓を抜いて振る舞われた。その酒のうまかった事が、いまだに忘れられない。甘口でほのかに重く、香りも柔らかくこんな酒を今まで飲んだ事はなかった。なんとおいしい酒なんだろう。翌朝の気分も爽快だった。

第五章・教官く戦況悪化と特攻隊の出撃く(5) 申告と鈴鹿越え

1日も早く金浦に帰らねばならず、2泊の行程が4泊となったので部隊でも心配しているだろうと気を揉んだ。しかし考え直してみると、予定の時間通り前向きに途中下車を考えず行程のままを実行していたら、食料の心配もなかったかも知れない。原隊ではその量だけを米を携行させたのだから、僕の計算が負の方向へ回った結果となり反省させられた。翌日は一氣に加古川、雁ノ巣と燃料補給し、夕方は金浦飛行場に降り立つ事を無事を祈るのみ。

書き遅れたが軍隊では、出発に先立って「何々のためどこどこへ何の目的で行きます」という『申告』が義務づけられている。一例を申し述べるゝ次の通りだ。

部隊長へ「申告します。陸軍曹長原口末次他5名(または略して、原口曹長以下6名)、隼機受領空輸のため、4泊5日の予定を以って立川航空廠に出張を命ぜられました。ここに謹んで申告いたします」

そして帰って来たら、また任務終了を報告する事になっていた。

航法は途中の天気、目的地の天気等を氣象班で調べる事になっている。その良否で出発を判断する。当日は鈴鹿地方は吹雪、加古川および雁ノ巣は晴れ。金浦飛行場上空は快晴という事だった。出発を決断し立川を飛び立った。全機、エンジンは好調。一氣に伊勢湾上空から鈴鹿山脈を越えようと進入すると、高度3,000mで前方は白い吹雪になった。

仕方がなく上空突破で高度4,500m以上に上げたものの、雲は5,000m以上の積乱雲でとても飛行は無理。また高度を下げ1,000m位で飛行するも駄目、目的地の加古川は晴れだから、ここを突破すれば何とかかなると思ったが、鈴鹿山脈は2,000m

以上あり進入は危険と判断。幸いかつての基地明野飛行場が近くにあるので、そこに不時着して天候の回復を待つ事にした。

全機着陸したまでは良かったが、最後に着地した伍長が大きく跳ねてしまい尾輪の軸を折損してしまった。仕方がなく金原軍曹の隼機を譲り、金原軍曹をまた立川航空廠へ汽車で引き返さす事にして、僕等5機は明野飛行場で天候の回復を待つ事にした。

六八戦隊に転属前、僕はこの明野で戦地要員として猛訓の毎日だった。今、負傷し生きながらえて再びこの地に降り立った事は感無量だった。

いつもの通り本部の2階にお偉方が何か慌ただしく立ち振る舞われていた。「申告致します。第二練成飛行隊原口曹長以下6名、隼機空輸の途中、天候不良のため当飛行場に不時着致しました。よろしくお願い致します」「こんなに気候の悪いのに無理して飛んではいかんよ」と温顔で注意をしてくださったのは大西中佐だったと記憶する。

明野は小雪がちらついていて寒かった。懐かしい兵舎、格納庫等は変わらなかったが、格納庫の右側に忠霊塔の碑が建てられていた。10何mかを見上げる堂々たる石碑に僕等一同、心から最敬礼をした。

翌日出発。加古川、雁ノ巣で燃料補給し、金浦へと飛び続け無事着陸した。運良くこの日は僕等の部隊の開隊記念日だった。多くの外来者が見物に来ている中に着陸し、部隊長に着隊の申告をするのも何か誇らしげな感に駆られた。部隊長もご機嫌の笑顔をチラッと覗かせたのが、何よりの気休めとなった。平素の厳めしい顔が綻んでいた。僕等は開隊記念日の特別献立を貪った。

第五章・教官く戦況悪化と特攻隊の出撃く(6) 出丸中尉の思い出

内地では盛んに空襲が報じられ市街地が焼土となつて行くのに、ここ京城は全く別天地で余所事と樂觀していた。

ある日、訓練の最中に空襲警報が発せられた。敵のB29が一機、上空5,000〜6,000mの高度で進入して来た。偵察に来たようだ。しかし、僕等の訓練部隊は武装をしていない。あれよあれよと見上げている間に敵機は平壤方面へと飛び去った。その体験から何機かを武装して待機させる事になった。

翌日、またもや敵のB29一機が南方大田方面から北方(京城)に向かつているという報告があつた。後に特攻隊の指揮官として出陣した出丸中尉と僕が、そのB29を攻撃する命を受け離陸した。出丸中尉は初陣である。自信もなく不安だつたのか、「原口、頼むぞ」と先立つた。僕も「はい!」と短く返事したものの、使い古したこの隼機では速度も出ないし、ガタガタの飛行機では立ち向かつてとても勝ち目はないが、ひたすら上空に現れる敵機を探して上昇した。高度4,000mに上がつても敵機は現われない。不審に思いながら上昇したが、ついに敵機を発見する事はできなかった。着陸して分かつた事だつたが、敵機は電波探知機を作動させ、攻撃に上昇してくる機を探知して方向を変え、京城上空に進入しなかつたと知らされた。

2、3日後、また敵機の来襲が告げられた。ただちに僕は一機で離陸を命ぜられた。滑走路に出て出発する一刻も待てない。誘導路からいきなり滑走路を横切り海岸上空へと上昇した後、2、300mの高度で機関砲を海へ向け試射し、弾の出る事を確かめた。敵B29一機は5、6,000mの高度で平壤方面へ向かつている。全速で上昇するが機能が落ちているので思うようにならず、やっと5,000mに達した時、敵機は遙か一点となつて平壤方向へ去つてし

まった。

京城上空を大きく一旋回して感じる事は、空気が薄いため操縦桿がガタガタで動作が鈍く、大空に上がった風のようになだ浮いているようだ。飛行機には与圧高度が調整されていて、隼機は3,000mの高度の空気に合わせてエンジンの状態が最良になるよう、燃料の噴射が調整されているが、5,000mの上空では空気が薄いのに燃料が濃すぎて、エンジンの機能が発揮できないのが理由だ。戦地の飛燕機は高度を飛行する場合が多いので、4,000mに調整してあるので充分戦えるのだが、防空戦隊ではない僕等の部隊の隼機では、高度を飛行する偵察機を見過ごさざるを得ない。

この地も本格的な爆撃をいつかは蒙るかもしれないが、米軍は日本国土の攻撃に専念しているので、本土決戦の時が来る事は時間の問題に迫った感を深くさせられた。

第五章・教官く戦況悪化と特攻隊の出撃く（7）再び特攻令

水原飛行場に移動してまもなく、南方の群山飛行場に訓練出張していた時、僕等の部隊に第二回目の特攻隊が下命された。一回目の如き興奮はなかったものの、来るべきものが来たという感じで静かな見送りだった。幸運を祈るのみだった。明日は自分かも知れない。内地本土に上陸する敵へ特攻隊として、全員で出撃する日も近い気がしてならない。

暇な日曜日には戦友2、3人と部隊長高梨中佐のお伴をして、近くの池に鮎釣りに行った。餌は赤ミミズ。洗面所の下のじめじめした土を掘り起こし、餌探しには苦労した。部隊長の釣り場所から20m位離れて、僕等も竿を入れるが一向に釣れない。部隊長は30cmもあるう尺鮎を釣り上げ、満面の笑みだった。帰ってから部隊長官舎の炊事場に水を溜め、その尺鮎を泳がすまでがお伴の仕事であった。自分の部下を特攻隊として出陣させる隊長の心情が察せられる。

水原飛行場に帰って、またもや第三次の特攻隊の拝命があった。今度は特別任務で中支の上海集結であった。【上海から北京まで部隊誘導のため迎えに来るので、北京まで進出して来い】との事。寺田少尉と僕は13機の特攻機の誘導を命ぜられ、寺田少尉が7機、僕が6機の編隊長となり平壤飛行場に集結した。僕等は初めて上級高官連中の盛大な見送りを受けた。

平壤出発時、滑走路に13機が出発の合図を待っていた。白旗が振られ寺田少尉が離陸して、二番機がちょっと遅れていた。しかし三番機が白旗を見て先を急いで離陸したため、事故を起こしてしまった。二番機に後方から追突して尾部から胴体をプロペラで切り、操縦士まで重傷を負わず事故が起きた。最初に離陸した寺田少尉は、

後続機が上がって来るのを上空で旋回しながら待っている。地上の事故に気づかないでいる。僕等は全機誘導路に引き返しプロペラを停止。出発中止となった。ようやく寺田少尉も着陸して事故に驚いたようだった。

この事故で二機が欠損となったが、追突した隊員には怪我がなかった。ので、他の整備兵と共に汽車で行く事となった。事故の不幸にも意にする事なく将官佐官級の多くの見送りを受けながら、1時間余り遅れて平壤飛行場を後にしたのだった。

この事故での僕の考えを述べたい。第一は離陸した寺田少尉が地上での事故に気づかず、30分も上空旋回して着陸しなかった事だった。後で本人に聞いたら、「どうして後続機が上がって来ないのか」と不審に思いながら待っていたとか。低空旋回しているので地上の2機の事故に気づく筈なのに、僕はただ啞然として「早く降りて来て欲しい」と願っていた。

第二に編隊で出発する時は、必ず自機の前に離陸する機を確認できる位置に並ぶ事だと。前機の出発合図を自機の出発合図と判断したのが原因だった。これも見えにくい時はバンドを外して、伸び上がり前方確認する事だった。しかし、このような編隊を組んで次々に離陸する訓練を一度もした事のない少年飛行兵だった。無理もない事だったと反省させられ、出発に当たって僕を含めた教官の指導の不徹底にも、原因があつた事が悔やまれてならない。

北支大陸に入って視界が悪くなり地上物が確認できなくなったため、高度1,500mに下げ30分も飛んだ頃に左前方に市街地が見えて来た。地図から判断して天津市と判断し、北京市への進入のため北方に至ると信じ一路北進した。視界が悪いのは煙霧か黄砂のせい、高度1,000mに下げ2、30分経った頃、北京市街の南に飛行場を確認し、ほっと安心した。風向き、風速、着陸帆布を確かめ、慎重に着陸態勢に入り全機無事着陸した。寺田少尉の笑顔

に敬礼し着地の報告で大任を終了した。

第五章・教官く戦況悪化と特攻隊の出撃く（8）泣きつ面に蜂

翌日は特攻隊員と共にトラックに乗り、北京市内の見学に同行した。中国の歴史に守られた紫禁城や美しい建物を数ヶ所見て回った。特攻隊員への最後の慰めとでもなしであろう。これも上官からの配慮だったろう。別れ際、少年飛行兵達の手を握り激励の言葉をかける僕の心境は、深く入り交じったものであった。僕と寺田少尉、他2、3人は迎えの高練の輸送機で、その日の内に京城に帰還した。

記憶が前後するかも知れないが、昭和19年12月1日付で僕は営外居住の許可を貰った。曹長になって1年が経過すると営外居住が許され、部隊から500m余り離れた所に営外官舎が数棟あった。その中の4、5帖の部屋に入った。隊内居住では皆、ラッパの音により起居同作を余儀なくさせられていたのが、営外になるとそれから解放され営門の出入りには営兵の敬礼を受け、誇りにも似た解放感に気を良くした。さっそく故郷の父宛に布団の注文、至急送付願いを出した。父母の好意でまもなく届けられ、父母の心尽くしに感謝せずにはいられなかった。官舎では見習士官の少尉と食事、入浴等は一緒だったので肩身の狭い思いもちょっぴり感じていた。

ちなみに寺田准尉は永登保市街の一戸建の官舎だった。ある日、一日だけお世話になった。朝鮮特有のオンドル式の部屋で案外居心地が良かったが、食事は個人で用意しなくてはならず不便そうだった。

寺田准尉について特筆してみたい。普通は兵隊から下士官候補となり、伍長、軍曹、曹長と進級し曹長3ヶ年で准尉になる。階級はそこで止まって万年准尉となるのが常識となっていたが、部隊によっては教官不足等、人材確保のため特別進級が認められる事になる。（特例として予備大尉まで進級）寺田准尉も特攻隊に出て行った出

丸少尉の欠員として任命された。内地の士官学校で6ヶ月間、将校としての教育を受け少尉に任官する事となって派遣された。しかし諸般の事情、戦局の逼迫により3ヶ月切り上げて帰隊されて少尉になられ、にわか作りの新米将校に抜擢されたのだった。運の良い上官だった。以後、寺田少尉と呼ぶ事になった。今も元気な少尉殿である。

京城金浦飛行場での訓練時にはピスト（訓練中の控所）に火燵が置いてあった。部隊長が暖を取るためである。炭の継ぎ足しに炭俵の底をはいた時、炭の粉がはじいて僕の目に入った。コロコロしてどうにも我慢できないので、断って医務室に行き洗浄して貰ったが、コロコロは良くなかった。

翌日また洗浄して貰ったが良くならないので、訓練を休んで2、3日保養した。部隊長が気にしたのか「治療のため市内の陸軍病院に行け」と伝達があった。

それから京城陸軍病院通いとなったが、交通の便が悪く朝の買い出しに出る炊事班のトラックに市内まで便乗する事になった。僕は治療が終わると永登浦まで電車で帰り、金浦飛行場に至る道路で帰りのトラックを待ち、また便乗するのである。永登浦から金浦飛行場までトラックで1時間の行程だった。

ある日、治療が遅れそのトラックに乗り損なってしまった。飛行場行きの車はなく途中10分間余りは民間の車に便乗したが、後は歩くより仕方がなかった。眼帯をしたまま、てくてく歩いた。陽は沈み、薄暗くなった夜道を3時間以上歩いた。足が棒になるとはこの事か。兵舎の灯りが見えてきたが足はこわばるばかり。遅々として進まない。もう二度と病院までは行くまい。必死の思いで帰営して、飛行兵に1時間余り揉んで貰ったので、ようやく足の感覚を取り戻した。

病名は急性角膜炎になっていた。「悪くすると目が潰れるところだった」と衛兵軍医の言葉だった。以後は衛生兵に病院へ薬を取り

に行つて貰い、治療の甲斐あつて2週間余りで治癒できて安堵した次第だつた。

第五章・教官く戦況悪化と特攻隊の出撃く（9）飛燕再び

沖縄の攻防戦も日本に利あらず、特攻隊の戦果も上がらず。突入する飛行機がないのだろう。夜間に紛れて、赤トンボまでが50kg爆弾を抱えて出撃している状態だと小耳に挟んだ。ほんとうだろうか？信じられない思いだった。

敵艦船に体当たりする『神風特攻隊』の初期は、この特攻隊を護衛して行く戦闘機が20機、30機と同行し、攻撃して来る敵戦闘機から特攻隊を守ったものだ。しかし戦闘機も1機、2機と未帰還となり、しかも敵機は2倍、3倍の数、こんな不利な戦闘に、ついに護衛機なしの特攻隊となったものと思われる。内地防空に主力が置かれ、沖縄戦の敗戦を認めざるを得ず地上戦に移ったものと想像される。

金浦飛行場は大型機の使用が多くなり、僕等の部隊は再び南方の水原飛行場に移動した。訓練といっても急角度からの艦艇攻撃ばかり。訓練は午前で終わり午後は掩体壕作りで、飛行場から100m、200mと離れた所に飛行機を押して運び入れ、機体に網を被せ偽装する作業が毎日続いた。

ある日、特筆すべき命令が伝達された。済州島に飛燕2機と隼1機が整備されているらしく、僕の部隊が受領する許可となったらしい。隼機は誰でも操縦できるが飛燕機の操縦は寺田少尉と僕等と村上軍曹（少年飛行兵）の3人しかいないので、誰を派遣するかを上司で協議されらしい。結局、僕と村上軍曹とが飛燕機を受領者になった。隼機受領者の将校と3人、将官が済州島視察に行くという輸送機に便乗して飛んだ。

済州島には航空廠があり、整備も充分だった。僕等が受領する機は他の部隊が輸送移動の際、故障等で置いて行った機であつたらしい。ニューギニアの戦地で自由に乗り回していたが、負傷してもう

1年7ヶ月も飛燕機には乗っていない。不安と喜びとが入り交じり合っていたが、「何くそ、怖じけてどうなるか、お前は飛燕機の操縦士でないか、飛べ、飛んでみよ、機は完全整備されている。行け」と自分を鼓舞した。地上滑走をしながら忘れかけた感覚を呼び戻した。エンジンの音、計器の針、操縦桿の感触、すべてを蘇らせ出発点に着いた。

出発の合図と共にレバー全開で直進した。「重い」隼機との比でない。速度が120km/hとなったところで静かに操縦桿を引いた。浮いた。重い機体が地上を離れた。良かった、嬉しかった。脚を引っ込め10分余り飛行して無事着陸した。慎重に操作したのが良かったのか、無理なく接地できてほっと胸を撫で下ろした。

次の村上軍曹と交替し充分に注意指導して、僕が試乗した機の離陸を見守った。彼は僕より操縦歴はぐつと若いが、よく注意を守り試験飛行は成功した。僕はもう1機を試乗して故障がないかを確かめた。隼機の受領者の将校も試験飛行を終わり、3機で帰途に着いた。隼機と飛燕機との速度が異なるため、僕と村上軍曹は隼機の上を蛇行しながらついて行った。

1時間余りで水原飛行場に無事着陸した。整備兵も初めて飛燕機を見て感動していた。さっそく飛燕機の修得訓練を実施したいと隊長彦坂大尉も張り切っていたが、掩体壕深く隠蔽して終戦まで飛行場に再び姿を見せる事がなかった。

終戦直後、兵器引き渡しで30数機を飛行場に並べた中に、淋しく2機の飛燕機が並んでいた事を思い出す。

昭和20年1月1日、京城金浦飛行場にて元旦を祝した。僕は部隊の先任下士官として1月1日新年を祝し、次の言葉を祝辞として部隊長に申言した。「朝鮮第九十三部隊陸軍飛行兵原口曹長は無位無官判任官一同(120名余り)を代表し謹んで新年を賀し奉る」と。部隊長高梨中佐は「この旨ただちに電報にて宮内省に伝達する」と答礼された。僕は初めての指揮を取り緊張した。しかし、無位無

官判任官という勲章のない自分の官名が淋しかった。下士官でも勲章を持つ者はこの限りに非ずであった。新年を賀し奉ったあの指揮号令の絶叫が華だった。

第五章・教官く戦況悪化と特攻隊の出撃く（10）裏日本経由

部隊長が交代し、渥美少佐が着任した。前部隊長高梨中佐は内地の大淀飛行部隊長となり、僕は九九式襲撃機で部隊長を送る事になった。

そしてもう1人、中島中尉と2人が後部座席に同乗する事になった。中島中尉は僕の彦坂隊付の将校で、内地へ飛行機受領に行ったまま飛行機の故障を理由に帰隊せず居住さえ不明となっていたC軍曹（少年飛行兵）を探し、連れ帰る任務を帯びていた。ところが出発直前、満州より内地へ向かう輸送機が京城に燃料補給のため立ち寄ったのを幸いに、高梨中佐はその輸送機に便乗して出発してしまった。

表日本のコースは敵機の攻撃があるかも知れず、裏日本経由を取る事になっていた。そして松江飛行場に僕等が着陸して、高梨中佐を拾い飛ぶ事になっていた。しかし僕等の到着が遅れた場合は、「何時何分の松江駅発の汽車に乗って出発する」との伝言が待っていた。僕等は、ただちに京城を出発した。しかしエンジンから油が洩れ風防ガラスが汚れるので、南朝鮮の尉山飛行場に着陸し整備点検に1時間余り費やし出発した。日本海を横断し松江飛行場に着陸し高梨中佐を探したが、すでに1時間前の汽車で出発した後だった。僕達の到着を長くして待っていたとの事だった。山陰線の汽車の旅の苦痛と敵機グラマンの攻撃も心配された事だった。

僕達は小憩の後、松江飛行場を出発した。この飛行場で滑走路に並んでいる20余りの見なれない機を見た。五式戦闘機との事だった。三式戦の胴体に二式戦のエンジンをつけたものだったと記憶している。黒っぽい緑茶色で擬装された防空戦闘用との事だった。奮戦を祈り、一路海岸線沿いに日本海を北上した。視界が悪くなり高度も1,000m以下を飛行した。後で分かった事だが、2日前に大阪市が爆撃され焼失したその煙が、西に流され日本海まで達して

いたとの事。視界が悪くなった理由が頷けた。安全飛行を取り、舞鶴港から琵琶湖に向け大きく右旋回し無事着陸した。

大淀は琵琶湖の東側にあり、滑走路のない広い飛行場だった。飛行場には、部隊長着任を迎えるため、200人余りの隊員が並んでいた。てつきり部隊長と間違ったのだろう、中島中尉を高梨中佐部隊長と勘違いして、丁重なる敬礼の応答が交わされているのを、僕は飛行機の側から笑いを堪えて見ていて痛快だった。「部隊長は今頃どこ付近を走っているのかなー」等と思いながらも、翌日も部隊長は到着しなかった。難儀な汽車の旅だった事だろう。

中島中尉の自宅が京都市だったので、僕等は飛行機を置いて市電に乗り京都市へ出た。僕は中尉の自宅に二晩泊めて貰い、奥さんのもてなしを受けたが、日中は退屈で時間潰しに中尉からバイオリンの手解きを受け弾いてみた。『君が代』も『曼珠沙華』も譜を覚え、何とか弾けるようになった。

大淀に二泊して加古川飛行場に飛び、中島中尉はC軍曹の所在を突き止め帰隊を促したが、彼の帰隊意志がない事に諦め、後は隊罰を受けるしかないという事で断念したのだった。それから終戦までが早かったので、どうなったか知る由もなかった。軍法会議に回されたのだろうか不明だった。

死力を尽くした沖縄戦、陸海軍の特攻機何千機か明らかでないが、米軍に必殺の大打撃を与えるまでに至らなかった。日本軍の飛行機の数にも限度があり、沖縄戦は放棄しても最後に内地決戦があるから、この時こそ最後の特別攻撃である。飛行機の温存もあり、次の作戦のため沖縄への特攻が断念されたように思われる。しかし赤トンボ機に50kg爆弾を積んで、夜間に沖縄へと突入しているのが本当であれば、誠に哀れというも悲愴、無謀としか言えない。上層参謀の血迷った作戦命令としか言いようがない。

第五章・教官く戦況悪化と特攻隊の出撃く（11）原子爆弾と噂

ところで内地決戦では、米軍はどこに上陸するだろうかと憶測されていた。四国沖か宮崎の海岸か。戦後の資料を紐解くと、米軍は宮崎から上陸する計画だったとか。

この頃になると沖縄を占領し、米軍の攻撃は専ら本土爆撃が主となった。「今日、東京が廃墟と化した」「今日は大阪が灰燼となった」と遅れながらの情報を耳にする。大都市から中都市へまた小都市へと、日本のほとんどの都市は爆撃と焼夷弾で灰燼と化して行った。

悠々と昼間からB29の編隊が本土上空に侵入しては、焼夷弾攻撃で都市を焼き尽くして行く。焼夷弾による壕火災を消すための訓練も喧しく指導されていた訳だが、一度に何千発もばらまかれては消すより避難するのが精一杯。決まり事のように防空壕に逃げ込んでいては、蒸し焼きになるばかり。都会に残っていた住民の苦悩が思い知られる。

大本営発表は国民の志気を鼓舞するためか、戦況が報道されない。過大戦果ばかり流していよいよ本土決戦の逼迫せるを、一憶一心火の玉となり玉砕する事を報じるばかりであった。

荒風の前の静けさ。僕等の部隊には40名余りの操縦士と同数以上の飛行機を温存していたようだった。ある時、「本土決戦の時、我々も一団となり特別攻撃に向かう事になるだろう、その時こそ一死報国一撃必殺の玉砕あるのみ」と部隊長の言葉を聞きながら、すでに覚悟はできていた。内地では爆弾の雨が降っているのに、ここは余りにも静かで「来るべきものが来る」を予期したものの、僕等は平然を装っていたようだった。それから飛行訓練も燃料温存とか機体の損耗を防ぐ理由から、中止がちでまったく手持ち無沙汰の日が続いていた。

昭和20年8月6日、広島に原子爆弾が投下されたとラヂオが放送したという噂が本部から流れて来た。新型爆弾だったとか。一瞬にして広島は灰燼になったとか。すごい爆弾だったとか。一発でキノコ雲が上がり、放射能で人間を始めあらゆるものが死滅したとか、断片的にいろいろな噂が飛んだ。しかし、すべてを把握するには僕等の想像では到底およばなかった。次第にその威力が流れて来たが、やはり原子爆弾だったらしい。

そうこう噂された3日後、今度は長崎に2発目の原子爆弾が落とされたとか。何万人が一度に死んだとか。一瞬にして建造物は破壊されたとか。8月9日の昼だった。

米国には、この原子爆弾が2発しかできていなかったとか。日本軍は先手を打たれた由、後1週間もあれば、この新型爆弾が完成される筈だったとか、いろいろと噂が流れた。広島、長崎の惨状が次第に伝わって来るにつけ、本当に「鬼畜米兵」と叫ばずにはおれなかった。

戦況の不利はいよいよ明らかになった。まだ日本は玉砕を期して戦争をするのだろうか。一抹の不安がちらついた。

第五章・教官く戦況悪化と特攻隊の出撃く(11) 原子爆弾と噂(後書き)

●2009年10月22日よりSF映画シナリオ「クリムゾンX」
を連載。

<http://ncode.syosetu.com/n3801i/>

第六章・終戦　く興安丸と復員く（1）終戦の詔書

それから数日が経った。天皇陛下の重大放送があるとの事で皆、軍装して営庭の一角に集合した。200人位だったか。樹の枝に括られたラヂオから、陛下の声が雑音混じりで流れていたが内容まで聴き取る事はできなかった。

後で『終戦の詔書』だったと聞かされたが、来るべきものが来たという感じだった。「遅すぎた」そう感じさせるほど、軍の上層部では敗戦を認めず、あくまで玉砕を主張したのではないかと疑問視せざるを得なかった。当初シンガポールが陥落した時点で、講話を結ぶべきだったのを、当時の山下泰文大将が応じなかったとか囁かれていた事もあった。それにしてもよくもこれまで頑張ったものだ。虚無の解放感が続いた2、3日後、迷彩色に擬装した見なれない上翼双発の連結機が着陸して本部に5、6人の米兵士が入って行ったが、2時間余りで再び飛び去った。それが武装解除の命令伝達らしかった。それを機会に命令は下った。

【我が部隊にある武器弾薬全部を飛行場に並べろ】という事で、翌日からこの作業に取りかかった。飛行場から200mも離れた掩体壕に、上部を網で蔽って隠していた機を、一機ずつ後押して飛行場まで運んだ。大変な労力を要した。並んだ飛行機は大半は隼機だったか、あるにもあった45機余りだったと思う。その中に2ヶ月前、村上軍曹と二人で済州島から運んで来た飛燕機の姿もあった。とうとう未修教育もしないで終わったかと思うと未練が残った。でも、戦闘機に乗る事はもうあるまい。この飛燕機を最後に操縦できた事が何よりの慰めだった。部隊の全機が特攻に出る時は、一機は寺田少尉が乗るにしても、もう一機は僕の乗る機である事は確かだった。いや、おそらく特攻機の空中援護に回ったかも知れない。敵機と派手に空中戦をやっていた筈だった。

そうして2、3日経ったある日、突然の大きな爆音と共に米軍の艦上機約300機が、見事な編隊を組んで飛行場上空にやって来た。第一編隊百機高度500m、第二編隊百機高度1,000m、第三編隊百機高度1,500m、それは見事な飛行である。互いに交差しながら右に左にと旋回し、いわば威圧飛行である。敵ながら感ひとしお、敬服の他なし。航空母艦から飛んで来たらしい。日本軍では、とてもできない技だと思った。以前から米軍の操縦士は編隊がうまいと聞いていたが、その通りだった。これは、米軍の操縦士は豊富な飛行機で十分な飛行時間を稼いでいるからであつた。僕等は限られた機に短時間しか乗れず、編隊よりも戦闘技術の訓練が主であつた。かつてノモハン事件後、編隊戦闘が叫ばれニューギニア戦線でも重点が置かれていた。10分間余り空を見上げて感服し、米軍の余力にとても勝ち目のある戦闘ではなかつたと、ひどく思い知らされた。

かつてラバウル上空で、日本海軍航空隊の花形機『零戦』が初戦には異状なる戦果を上げたものの、同機数の対応なら戦果も得ようが、だんだん米軍は2倍、3倍の数でやって来る内に、零戦も数に押され不利な戦闘を余儀なくされた。1名、また1名と未帰還機を費し、ついには補充ができない末路となつた事を思い浮かべた。

第六章・終戦　ゝ興安丸と復員ゝ（2）最初で最後の行軍

終戦となったが、近くを通る列車は兵隊を満載して北へ、そして民間人に乗せた列車は南へと移動して行くのが見られた。南へ行く民間人は釜山に引き揚げる日本人であるが、北へ行く列車の兵隊は合点がいけない。終戦になったのに、なぜ北朝鮮か北満に行くのか。これからソ連軍と一戦を交えるのか。上層の参謀本部は何を考えているのだろうか。関東軍は命令を聞かないで、これからソ連と一戦するのか等と、そして僕等は一体どうなるのかと不安の日が続いた。「持久戦となり、山岳に立て籠って抵抗するかも知れん」等と噂も流れた。野菜を作れ、木炭を焼け等々。

そんな8月の終わり頃に突然、命令が出た。僕等の飛行部隊は、【南朝鮮の東萊に移動せよ】との事。まったく知らない所だが、温泉があるとの事で期待された。水原を去る時は、捲き始めた青々とした大きなカンランが営庭に育っていた。

一日の汽車移動。なるほど温泉があり、僕等は一軒の温泉宿舎に宿泊する事になった。温泉湯に浸かり汚れは落ちたが、給与（食事）が最低だった。ご飯は少なく、朝の味噌汁は力ボチャ一切れしか入っていない薄い汁。まったく水原飛行場での待遇の比ではなかった。でも、これも敗戦のため仕方がない。食糧の確保持久で贅沢は言えない。腹いっぱい食べさせないのだろう。上層部の方針かも。不平不満やるかたなし。だが仕事もなく皆、遊んで食う、寝るばかりで、一体いつ内地へ帰るのだろうかと心配になった。

飛行部隊を一番先に内地帰還させるそう。そんな噂が流れていたがデマかも知れない。あまり信用もしなかった。呑気な毎日が続いた。突然、命令が飛んだ。【我が部隊は9月30日10時まで釜山港ふ頭に集結せよ】との事。9月28日付の命令だったか。

9月29日、午前7時の行軍で東萊を出発した。すでに私物も整

理していたので後始末は簡単だった。兵はリュックサック1個、下士官は梱包1個、営外者は2個、将校は3個に制限され、トラックに積んだ。僕は内地の父母から送って貰った布団で2個にまとめた。リュックサックに必要な物を入れ背負った。配給された乾麵包、米、缶詰、衣類等、結構重い。15、6kgはあったろう。航空長靴は東萊で盗まれたので、軍靴に巻結絆で長剣を吊つての行軍である。飛行部隊は行軍が苦手だが仕方がない。僕は、戦傷で右足首が充分ではないが歩く他ない。天気が良く日中は暑い。小休止、大休止と行軍は続く。

トラックが10台位あるのだが梱包と食糧を運搬するので、人員の輸送はお構いなし。水筒の水はすぐになくなり、川の水を飲むしかない。正露丸を口に入れ一共に飲むしかない。上流の川岸では農婦が洗濯しているが、水は澄んで綺麗な流れなので飲むしかない。背中のリュックサックの重さが肩に食い込む。とうとう缶詰を一つ残して6個余り捨てた。米も靴下2足に入れていたが1足は捨てた。その他を最小限にしても10kg位はある。とにかく重さには関係なく、疲労と苦痛で声さえも出ない。

兵隊達はリュックサック一つだから重い荷物を背負っていたが、途中では地元の農夫の牛車を傭い荷物をいっぱい積んで引かせていた。行軍の速度には合わないが、三々五々で追い抜いて行く。我々の行軍の速度も牛車と余り変わらないし、小休止の時は牛車も追いついていたようだ。

朝から歩き通しで夜中の12時、ある小学校の運動場で大休止となった。灯りはないが燃える梱包で明るかった。梱包の制限が命令されたからだ。【将校2個、営外者1個、下士官なし、但しリュックサックのみ】

校庭にはすでに梱包がトラックで運ばれていたが、自分の梱包を探して整理しようにも紐を解く元氣もなく、焼却するのが精一杯だった。もう梱包の荷物には未練はなかった。内地の父母から送って

貰った布団の梱包も、山と燃える炎の中に投入せざるを得なかった。校庭の周囲には地元人が取り囲んで、梱包の取り引きをしていたようだった。また盗まれた者もいたとか。取引すれば金にもなったものに、後で悔やまれもしたがそんな元氣もなかった。早く始末して休憩時間に少しでも眠りたかった。

大休止も終わり、また出発。眠りながら歩く。とぼとぼと。人と人との間隔があるので、ぶつかりはしない。一途の希望のもと意識が朦朧としながらも、とぼとぼと足だけは前へと何とか動いている。

第六章・終戦　く興安丸と復員く（3）興安丸と玄界灘

やっと夜が白みかけて来た。朝だ、夜が明けたのだ。昨日の朝から歩き、初めて一日中歩いたのだ。だんだんと辺りが鮮明になった。眼下に釜山の港が見えてくる。しかし、港まで行くのにまだ1、2時間はかかるだろう。丘陵地帯から湾までずっと家が詰まっているが、道巾の広い港町である。

突然、行軍が止まった。何やらごたごたしている。目線の先に米軍がいて何やら指示している。やがて理由が分かった。【身につけている武器を全部置いて行け】との事。将校は軍刀を、僕等は長劔を、兵は帯劔を一ヶ所に積み上げたら先頭からまた歩き出した。これで完全武装解除になった。腰の回りが急に軽くなったが、何かもの足りない。革のベルトが泣いている。

釜山港には思い出がある。7年前、入営するため下関港から連絡船の興安丸で、この釜山港に上陸して平壤へ向かう汽車に乗った事だった。昭和14年1月11日だったと思う。冬の玄界灘は雨混じりで荒れ狂い、僕等入営兵はひどい船酔いにやられ、船室で転げ回った。翌朝、釜山港に上陸してある神社の境内で休止したが、船酔いの苦痛は生涯忘れられない。

7年前の軍隊入営のための外地上陸と、今度の内地帰還の上船地とが同じ場所になるとは。しかも、あの時は戦い勇んで入隊した若き21歳の日本男子が、今は戦い破れて故国に帰る淋しさ。一抹の不安はまだ残る。

どこからともなく噂が飛んで来た。耳に入った噂では僕等の到着（集結命令）時刻が2、3時間遅れたため、部隊長が大目玉をくらったとか。トラックで人員輸送をしないで、食料や梱包を優先し運んだため人員の到着が遅れたとの事。その通りだ、僕等を優先して

輸送してくれば兵隊はどんなに助かっただろう。トラックの輸送運搬の過ちが指摘された事で、兵隊か食料かどちらが先か、その重要さが問われたのだろう。食料は没収され兵員は疲労困憊で、軍の集結時間に遅れた事が悔しかったが、ここまで辿り着いて輸送船興安丸の勇姿を見るにつけ、元氣を取り戻した。

7年前の興安丸よ、良くも無事でいてくれたと目頭が熱くなった。この関釜連絡船には以前、四度乗船した事がある。

一度目は入営の時、玄界灘は風雨で時化ていた。二度目は操縦学生の試験に合格して藤原軍曹と北鮮会寧から内地の熊谷飛行学校に入校するため、釜山港から連絡船に乗った。この時は南京虫にやられた思い出がある。玄海灘は凪だった。昭和16年1月頃、僕は伍長の金筋一つ星の姿であった。三度目は退院後、加古川の第一錬成教育隊付になり、少年飛行兵五人と奉天飛行廠に飛行機受領に派遣されていた時、朝鮮京城の第二錬成飛行隊に配属になった。僕は帰隊後、加古川から一人で汽車に乗り下関から連絡船に乗った。昭和19年7月頃だった。地元人とかちゃまぜの船室だったが、シラミや南京虫の被害はなかった。最後は昭和19年の冬で、第二錬成飛行隊の金浦飛行場より少年飛行兵五名を引率して内地の立川航空廠に、隼機の修理完了機を受領に行った時である。この時は、米、乾パン、缶詰を携行して、釜山から船に乗った。玄界灘は静かだった。

第六章・終戦　ゝ興安丸と復員ゝ（4）内地帰還

夕方、港に横づけになっていた興安丸に乗船し、甲板下の大広間に詰め込まれた。薄暮に船は港を離れたので、黒暗みの中にどこへ向かっているのか僕等には分からない。大海原は静かだった。船酔いは感じない。船内は蒸し暑くとても眠れないので、甲板に出てみた。すでに多くの兵員が甲板で涼を取っている。いや、船の行き先を確かめているのかも。寝込んでいる者もいた。寒くなったので毛布を取りに船内に下り、毛布をリュックサックから外し甲板に戻り、そこで眠ってしまった。

翌朝、夜明けに右前方辺りに島が見え始めた。誰かが「対馬だ！」と叫んだ。「対馬だ。対馬だ。対馬が見えるぞ」と叫び声がした。船は確かに内地に向かつて進んでいる。やはり内地帰還しているのだ。復員している事は確実だ。変な場所へ向かつて僕等を運んでいない事は確かだ。安心感が湧いてきた。毛布は湿気でぐっしり濡れてしまったので、持ち帰るのは断念して残した。しかし、帰郷後の衣料不足に惜しまれてならなかった。

戦い破れて祖国に帰る。勇士の面影は今はなく、誰もがむくろのようで無言だったが、命永らえ無事故郷の土を再び踏む事のできる喜びは計り知れない。歓喜の声に送られ故郷を後にした昭和14年1月、下関の岸壁を離れ興安丸で荒れ狂う玄界灘を釜山港に向かった当時が思い出される。七年九ヶ月の軍隊生活が走馬灯のように流れる。朝鮮、満州、内地、ラバウル、ニューギニア、フィリピン、内地、朝鮮と転戦した思い出は脳裏から離れない。陽は高く昇った内地が見える見える。甲板の皆もやはり内地に帰って来た事に安堵感を抱いている事だろう。

やがて船は博多港の岸壁に碇を降ろし、下船も慌ただしく整然と広場に集合した。【ただ今より復員式を行う】との事。【九州と山口県の者はここで解散するから、おのおの故郷に帰るよう、汽車の

運賃は無料で乗車していい。その他、中国関西方面の者は部隊と行動を共にする』という指示があつて復員式は終了。規律の厳しい軍隊生活を送ってきた僕にとって、なんとも呆気ない解散だった。

第六章・終戦　く興安丸と復員く（5）国破れて廃墟あり

『国破れて山河あり』そんな気持ちはしない、「国破れて廃墟あり」。ここから見る博多の街は瓦礫の山だ。よくもこんなにやられたものだ。焼夷弾の雨に防火の手なく、焼け落ちた瓦礫が遠くまで続いている。昭和20年6月19日が福岡大空襲だったようだ。大坂市の空襲跡は上空を飛んでいる時に見たが、実感は余りなかった。博多の地に着いて初めてその惨さに驚いた。多くの市民が犠牲になり傷ついた事だろう。

こんな惨い傷跡を残して戦争は終わっていった。何でもつと早く講話条約が結ばなかったのか。上層部は何を考え、本土決戦と息巻いたのか。何百という都市が爆撃の対象とされ、次第に小都市へと移りつつあったのだろう。遅すぎた終戦詔勅だった。参謀本部の統帥の誤りしか考えられない。しかし今更いくら愚痴っても、どうにもならない。早く故郷に帰りたい。

久留米、熊本方面へ帰る者が7、8名いた。僕等は今から汽車に乗っても夜中になるので一泊をして帰る事に決し、駅前で旅館を探し宿泊を乞う。米がないとの理由で断られたが、おのおの米を残していたので皆で出し合い、夕食と朝食分を頼んでその旅館に宿泊した。

ところが夕食後、旅館内で酒を飲んでいるのか、大騒ぎで歌声がするようになった。何事か不審に思い尋ねると、朝鮮へ帰国する集団が嬉しさの余り騒いでいるとの事。いささか癪に障るが、事を起こしてもまずいので皆、我慢していた。若者達が半強制的に徴要工として、内地の工場で働かされていたのだろう。終戦となり彼等も朝鮮に帰れる喜びなのだろう。

第六章・終戦　く興安丸と復員く（6）重いペダル

翌朝、鹿児島本線の下りは満員だったが、何とか乗車できてほつとした。久留米駅で戦友と別れ、僕は羽犬塚駅で下車し弟の良則が八女中学にいるだろうと思い、訪ねて用務員さんに呼び出して貰った。出て来た弟はびっくりしていた。僕は無事を伝えた。バスの時間もまばらでどうしようかと話していたら、弟が「自分の自転車に乗って帰ってもいい」と言うので、通学用に使っていたものを借りて帰る事にした。

7年前と故郷は何も変わりなく、田舎の事とて爆撃もなく至極平和な山間だった。ゆっくりペダルを踏んで、父母のいる我が家へと砂利道を進んだ。父母もびっくりするだろう。満州にいた姉兄達はどうしているだろう。いろいろ思いながら北川内に入った。まず役場に寄って復員した事を伝えた。役場には大石茂氏と小川亀吉氏の二人がいて、無事復員した事を喜んでくださった。

一刻も早く父母を喜ばしたい気持ちで家へと急いだが、なぜかペダルを踏む足が重くゆっくりだ。確実に故郷は目前なのに、ペダルは重たくなるばかりだった。何かしら嬉しさが無い。『敗軍の将は兵を語らず』ますますペダルは重くなる。父母の顔も見たい。喜ばせたいが敗戦の兵として、また別の感情も心のどこかにこびりついている。

いろいろな複雑な気持ちを抑えて、やっと家の前に着いた。自転車を止め家を見上げた。玄関までの数歩に鼓動が高鳴っていた。玄関の引き戸に手をかけた。7年前と変わらぬ音を響かせ現れた薄暗い室内に、我が家の匂いを感じた。復員の報告をしている僕の目の前に慌てて現れた父母も祖母も満面の喜びの顔だったので、ほつとした気持ちになった。

第六章・終戦　ゝ興安丸と復員ゝ（7）家族の復員

10月の終り頃だったか、千代子姉の婿の片山兄が復員して来た。彼は満州の新京で応召され衛生兵として台湾に派遣されていたとかで、無事復員できた由。しかし、新京に残している家族一族の安否が心に残る。松次兄も終戦直前に新京で召集されたとか。弟の良次も現役の工兵隊として、東満国境の要塞構築に従事していたとか。はたして無事帰国できるやら、まったく分からない。

新京に残る千代子姉と子供4人、マサ子姉と子供1人と、松次兄、弟の良次9人が、無事引き揚げて来るのが最大の心配事であった。大連からの引揚げ船の着く日が待ち遠しい。二度程、博多港まで片山兄と一緒にいったが無駄だった。

三度目の正直というか、一家一族の元気な姿を博多港に出迎えた時の喜びは何事にも代えられないものだった。家からたくさん銀飯の握りと芋饅頭を提げて行った事を記憶している。何よりも、無事引き揚げて来られた事が幸いだった。しかし長野に嫁いだマサ子姉婿の山下義兄は、終戦後シベリアに抑留され、後に戦友の伝言で病死したとの情報が伝わったが、それが本当だったのか。2年を経て白木の空箱で故郷の長野の親元に帰って来た由、痛恨の極みではない。また片山兄の弟、恵吉氏が、一旦は兵役除隊になり警官の仕事に就いていた由。北鮮国境らしかったが終戦となり、住民の暴動に対し日本人居住者の命を守る一念で市街に出て行って、ついに帰らぬ人となった事が何よりも痛ましかった。

多くの犠牲者を出したこの戦争で、僕を始め家族も再び故郷の地を踏みしめられた事に見えない大きな力を感じた。生き残った者として背負わされた役目と命が、そこにある事も感じていた。

第六章・終戦 〽興安丸と復員〽 (7) 家族の復員(後書き)

●2009年10月22日よりSF映画シナリオ「クリムゾンX」を連載。

<http://ncode.syosetu.com/n3801i/>

あとがき

●じっちゃんの新盆

今年の夏で、じっちゃんがなくなつて1年たちます。今日はじっちゃんの新盆です。ぼくが朝起きて部屋のかたづけをしているところに、近所のおばあちゃんがお参りに来てくれました。しばらくすると、花屋さんが来て花をかざってくれました。ぼくは、ぶつだんにじっちゃんから教わつた、囲ごの石と戦その時にじっちゃんがもらったメダルを置いてあげました。ふと、じっちゃんの写真を見ると、なんだか喜んでるようにも見えました。

親せきの人達が、福岡や山口県から来てくれました。その後、おぼうさんが来ておきようが始まると、みんなむねの前に手を合わせました。おきようのさい中に、家のねが人の間をすりぬけて、おぼうさんのなりにすわつたのでびっくりしました。そこでじっとおぼうさんのおきようを聞いていました。きつと、家のねもじっちゃんの新盆を悲しんでいるのだと思いました。

1年前の8月20日、ぼくの新道の試合が北九州で行われていました。その時、じっちゃんの病院から電話がありました。

「すぐ病院に来るように」

との電話です。ぼくは、試合のこともわすれ、じっちゃんのことばかり考えていました。病院に近づくにつれ、心ぞうの音が大きくなりだしたのが分かりました。でも、病院に着いた時には、いつものじっちゃんはいませんでした。

「おかえり。よう来てくれたね」

と、笑顔で迎えてくれるじっちゃんではなく、口を閉じて静かに目をつむっているだけのじっちゃんでした。今もその時のことはわすれません。

じっちゃんは、ぼくと話をしたり、一しよに囲ごをしたりして、とてもやさしいじっちゃんでした。また囲ごをしたかったのに、も

う二度とできません。じつちゃんは、よくこんな言葉をかけてくれました。

「囲ご楽しかったよ」

その言葉をぼくは、一生わすれません。今でも、じつちゃんのことを思い出すと泣いてしまいます。どこかでじつちゃんが、

「おかえり」

と言ってくれているように思います。

筆者の孫：Y・H

●父の思い出

父は復員後、家業の農業を営み、茶、椎茸、米等を作っていました。私がまだ小学校入学前だったある日、雨の中の田んぼで草取りをしている父に「お父さん、風呂が沸いたよ」と声をかけました。父は風呂から出て来ると「気分が悪い」と言っ、横になっ、苦しみました。夜半だったか、診察に来たお医者さんが苦しむ父を車で久留米医大に急いで運んでくれた事を憶えています。その時は、十二指腸が破れ死線を彷徨う3度の手術をしたそうです。

長い日々が過ぎた夏の日、父はオレンジ色のタクシーに乗って帰って来ました。骸骨のように痩せ細り、夏の間ずっと床に伏せていました。そんな父に無理なお願いをして、近くの谷に魚釣りに行っ、た思い出があります。紺色の浴衣姿で麦藁帽子を被り桑の木陰で見ている父の前で、私は得意気になっ、て魚を釣っ、て見せました。餌は父が捕っ、てくれた蜂の巣の幼虫でした。無口でとても怖かった父の優しい思い出です。

そして父は祖父が死んだ後、仏様のお世話をするようになり50歳を過ぎてから仏教に目覚め、母と共に聞法会に通う日々が続いていました。それ以来、性格がすっかり変わっ、てしまっ、い、あれ程怖かった父が穏和になっ、て御仏に向かい、朝夕に何度となく手を合わせ、ていました。

80歳になり糖尿病、C型肝炎などの病気はありましたが、デイサービスを利用したり縁側にて読書に勤しんだり、囲碁の勉強をパ

ソコン相手にする等、元気な毎日を過ごしておりました。

しかし、肝臓ガンが進行した平成17年の夏、他界しました。87歳でした。生前中において皆様と良き御縁が持てました事を、父は深く感謝致しておりました。父に代わり御礼申し上げます。

長い間、読んでいただきありがとうございました。 編者：M・

H

あとがき（後書き）

【PLUSMAKERからのコメント】長い間、読んでいただきありがとうございます。次回作“深紅10と永劫環の追跡者たち（仮）”でお会いしましょう。

●2009年10月22日よりSF映画シナリオ「クリムゾンX」を連載。

<http://ncode.syosetu.com/n3801i/>

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5303f/>

美しき翼～父の回想録～

2010年11月19日10時25分発行